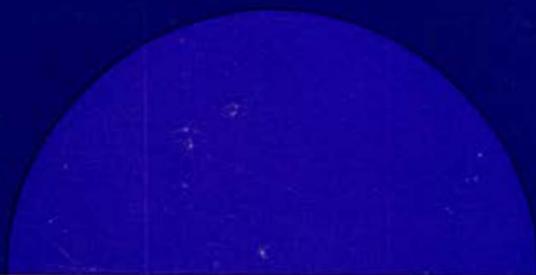


日本への回帰

大学教官有志協議会 編
国民文化研究会

第11集



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会
編

日本への回帰 (第十一集)

—第二十回学生青年合宿教室(阿蘇)の記録より—

昨年、国際政局の動きの中で、日本に最も重大な影響を及ぼすものは、サイゴン陥落（四・三〇）によるベトナム戦争の終結であらう。大国の介入による三十年の長い内戦は、北ベトナムの南ベトナム制圧といふ形で終り、ラオス、カンボジャを含めて、タイを除くインド・シナ半島の大部分は共産化の運命を免れなかった。われわれはこの激しい現実から何を学ぶべきであらうか。

その一つは、ある民族が己れの国家を持ちたいといふ願望がいかに強烈なものであるかといふことだ。既に百年前に、父祖の苦闘の中から近代国家を作り上げて来た日本が、余りにも自明な国家の存在を忘れ、呪咀や憎悪の念をもって国家を見る多くの青年を生み出してしまったことに、このあたりで気づかねば、事態はとりかへしがつかぬことになるのではないか。ナショナリズムは、ほとんど深層意識といつてもよいほど、人間の精神にとって根源的な力であり、それを最大限に利用してゐるのが他ならぬ共産主義者である。一九五四年、ホーチミンがフランス軍を破って共産政権を樹立した時、百万人近い人が南へ脱出したことを思へば、「民族統一」「解放」の美名のもとに、南ベトナムにいかなる事態が進行するか、監視を怠らぬ必要があらう。ベトナム戦争から学ぶべき第二の教訓は、共産主義国家は、情勢いかによつては容赦なく国際協定を破るといふ事実である。パリ和平協定の条文を虚心に読めば、「北」の協定

侵犯は明白であり、米軍撤退によって生じた空隙に乗じて、十五ないし十八師団、三十万近い正規軍を「南」に送りこんでゐる。それらの大軍は中ソの数十億ドルに上る軍事援助の重火器に装備されてゐた。「北」が正義で「南」は不正義だったから、「北」の勝利は道徳的にも当然だと説く感傷的文化人の解説が一時き紙面をにぎははせたが、相も変らぬセンチメンタリズムといふほかはない。「北」の勝因は、圧倒的な武力である。社会主義イデオロギーが帝国主義に勝利したといふのは妄想であり、曲論であらう。ソ連も中国も、パリ協定の調印国の一つであり、「北」の条約遵守を監視すべき立場であつた筈だが、もとより中ソはそれほど観念的ではない。日本のインテリ層はマルクス主義のもつ徹底した冷酷さに恐しく無感覚といふ外はない。

さういふ点で、昨年十月二十四・五の両日、朝日新聞とドイツ大使館の共催で行はれた「日独シンポジウム」基調報告における、西独代表の発言はわれわれに多くのことを考へさせた。まづ先進産業社会における「革新」の役割について、ドイツ社会民主党が政権担当能力を持つに至つた原因として、一九五九年のゴードスベルク綱領で「マルクス主義からの意識した訣別だつた」と明快に述べてゐる。また、日本の論壇で横行してゐる「デタント」（緊張緩和）論とは全く違つた次のやうな発言を聞くこともできた。△ソ連では、デタント政策の本質をまったく異つた形で、通常「平和共存政策」という表現であらわす。共存による「平和状態」は平和を意味すべきものではなく、戦闘意欲をわき起させるためのものである。「階級闘争」は世界

的規模で進行しなければならぬ。戦略的には、平和共存は利害の調整ではなく、共産側の完勝に至るまでの戦闘と奸智である。日本のジャーナリストの発言が、この徹底したリアリズムの前でいかに間が抜けて聞えることであらう。「松生丸事件」といひ「覇権問題」といひ、「北方領土」といひ、われわれには余程の緊張がなければ乗り切れないといふ感じがする。要は思想的にマルクス主義的発想と徹底して対決しなければどうにもならないのであらう。

われわれが最近の時代風潮の中で最も心痛めるのは、「天皇」および「天皇制」に対する、公然、隠然たる攻撃である。沖繩御訪問の皇太子御夫妻に向つての火炎瓶投擲、未遂に終つたとはいへ、過激派による陛下のお召列車爆破計画など、抵抗こそ最高の美德と教へ込んだ戦後教育の、余りにも当然な一つの帰結であらう。しかし、さういふ状勢の中で、九月三十日から十月十四日まで、半月といふ長期間の御訪米が行はれた。それが、いかなる外交的天才も及ばぬほどの成果を収めたことに対して、今更ながら陛下の無私の御人格と、皇室の持つ文化伝統の深さに心打たるる思ひである。

終りに、講義要旨の掲載を快くお許し頂いた、福田、木内両先生に深甚な感謝を申し上げる次第である。

昭和五十一年三月

大学教官有志協議会

国民文化研究会

目次

はしがき	1		
一、学問・人生・和歌			
「戦後思想」の克服のために	福岡教育大学教授	山田輝彦	5
いま日本青年が思ひをいたすべきこと			
国民文化研究会理事長	小田村寅二郎		27
学問 —いのちに至る道—	修猷館高等学校教諭	小柳陽太郎	51
若き友らへ語りかける言葉			
電源開発株式会社北本事務所所長代理	長内俊平		75
今上天皇のお歌について —和歌と学問—			
亜細亜大学教授	夜久正雄		91
短歌創作のてびき	九州大学医学部大学院二年	前田秀一郎	115
若き日の吉田松陰	三池高等学校教諭	志賀建一郎	141

二、講義

最近の日本の動きは世界の驚きである……………

世界経済調査会理事長

木内信胤……………167

現代の病根——見えざるタブーについて……………

文芸評論家

福田恆存……………201

三、青年研究発表

学問のあり方について思ふこと……………

大阪大学大学院博士課程

東中野修……………231

教壇に立って思ふこと……………鹿兒島県高尾野小学校教諭

内山なな子……………243

天皇陛下の御心にふれて……………九州大学歯学部助手

吉田哲太郎……………255

第二十回「合宿教室」のあらまし……………西南学院大学法学部四年

(附)合宿歌集

西山八郎……………267

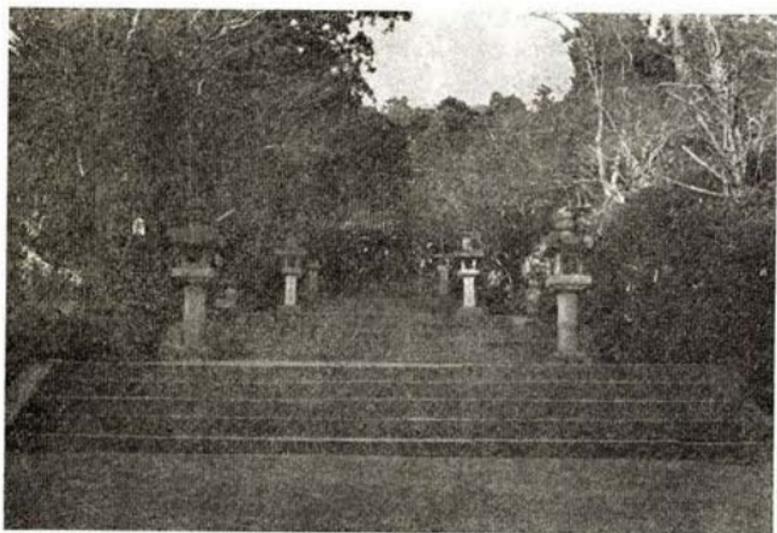
あとがき……………324

△国民文化研究会図書目録▽

■ 学問・人生・和歌

「戦後思想」の克服のために

山
田
輝
彦



知識人の役割

国家と歴史の欠如

人間の再建

カット・観心寺参道

知識人の役割

戦争が終って、三十年といふ歳月が流れました。私どものやうな年令の者には、戦ひの終わった八月十五日の日の、空しいやうに晴れ上った青空が、今もはっきりと目に浮んで来ますし、戦ひに斃れて行った多くの友人たちの面影が、昨日のやうに鮮かに蘇って参りますが、さういふ哀歎をよそにして、三十年といふ月日が流れ去ったのだといふ感慨が一しは痛切に胸に迫ります。

演題に沿ってまづ「戦後思想」といふ言葉について考へてみませう。私どものやうに、戦前の思想を知つてをり、戦争の時代を生きた者は、それとの比較において、戦後思想といふものを相対化して見る事ができます。しかし、諸君のやうに三十年前後にお生れになった方にとっては、戦後思想こそ、そのただ中で諸君が己れの人生を形成された当の思想であるといふことになるのでせう。

福沢諭吉は明治の最大の啓蒙家であり、戦後は民主主義のチャンピオンのやうに偶像化されて受け取られました。彼が生きた時代と現在とは非常によく似てゐると思はれます。諭吉は明治八年『文明論之概略』といふ有名な書物を書きましたが、その序文の中で自分の置かれてゐる位置を「恰も一身にして二生を経るが如く、一人にして二身あるが如し」と言つてをりま

す。自分は江戸時代といふ朱子学的価値観の支配した世界で青年期を形成した。そして、維新の動乱を潜り抜けて、西洋の思想を真正面に受けとめる時代に生きてゐる。さういふ自分の置かれてゐる時代といふものは、考へ方によっては実に生き甲斐のある時代だ。なぜならば、自分が前半生において身につけたものと、ヨーロッパといふ全く違つた価値を徹底して比べてみることが出来る。つまり、自分の生身の實驗によつて二つの価値をつき合はせ、さうすることによつて、日本に役立つものをできるだけ主体的に吸収しようとする態度が論吉の場合には実ははつきりしてゐるのです。現代の啓蒙思想に比べて、論吉の場合は日本を世界に向つて開かれた国にし、ヨーロッパと対等に物の言へる国にするために主体的な選択が行はれたわけです。維新戦争の当時、「アメリカ領事館から論吉の身辺保護の申し出があつた時、彼は「学問は学問なり。立国は立国なり」といつて、その申し出を断つたのです。新しい学問をあなた方に学ぶ点では、あなた方を先生にして勉強しなければならぬ。しかし、そのことと、私ども日本人が自らの国を立ててゐることとは問題が違ふ。例へば動乱の中で死なうとも、アメリカやイギリスの保護を受けることは絶対にしないと断つたといふのです。論吉といふ人のイメージの中に、このやうな日本人としての確乎たる自負心を読み取ることは、余りなされなかつたのではないか。戦後の一連の思想改革は、第二の開国といはれるやうに、一種の啓蒙思想だと言へると思ひますが、その啓蒙に取り組み、いはゆる戦後思想の形成にあづかつた知識階級の人



々の心の姿勢は、論吉の場合とは全く反対になってるのです。

それは、敗北といふ事実の上に展開されたものですから、已むを得ない側面もたしかにあったでせう。戦後思想を形成する重要な役割を演じた人々の多くは、占領軍の権力に便乗して、己れのイデオロギーを拡張しようとする姿勢を取ったのです。それ故、戦後思想とは、日本人の思想を占領軍の思想の線に沿って弱体化してゆくといふ意味の啓蒙思想であったと概括できるでせう。「八月十五日のまたぎ」と言ふことが言はれましたが、価値観の違った二つの世界を、いかに巧みにまたぐかといふことに、昭和の知識人たちは日も夜も足りないやうな対処の仕方をしたのです。その最もいい例が、自分のイデオロギーの正当性を証明するために、戦前の思想を裁くといふ立場を取った人たちです。戦没学生の遺稿集「きけわだつみのこゑ」の編

集の態度は、戦後の進歩的知識人といはれる人々の、最も典型的な流行思想への便乗の仕方を示してゐます。週刊誌や反戦映画や、一部の暴露小説には、戦没学生たちは、国家を呪ひ、自分の運命を呪ひながら死んで行ったやうな誇張された表現が多いのですが、事實は決してさうではなかつた。苦しみや悩みがなかつたといへば嘘になるでせうが、大部分の人々は、最終的には凛々しく己れの運命を甘受して死んで行きました。同時代の者として、このことだけははっきりと証言して置きたいと思ひますし、その戦死者を偲ぶ気持が、私どもの戦後を支へて来た一つの支へでもあつたのです。しかし、残念ながら世の大勢は、さういふふうには戦前戦後を通じて、自分の経験を持続する、戦前と戦後の全く違つた価値観を、自分の人格の中で苦痛に耐へながら統一してゆくといふ方向には行かなかつた。非常に安易に戦前を切り捨てる。精算する。あるひは自己批判する。八月十五日以前の日本を切り捨てることによつて、自分の新しい生き方を見定めてゆくといふ風潮が圧倒的になりました。その風潮が一番よく出てゐるのが、この『きけわだつみのこゑ』の編集者の態度であつたと思ひます。小林秀雄先生の「政治と文学」(昭和二十四年)の一節を読んでみませう。

△——前に「きけわだつみのこゑ」に触れましたが、あの本を読んだ時、直ぐ気付いた事があつた。が、言へば誤解されるだけと考へて黙つてゐた。それは学生の手記に關してではない。編集者達の文化観の性質についての感想であつた。手記は、編輯者達の文化観に従つて取

捨選択され、編輯者達によってその理由が明らかにされてゐたからである。戦争の不幸と無意味を言ひ、死に切れぬ想ひで死んだ学生の手記は採用されたが、戦争を肯定し喜んで死に就いた学生の手記は捨てられた。その理由が解らぬなどと誰も言ひはしない。理由には条理が立つてゐるのである。ただ、私は、あの本に採用されなかつた様な愚かな息子を持った両親の悲しみを思つたのです。私は、さういふ親を知つてゐた。彼は息子を軍国主義者などとは夢にも思つてゐなかつたし、彼自身も平和な人間であつた。戦犯が死刑になる世の中で、戦没学生の手記が活字の上で裁かれるなど何の事でもない。それはよく解つてゐるが、そこに何の文化上の疑念も抱かないといふ事は間違つてゐると思ひます、文化が病んでゐるのです。▽

「文化が病んでゐる」とは、文化といふものを図式的なイデオロギーで裁断するといふ独断を疑はなぬことです。同胞が血を流して戦つた歴史を、唯物史観といふ一片の論理で裁くことを指摘されたのだと思ひます。

△遺言にイデオロギーなど読んではいけないのである。私は編輯者たちの良心を疑ひはしないし、揚足が取りたいのでもない。誤解しないで戴きたい。だから問題は微妙だと言つたのです。たとへ天皇陛下万歳の手記が幾つ採録されてゐたところで、どれもこれも千萬無量の思ひを託した不幸な青年の遺言であつたといふ事に関して、一般読者は決して誤読しなかつたであらう。さういふ人間の素朴な感覚には誤りがある筈がないと私は思ふ。編輯者たちは言ふかも

知れない、私達は感情を殺さなければならなかったのだ、と。進歩的文化の美名の下にであるか

死者のありのままの声を、生きてゐる者が選別したのです。これは歴史といふものに対する大変な越権だと思ひます。小林先生はその最後に次のやうに言つてをられます。

△彼等はそれと気付かず、文化の死んだ図式により、文化の生きた感覚を殺してゐたのである

祖先のいとなみの蓄積と、意志の持続の中にしか、生きた文化といふものはないのです。それを一片のイデオロギーによつて、しかも良心と社会正義の名において裁くのですから虚偽は二重になるのでせう。根本は、一人の人間が全身全霊をかけて行つた行為といふものに対する畏敬の感情の欠如にあるのです。それが、戦後の軽薄な進歩主義者たちの犯した最も重大な過誤だらうと思ひます。さういふ人から、本当に青年の心を震撼するやうな思想は生れやう筈がないし、彼らがスローガンのやうに繰り返して来た平和と民主主義といふやうな言葉が泥に塗れてしまつたのも当然のこととせう。

国家と歴史の欠如

三島由紀夫さんが、自決の八ヶ月ほど前に、小高根二郎氏の著書『蓮田善明とその死』に序文を寄せてゐます。蓮田善明は成城高校の教授をしてゐた国文学者で、三島さんの才能を最も早く認めて「文芸文化」の誌上に発表した方です。終戦直後、シンガポールの近くのジョーホルバルで軍旗焼却祭のあった時、連隊長が戦争責任について口きたなく天皇を誹謗したのを聞いて、ピストルで射殺し、自分も脳天を撃ち抜いてその場で自決したのです。この蓮田氏への思慕が、三島さんの死の一つの契機であったことは周知のことなのですが、その序文の中で、三島さんは戦中、戦後を通じて変らぬ日本近代知識人の性格を痛烈な言葉で批判してゐます。△その怯懦、その冷笑、その客観主義、その根なし草的な共通心情、その不誠実、その事大主義、その抵抗の身ぶり、その独善、その非行動性、その多弁、その食言▽といふやうに。「知識人」といふ言葉は、まことにいやな言葉ですが、彼らは国家権力に庇護されて、あり余る自由を享受しながら、自らを生み育てたこの祖国の伝統を、いかに冷笑し、揶揄し、抵抗のポーズを示して来たことでせう。論吉のやうに、自分の全エネルギーを傾注して、日本のために啓蒙するのではなく、三島さんが激しい憤怒をたたきつけたやうな劣弱な精神で、日本人の魂を解体するお先棒をかついで来たのです。さうして、「戦後思想」といはれる世にも奇妙な考へ方、世界に適用しない無類に特殊な思想が生れて来たのです。

まづ、戦後思想といふものは、日本民族を弱体化してゆくための啓蒙思想であつたといふ点

を踏まへて考へなければなりません。啓蒙思想は、その本質的な部分は合理主義です。それも諭吉のやうな強靱な志に支へられた痛烈な合理主義ではなく、残念ながら占領軍におぶさつた、まことに軽薄な合理主義であつた。そして、合理主義といふものは、人間の内なる自然といはれる感情を、思想の領域からできるだけ排除しようとするのです。しかし、感情を除外した思想といふものは、人間を動かすトータルな思想になり得ないのです。例へば、戦後思想の脆弱性の原因の一つは、「国家」といふ視点が欠落してゐることとせう。国家はわれわれに基本的人権といふやうなものを与へて保護する機能を持つと同時に、われわれを死刑にするといふ法的な力も持つてゐる。つまり、われわれの現実生活を規制するところの最終的な単位です。ところが、その国家の名において戦争が行はれ、大きな犠牲を強ひられたところから、戦後は国家は最大のスケープ・ゴート（贖罪羊）にされてしまひました。一切の悪の根源は、天皇制国家であつたといふことになりました。しかし、国家といふものは、人民と主権と領土があれば成立するといふやうな簡単なものではありません。さういふ外にある形、機構、制度、マルクス主義者のいふ「権力」だけが国家でせうか。最近の学生諸君が、国家といふ言葉から直ちに連想するものは警察と自衛隊です。あるひは議会であり、最高裁判所です。なるほど国家といふものは尨大な国家機関を持つてをり、さういふ意味で国家とは国家権力であるといふのは一つの事実です。しかし、国家といふものは、われわれの個の生命を包括して永続する一

つの大きな「生命」であり「価値」でもあるのです。私はかつて前者を「外なる国家」、後者を「内なる国家」と名づけたことがあります。「外なる国家」は、国家学や政治学の対象となり、知性によって把握することができます。しかし生命としての国家、価値としての国家といふものは感じるることによって納得する外はないのです。そのためにこそ国歌や国旗のやうなシンボルがあり、公教育の場で国のいのちを感じさせる教育をどの国でも当然のこととしてやっております。念のために申しますが、それはイデオロギーとしての「国家主義」とは全く別なことです。式日に国旗を上げるか、上げないかを職員会議の多数決で決めるといふやうな国がどこにあるでせう。全く血が逆流する思ひです。

さういふ、国家蔑視の感情は大体定着してしまひました。国といふ言葉を聞くと、条件反射的に、国家権力、個人の自由を抑圧する悪、一刻も早く打倒すべきものといふやうに短絡してしまふのです。一九七三年八月三十日に総理府の青少年対策本部から、世界青年意識調査といふのが発表されましたが、日本の青年の意識は丁度世界の孤島のやうな状態になってをります。性悪説の肯定者が三人に一人といふ高率で世界一であることも心配の一つですが、国家に対する不信感の表明でも積極、消極を合せて八九%といふ高い数字を示して、イギリス、アメリカの五〇%前後を遙かに引き離して世界一の数値を示してゐます。とくに同じ敗戦国である西ドイツの一三%といふ数字と比較して、日本の場合の青年の意識は、明らかに人為的に作り

出されたものです。この、世界でも異常な数値を作ったのは、ジャーナリズムと戦後の教育だと断定しても間違ではないと思ひます。私も戦後に教師をした者として、その責任の一半を担はなければなりません。国家といふものの欠落した思想は、現実的な力といふものを持ち得ないので。後進諸国を動かしてゐる原動力は血醒いナショナリズムであり、それを最大限に利用してゐるのは共産主義者であることは、ベトナム戦争の事実が明白に物語つてゐます。われわれは、祖先の英知によつて、既に一世紀前に肅清や強制収容所のやうなプロセスなしに、立派に近代化をなしとげました。今の人は、国家の恩恵をあり余るほど受けながら、丁度空気の存在を意識しないやうに、余りにも自明なこととして、国家の存在を無視しがちです。無視するのみでなく、その存在を呪咀するところまで来てゐるのです。

戦後思想の二番目の特色は、徹底した歴史の歪曲といふことでせう。戦争中の皇国史観のやうに、国家や民族の長所を誇張して、それを因果関係で結んでゆくことによつて、いくらでも美化された歴史を書くことはできます。皮肉なことに、社会主義国ではもっぱら国定の史観による美化された歴史が教へられてゐるやうです。しかし、歴史とは本来人間の試行錯誤の跡です。すから、プラスの面もあるし、マイナスの面もあります。さういふ、ありのままの姿を謙虚にふり返つてみる態度が前提であるべきなのに、いはゆる皇国史観の裏返しのように、日本の歴史は、日本人の祖先の罪悪史のやうな観を呈しました。例へば古代は奴隷制社会で、天皇が人

民を酷使して大仏を作ったといふやうに白紙の小学生に教へれば、天皇は悪魔だといふ作文が出て来るのは当然でせう。歴史がサディズムの歴史、自虐史になってしまへば、民族としての、人間としての喜びが出て来る筈はない。さういふ虚偽の歴史は、青年を不毛のニヒリズムに追ひこむだけです。大学紛争を単に政治的な次元で見るのは間違ひで、いはば青年の心の中に感情が正しく位置づけられなかったところから起つた情念的な叛乱だったと思はれるのです。歴史の世界から喜びを汲めない理由は、やはりマルクス主義の影響によつて、歴史が社会構造史になつてしまつたこととせう。いはゆる「社会のしくみ」を教へる、支配、被支配の関係を教へるといふ教へ方です。そこには生きた人間がゐらないのです。岩波新書の『昭和史』が出た時、亀井勝一郎さんが人間不在の歴史といふ批判をしました。が、「社会のしくみ」といつても階級闘争の立場から教へるので、歴史はすべて社会主義社会を実現するためのプロセスとしてしか扱へられない。『わだつみのこゑ』の編集者たちが、戦死者のなまの声を自分たちのイデオロギーで選別したやうに、戦後の日本史の主流を占める学者たちは、将来の社会主義社会実現のためのプロセスとしての立場で、歴史事実を選別していったのです。近代日本がその興亡を賭けた日露戦争は、満洲の市場獲得のための帝国主義侵略戦争であつたといふのです。ロシヤ革命の指導者であつたレーニンさへ、日露戦争の進歩的意味を肯定してゐるのに、日本の勝利を申し訳ないことのように記述する歴史家が何と多いこととせう。人づてに聞

いたことですが、日露戦争に関する史実については、ソビエトの教科書の方が遙かに正確な記述があると聞いてをります。明治を教へる時に、日露戦争の將軍のことよりも幸徳秋水の方にずっと大きなウエイトを置くといふのは、何としても納得しがたいことです。それはやはり歴史といふものを虚心に見ないからだと思ひます。将来の社会主義革命のプロセスとして歴史を見る場合には、日露戦争の栄光といふものはマイナスになる。幸徳秋水の反逆の方はプラスになる。はつきりしてゐるのです。さういふイデオロギーで歴史を裁くのは文化に対する一つの冒瀆です。小林秀雄先生は、歴史は合理的に発展する図式のやうなものではない。マルクスやヘーゲルが考へたやうな図式の中を歴史が流れてゐるのではなく、マルクスやヘーゲルが歴史の流れの中の一人物に過ぎないと言つてをられます。歴史主義といふのは、現代のインテリの抜きがたい一つの妄想ではないでせうか。過去に対する愛惜の情があつて、歴史は始めてその姿を現はして来るのだらうし、自分の器に應じて、歴史上の人物は語りかけてくるのではないでせうか。自分が小さくて卑しければ、その自分になぞらへて歴史上の人物がイメージされるのではないか。現在は歴史上の人物を俗物の次元に引き下すことに、学者や考証家が情熱を傾けてゐるし、読者の方も偉人や英雄を俗物の境地に引き下すことに、サディズムを感じてゐる。歴史は豊かな流れであることをやめて単なる図式となり、見すばらしく瘦せてしまつたといふ感じですよ。

最後に、戦後の思想は「死」といふものを排除する、あるひはそれを回避する思想になってしまったといふ点です。戦争中は常時、死といふものに直面してをりましたので、その反動と思はれますが、死といふものを意識的に除外する。しかし、死の問題をよけて通るやうな楽天思想が、本当に人を動かす思想たり得る筈はありません。フロイドが、人間の中にはエロスⅡ「生」の欲求と共に、タナトスⅡ「死」への潜在的願望があるといつてゐます。「死と太陽は見つめることができない」と申しますが死はやはり怖いから、できるだけ意識から排除しようとする。しかし、死はさげられないものであり、それを徹底的に考へることからしか、本当の思想は生れて来ないので。人間は所詮は一人で生れて、一人で死んでゆく孤独な存在です。孤独であるが故に、生涯の伴侶はかけがへのないものであるし友の存在もかけがへのないものになるのです。一人一人の身に沁みるやうな孤独感なしに、口先だけで連帯とか友情とかいふやうに言ひ過ぎて来たのではないでせうか。こゝにも言葉の風化現象の一つが見られます。生命的な深い欲求が真の友を呼ぶのです。だから、自分に友達は必要でないといふ人は、よほど強い人か、よほど呑気な人かどちらかです。現代の人物は、厳肅な死といふ事実を、じつと見つめる力がなくなつてしまつたのです。人間は死なねばならぬ存在であることを納得した時、始めて国家といふものの意味が分るのです。自分の有限の生命を、あとに伝へてくれるものが国家でせう。その国家の具体的な内容は、生きた文化でせう。自分の肉親であり、子供であ

り、次代の人々でせう。だから、人間が本当に死ぬといふ痛感がなければ、歴史とか、国家とかいふものはナンセンスになるわけです。さういふ意味で、戦後の人間観は徹底して世俗的になってしまったといへると思ひます。

人間の再建

今まで申し述べて来ました戦後思想といふものの内容は、実は日本の明治以降の近代化の中で、徐々に形成されて来たものが、戦後になって顕在化したといつてよいと思ひます。大体、日本で国家といふものを呪咀するやうな考へ方、歴史を階級的にしか見ない考へ方、楽天的なヒューマニズムなどが定着して来るのは、日露戦後、明治四十年前後で、現代の思想問題の殆んどすべての萌芽はその時代に出てをります。その中で、現代のインテリの最大の妄想の一つといはれる歴史主義と並んで、もう一つの強力な思想が出て来ます。それは自然主義といふ言葉で表現されるやうな考へ方です。これは、人間は動物であるといふ考へ方、つまり生物学的人間観といふべきもので、田山花袋が『蒲団』といふ小説を書いたあたりをきっかけにして、インテリの思想の中に根強く定着して来ました。この自然主義的人間観は、単に文学運動の領域を越えて、現代のインテリを呪縛してゐるもう一つの大きな妄想といふやうに考へられま

す。自我の欲望が究極の価値を決定するわけですから、自我が一切の価値基準であり、それよりも高い次元の価値を否定してしまひます。したがって自然主義を徹底させてゆきますと、政治的にはアナキズムになります。幸徳秋水の大逆事件が明治四十三年であることは、なるほどと首肯されます。それから、もう一つ例へば「白樺」の思想が次第に支配力を獲得してゆくのもその頃です。人間の存在様式の中で「個人」といふのは一つの抽象であつて、具体的には、家族、地域社会、国家といふ運命共同体の關係の中である役割を演じながら生きてゐるのが実相です。ところが「白樺」の思想では、さういふ血脈的な關係を一切捨象して、いきなり個人と人類といふものが直結するのです。これが現在のインテリの思考の中心をなしてゐる無国籍のヒューマニズムの原型です。

さういふ価値の混乱期に最も強い批判を示したのが、文学者では夏目漱石と森鷗外です。鷗外は、初期には『舞姫』をはじめとする留学三部作といはれる非常にロマンティックな作品を書きましたが、それから約二十年間、文学活動が中絶され、明治四十二年頃から再び活躍を始めます。その頃、鷗外の書いた『妄想』を始めとする一連の思想小説を読むと、鷗外のやうな人でも、やはり思想的な迷ひがあつたことがよく分ります。しかし鷗外といふ人は、現代の反体制の思想家のやうに、体制の外側にあるて、自分は傷つかないで体制を批判するやうな人ではなかつた。自ら新国家の建設者の一人としての批判であつたといふことが、現在の知識人の体制批

判とは根本的に違ふところです。その鷗外が、眠つてゐた侍の魂をゆり動かされるやうな衝撃を受けたのが乃木大将夫妻の殉死事件であつたことは周知の通りです。その鷗外が最初に乃木さんと遭遇しますのは、明治二十年四月十八日、ベルリンにおいてです。鷗外はその時二十六歳でした。それから実に二十五年といふ間、鷗外は乃木さんといふ一つの人格に打たれて、心からの敬愛の念を捧げてゐますし、乃木さんもまた息子のドイツ語の参考書について鷗外にたずねたりしてをります。鷗外がこの世で最後に乃木さんと会つたのが、明治四十五年四月二十四日、これから約半年経つて、九月に乃木さんは殉死するわけです。その日の鷗外日記には次のやうに記されてをります。

△雨。上原大臣官邸の晩餐会にゆく。乃木大将希典来て赤十字に關する意見を艸せしを謝し、Carmen Sylva 妃に逢ひしことを語り、白樺諸家の言論に注意すべきことを托す。》

この、カルメンシルバーといふのは、戴冠詩人といはれたルーマニアの妃で、乃木さんは萬国赤十字大会に出席の途次、ルーマニアでこの方にお会ひしたといふことです。注意すべきは、この日記の一番最後のところ、「白樺諸家の言論に注意すべきことを托す」といふ部分です。乃木さんは「白樺」のやうな発想の仕方、つまり無制限な自己主張と、国家といふ秩序は必ず相対立する結果になるだらうと憂へられたのでせう。事実、武者小路とか志賀とかいふ人の思想は、大正期の教養人たちに強大な支配力をふるふことになつたのです。鷗外は乃木殉死の報

を聞いた時、まづこの最後の委託を思ひ出したに違ひありません。さうして、御大葬の斎場から帰ると直ちに筆を取って『興津弥五右衛門の遺書』を書きます。その中で「総て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物無かるべし」といふ言葉が出て来ます。人間には功利を越えて命を捧げるべきものがあるといふ確認です。だから、鷗外が歴史小説を書いた動機の一つは、明治末期における思想的混乱に対する、彼なりの一つの徹底した批判であつたと言つてよからうと思ひます。

人間は所詮は性欲や金銭欲に支配される、哀れむべき存在だといふ人間観は、現在の殆んど人の心に定着してしまひました。週刊誌やテレビが四六時中流してゐる人間像は、いかに人間といふものは矮小でさもない存在かといふことです。われわれは全く息苦しいやうな人間観の中に放置されてゐます。しかし、日本やヨーロッパの秀れた思想家たちは、さういふ時代の風潮にはつきりとした反論を提出してゐます。その一例は、スイスのパーゼル大学の世界的な生物学者、アドルフ・ポルトマンです。彼は『人間はどこまで動物か』（岩波新書）の中で、現在のサルトルなどを含めて、人間を動物におとしめるやうな一つの強力な考へ方に対して、強い反論を示してゐます。次の一節は、まことに印象深い言葉です。

△自己の生命を犠牲にしてまでも、一つのことには献身するといふ種類の行動は、人間はさまざまの目的のためにできるが、動物には決してみられない、情欲のともなはないこの愛と献身

といふ高度な能力は、たとへどんなに多くのひとびとが、このもつとも偉大な可能性を使はずに一生をすごし、また最高の人格者でさへ、時をりこの点から通ざかつてゐるとしても、それはなんといつてもただ人間にだけ与へられたものである。動物の行動は、環境に拘束され、本能によつて保証されてゐると、われわれは簡単に特徴づけることができる。これに対して、人間の行動は、世界に開かれ、そして決断の自由をもつ、といつていいだらう。▽

私どもは、現在のような状況の中では、ともあれ自分もまたそのみじめな人間中の一匹ではあるまいか、といふ思ひに圧倒されることがあります。しかし、さうではないのだといふことを、勇気をもつて確認したいと思ひます。深沢七郎氏の『檜山節考』は、姥捨伝説を原拠とした小説ですが、信州あたりに想定されたある山村では、老いて労働力を失つた老人は、自発的に檜山に登つて餓死することになつてゐる。孝行息子の辰平が、母親であるおりん婆さんを、雪のちらつき出した檜山の頂に捨てて涙を押へてかけ下りて来るといふ悲劇的な作品で、貧困といふものの残酷さを浮き彫りにしたやうな作品ですが、いかにも暗澹たる世界です。原拠である『大和物語』には、一度は養母を捨てた息子が、帰つて長い間の養育の日々を思ひ、山の端から明るい月が上つて来たのを見て「わが心なぐさめかねつ更級や姥捨山に照る月を見て」と詠んで、迎へに行つてつれて帰つたと書いてあります。古典世界の間人像の方が、ずっと健康で救ひがあります。歴史は進歩するなどといふことは、人間の内面に関する限り、軽々には

言へないのではないか。怖るべき人間崩壊が進んでゐるといはざるを得ません。

われわれは論理や知性といふものを過信して、最も大切な人間としての敬虔さを失つてしまつたのではないでせうか。自我を超えた価値——それが国であらうと、共同体であらうと、宗教的な神々であらうと、人間が長い経験の蓄積から作り上げて来た道徳であらうと同じことです。が、さういふ自分よりも高い次元のものの中に、謙虚に礼拝するといふことを忘れてしまつたのではないでせうか。人間の原点と言はれるやうな素材さを失つてしまつては、いかに巷に物が溢れ、高度な知的訓練をほどこされた人が社会に送り出されて来ても、決して幸福な社会にはならないでせう。これは、イデオロギー次元よりは、もう一つ根底的な問題で、その現世利益的な人間観においては、保守とか革新とかの区別なく、ひとしなみに深い汚染が進んでゐるといふのが真実ではないでせうか。

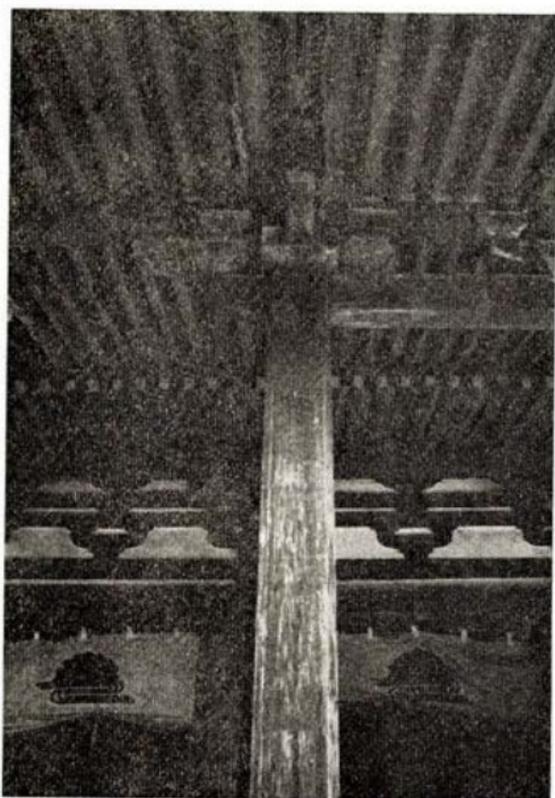
もちろん私がいま言つてゐる道徳とか宗教とかいふものは、教条化された道徳律とか、既成宗教とかを指してゐるものではありません。人間が長い間かかつて培つて来た道徳的心情、宗教的心情は、自我の野放しの暴走をセーブする唯一のよりどころであり、今にしてその復権が行はれなければ、日本は修羅のやうな状態に陥ること必定と思はれるからです。諸君一人一人の中に、空疎なスローガンならぬ本当の「人間」を回復するためにも「戦後思想」といふエッセ思想の間違ひは徹底的に究明されねばならないと思ひます。

本日、私が提出しました国家の問題、歴史の問題、生死の問題、現代における人間観の問題などは、諸君自身が自らの人生を主体的に生き切ることによつて、始めて了解の端緒がつかめるやうな難問ですが、ねがはくば合宿教室の緊張した時間の中で、一歩でも二歩でも問題の核心に向つて前進して頂きたいと念ずるものであります。

(福岡教育大学教授・国文学専攻)

いま日本青年が思ひをいたすべきこと

小田村寅二郎



不思議を不思議とする心

科学的経験と人生経験

学問とは何か

人間を見つめる力

士規七則

他とのつながりにおける自己

現代の学問から排除されたもの

困らびるとき

不思議を不思議とする心

昨年この合宿教室で小林秀雄先生が「信ずることと知ること」といふ題で御話をして下さいました。すでに「日本への回帰」(第十集)で御読みのことと思ひますが、先生はそのお話の最初に有名なユリ・ゲラーの念力にふれて次のやうに言はれた。

「現代のインテリは、不思議を不思議とする素直な心を失つてゐます。テレビで不思議を見せられると、これに対し嘲笑的態度をとるか、スポーツでも見るやうな面白がる態度をとるか、どちらかでせう。今の知識人の中で、一人くらは、念力といふやうなものに対してどういふ態度をとるのが正しいかを考へる人がゐてもいいでせう。」

ところがゐない——と小林先生はおっしゃるのです。むしろ知識のない人は素直に「不思議だな、世の中にはさういふことがあるのか」と謙虚に考へるだらう。しかし知識人は素直にその不思議にとりくまうとはしない。そこで小林先生はベルグソンについて次のやうな話をされました。

第一次大戦の時、パリにゐた或る奥さんが、夫が遠い戦場で戦死する情景をありありと夢に見た。後で調べてみると丁度その時刻に、その夢と寸分ちがはなない恰好で夫は戦死してゐたの

です。その話を聞いた或るフランスの有名なお医者さんが「それは嘘ではないだらう。しかしそれは偶然の出来事にすぎない」と言った。ベルグソンがそれを横で聞いてゐたところ、そこにもう一人若い女がゐて、その医者者に「先生のおっしゃることは論理的には非常に正しいやうだが何か間違つてゐると思ひます」と言った。それを聞いたベルグソンは、「私はその娘さんの方が正しいと思つた」と言ふのです。

以上が小林先生が引用されたお話ですが、私はその夢を見た奥さんはきっと夫のことをひたすらに思ひ続けてゐたに違ひないと思ふし、夫もまた奥さんのことを一途に思ひつゞけてゐたと思ふ。その二人のいはゞ「念力」がつながつた時に、夫ははっきり妻の夢の中に姿を現はしたにちがひない。或ひは戦死する夫の目にも妻の姿が映つたかもしれないのです。だが、諸君の中にはそんなバカなことがあるものかと思ふ人がゐるでせう。しかし諸君をさういふ考へに引つ張つてゐるものがあるとすればそれは諸君が学んだ学問のせいではなからうか。現代はあくまでも合理的に科学的に考へるといふ世の中の風潮ですから、さういふ勉強が進んでいけばいくほど、このやうな「不思議」を素直に受けとめる力が減退していくのではないでせうか。

ここで小林先生は次のやうにおっしゃいました。

「それはその夫人にとって、たった一つの経験的事実なのです。医者はそれを主観的だといふのです。そんな馬鹿なことはないぢやないか、本当に切実な経験といふものは、主観的でも



客観的でもないですね、つねられて痛いと感じる経験と同じです。」

つねられると痛いといふのは誰でも理解できる、客観的事実でせう。しかし痛さの中味は自分だけしかわからない。すなはちつねられると痛いといふ概括的な話は誰にでも通用するから客観性はあるけれど、痛みの中味は主観的でせう。しかし改めて主観的などと言はなくてもいいといふのが小林先生の御意見なのです。

「痛いといふことは主観的なことか、客観的なことか、どちらでもないじゃないか。本当に直接には僕の心の中の経験じゃないか。」

直接の心の中の経験を客観的事実だとか主観的事実だとか言ひ出すから話がわからなくなると言はれるのです。

科学的経験と人生経験

さらに小林先生はこの話について重大な指摘をしてをられる。それはこの医者が、夫人の見
た夢の話を自分の好きなやうに変へてしまつたといふことです。すなはち医者は夫人の話が正
しいか正しくないか、それを先に決めたくなるのですね。夫人が夢を見る時、たしかに夫は死
んでゐたか、或はそれは間違ひで夫は生きてゐたか、その方が医者は氣になる。しかし夫人は
そのやうな問題を提起したのではなく、自分の痛切な経験を話しただけです。奥さんにとつて
は夫が死んでいく時、夫の心は自分の心とはつきり往き来してゐた。夫が死んだあとも、夫の
魂は自分を励まし、自分はそれによつて生かされてゐる。さういふ実感があつたかもしれな
い。さういふ経験を奥さんは語つたのに、医者はその現象の具体性には目をつむつて、それが
正しいか正しくないかといふ問題にすりかへてしまつたといふのです。この小林先生の御指摘
は重大です。

先に述べたつねられて痛いといふ経験、それはどうしようもないと同時にかけがへのない尊
いものです。ところがその経験を主観的と言つて封じこめてしまふのが誤りであるのと同じ
やうな問題のすりかへがここでも行はれてゐるのです。人間社会といふものはさまざまな経験

を一人一人がやりながら生活してゐるのです。だがその中で皆が共通して理解し納得し得るといふのは——先程の言葉で言へばそれが客観的だといふことでせうが——、それはお互ひの経験の中ではほんの一部分にしかならないのです。ところが「科学」とは実はその客観的なものだけを扱ふものなのです。だが科学者であるお医者さんは、人間のあらゆる経験を科学の問題に置きかへてしまはうとする。すなはち「経験の具体性を信じないで、抽象的問題に置きかへてしまふ」のです。「そんなことがあるだらうか、あるとすればなぜだらう」といふことに置き換へてしまふ。——これは実につまらない、現代的思考の犯す誤りではないでせうか。現代の知識人はつかういふ錯覚に陥りがちなのです。

小林先生はさらに「科学的経験といふものと、僕らの経験といふものとは全然違ふものなんです」「科学は人間の広大な経験を、非常に小さい狭い道の中に押し込めたのです」とおっしゃつてゐます。誰が見ても客観的事実として認められる経験、太陽は東から出て西に入るといふやうなことは科学的経験として整理することが出来る。しかし僕らの一般的な経験といふものはそれとは全く質が違ふ。ある人がこれは「おいしい」と言つても、それを「まずくて食へるか」と言ふことが出来る。そのいずれも嘘ではない。さういふ自由奔放な千差万別の世界の間に科学的経験として整理することの出来るものはほんの一部だけです。すなはち「科学は人間の広大な経験を、非常に小さい狭い道の中に押し込め」ることになつたのです。

そのことを小林先生は別の言葉で次のやうに言つてをられます。

「科学といふものは、計量できる経験だけに絞つたのです」

つねつた痛さなどといふものは科学では説明出来ない、もっとも痛さの程度は科学の対象として扱ふことが出来るかも知れない。何故ならそれは計量することが出来るからです。しかし痛さの中味はもう違ふ、これは科学の対象にはならない。それは計量出来ないからです。そこで小林先生は以上をまとめ次のに言はれました。

「近代科学といふものの法則を定義すれば、それは一つの計量できる変化と、もう一つの計量できる変化との間の、コンスタントの関係といふことです。科学はいつでも、この法則の下にあるのです。科学は法則に従ふ経験だけに人間の経験を狭めたのです。さういふことを諸君ははっきり知つてゐなければ駄目です。」

計量できる変化と、もう一つの計量出来る変化との間の法則、それを発見出来たときに科学者としての喜びが生まれる。かうして科学は「いつでも法則の下」にあるために、科学は人間の経験を、法則に従ふ経験だけに狭めたといはれるのです。従つて、科学的経験は人間の経験のほんの部分なのですが、そのことを忘れて、科学だけが学問だと思つてしまふと、人間の経験がわからなくなつてしまふ。すなはち人生の大部分を占めてゐる人生経験、一人一人が異なる眞実を追求してゐる人生経験といふものは、学問の対象にはならないと思つてしまふやうになる

のです。かうして人々は大切な人生経験を粗末に扱って、科学を欠かしたら人間は生きていけないなどと思ふやうになってしまった。先生はその現代人の犯してゐる重大な誤りを指摘したあと、「さういふことを諸君ははつきり知ってゐなければ駄目です」とおっしゃった。先生はこの言葉を大きな声では言はれなかったが、大変心のこもった声で、僕が君たちに言ふことはそれしかないといふやうな強いひびきで、おっしゃったことをいまありありと思ひうかべるこゝとが出来ます。先生は人間が生きたといふことの意味について、先生の御経験のエキスを端にお述べになった。それが「さういふことを諸君ははつきり知ってゐなければ駄目です。」といふ言葉だったと思はれてなりません。

学問とは何か

この最後の御言葉は実に重要だと私は思ふ。だとすればこの言葉をどう扱ひ、どう受けとめ、どう味はふかといふのが学問の一番大事なポイントでなければならぬ。すなはち、このことは現代の学問の中では、どういふ学問のどういふ部門の、どういふところに位置づけられるものだらうか。あるひは中学、高校の教科で言へば、一体どこに属することなのか。大学ではどの講座の中でうけもつことなのか、さういふことを明確にしていかなければいけないので

す。だが考へてみるとそれは殆んど不可能なやうな気がする。現在は科学Ⅱ学問、さういふ考へがあまりにも定着してしまつてゐる。歴史も哲学もすべて科学で解けると考へる風潮が一般だし、社会科学といふものさへ勉強すれば社会のすべてが解明出来ると考へてゐるやうです。だが考へてみれば社会といふさまざま現象を構成してゐる人間は、一人一人違ふ経験を積み、違ふことを真実と考へ、自分の生甲斐を求めてゐるのです。さういふ人間の集団が社会といふものでせう。そのすべてをどうして「社会科学」が蔽ひつくすことが出来るでせう。社会の中で科学として扱ふことの出来る部分ごく狭い範囲に限られるはずで。勿論その範囲の中で社会科学が果す役割は大切でせう。しかし社会科学さへやつてゐれば社会がすべてわかつてくるといふやうなことはとんでもないことなのです。

かういふ風潮の中で先程の小林先生の言葉をうけとめるにはどうすればいいか。それを学問や教科の配列の中に位置づけるといふことは出来もしないし、又下手にやつてしまふと戦前の修身教育が非難されてゐるやうに、それが固定化され、概念化され、道徳律になつてしまつて、しみじみとした人間経験として受けとめることが出来なくなつてしまふおそれもあるのです。

私は小林先生のお言葉、それはすべてのものを合理的な立場でしか判断することの出来ない現代の知性に対するきびしい警告、さういふ毒素の中からお互ひが抜け出すための励ましの言

業として受けとめるべきではないかと思ふのです。さうではなく、道徳律、あるひは一つのテーゼとしてこれを暗記するといふやうなことをすれば、先生の言葉は死んでしまふ。その辺はむづかしいところですが、そこをしっかりとっておさへていたゞきたいのです。

人間を見つめる力

現在求められてゐることは、人間がこのやうな科学とか、合理主義とかいふことから解放され、一人の人間に戻って自分たちを見つめてゆかなければいけないといふことです。われわれはお互ひが一人の人間として、この人間なるものを今一度見直すところから出発しなければならぬ。この「人間として生まれ、人間として生きてゐること」を繰り返し、自分で考へ直すこと、それが学問そのものだと思ふ。それは何も道徳的な意味で反省しろといふことを言つてゐるのではない。さうではなくそのことをしっかりと考へてゐないと人間はすぐ周囲から引つ張りまはされてしまふ、といふことに心をとめていたゞきたいのです。特に大人になつてからはさういふ傾向がひどくなるのでやはり二十歳前後の青年期に自分が生きてゐることをしっかりと見つめる力を身につけておかなければいけないと思ふのです。たゞここで注意していたゞきたいことは、このやうな場合には、「私個人としては」などと抽象性をもたせた言ひ方を

避けて、「僕は」「私は」とはつきり自分自身の主体性を確立して、具体的な自分自身の感ずることを述べあふやうな心組みをもつてゐてほしいといふことです。私たちは小林先生のおっしゃるやうに何も科学的経験に絞って話をするわけではないので、お互ひの、人にはわからない経験に立ってゐても、それを何の気兼ねもなく率直に話し合ふことが大切なのです。

要するに抽象的に人間とは何かといふことを考へるのではなく、自分といふ一人の人間の主体性を持ちながら、人間とは何かといふことに迫っていたゞきたいのです。

そのことは、そもそも「僕」とか「私」とかいふこの自分は、この広大な宇宙の中で一体どういふ意味合ひをもつものであるか、それをしっかり知る所から出発し直すことになるのです。ではそれを手取り早く知るにはどうすればいいか。それは自分の周辺にある一切の事物や生物と自分を比較することからはじめるべきでせう。それが自分といふものを知る最も正確な手段だと思ふのです。しかしこの「周囲と自分を比較する」といふこと、それは何も改まったことではなく人間誰でもが、生れ落ち、物心がついてから死ぬまで、一番関心を寄せて生きてゐることなのです。あの人のやうになりたい。あの人のやうに生きたい——人々は本能的に周囲との比較の中に自分を置き、自分を磨き、自分を励まして生きてゐるのです。勿論それが悪い競争意識になつては困るけれど、このやうな意識はあくまでも人間の進取の気象の然らしむるものとして、肯定すべきものだと思ふのです。さういふ風に自己と周囲とを比較して自分

を励ますといふことを怠っては、人間は生きてゐることにならない。なほここでいふ周囲とは、今生きてゐる人間同士だけでなく、過去の人々、この世を精一杯に生き抜いて死んでいった人たち、所謂、賢人、聖人と言はれてゐるやうな人々たち、さういふすべての人もふくむし、さらには自分の周辺に見られる森羅万象、生きとし生けるものすべてをふくむと言つていい。そのすべてのものと自分といふ人間との比較を徹底してつきつめてゆくべきだと思ふのです。

士規七則

では具体的にはどうすればいいのか。人間をみつめるとはどういふことなのか。そのことについては古来数多くの先人が説いてきたところですが、ここではその道しるべとして吉田松陰の「士規七則」の一節を読んでおきませう。これは松陰二十六歳の時、萩の野山獄で執筆したもので武士として心得べき基本的なことから七つ並べて書いてあるのです。その第一に次のやうなことがある。

「凡そ生れて人ならば、宜しく人の禽獸に異なる所以を知るべし。」——人と生れてきたからには人が鳥や獸とどう違ふか、その点をはつきり知っておかなければならぬ——「蓋し人には

五倫あり、而して君臣父子を尤も大なりと為す。」——思ふに人には人の踏むべき五つの道がある、それは君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の五つのつきあい方をいふのだが、その中で一番大切なのが君臣の関係、それと親子の関係、すなはち忠と孝なのだ——「故に人の人たる所以は忠孝を本となす」といふのです。人間は家庭といふものから離れて育つことはない。人間にとって一番の基本的な、生命体の依存する場所、それは家庭である。そしてもう一つ言語を同じくする民族集団、それが国家です。もともと松陰の場合は日本といふ国家と、毛利藩とが重なった形で意識されてゐると思ひますが、天皇にせよ、藩公にせよ、その国家や藩の中心にをられる方を仰ぎながら、永遠の平和と繁栄を考へる心、それが忠です。その忠と孝を大切にしてい、禽獣と異った道を実践してゆくのが人間の生き方だといはれるのです。鳥と獸は生存意欲においては、人間より遙かに強烈であるかもしれない。しかしそれとは違った人間らしい道に家庭や国家を中心にしなから、正しい秩序のもとに拡充させていく、それが人間の生き方の基本だといはれるのです。また第五番目には

「人古今に通ぜず、聖賢を師とせずんば、則ち鄙夫のみ、読書尚友は君子の事なり」

とあります。人は生れながらにして昔のことや今のことすべてがわかつてゐるといふことはあり得ない。だから立派な、すぐれた人たちを師としなければ、つまらない人間として終つてしまふ。従つて、すぐれた書物を選んで読み、友達を尊びあふといふことから、本当の人間関

係が発生することを述べてをられるのです。そして最後の七番目には

「死而後已の四字は、言簡にして義広し、堅忍果決、確乎として抜くべからざるものは、是れを舍きて術なきなり。」

と述べてをられます。死して後已むといふのは現在では大変わかりにくい言葉になってゐるやうですが、すべてのことに命をかけてぶつかっていく、それでもなほ出来なければそれで諦める、満足する、といふことです。死んでも悔いしないことを選んで死に對していくといふこと、それが「死而後已」といふことですが、それは「言簡にして義広し」言葉は簡単だが、その意味は深い。「堅忍果決」といふのは堅く心に定めて果断に事を行ふこと。そして「確乎として抜くべからざるものは」いかなることがあつても動揺しないで信念を貫くといふことは、「是れを舍きて術なきなり」この死して後やむといふ決意が出来てゐなければ不可能なことなのだ。従つて「死而後已」といふ四字を心に刻んで生きていくのが武士たるものの心得であるといはれるのです。武士といふのは世を導く人、今で言へば大学生はその準備期といふ意味では相ひ通ふものがあるかと思はれます。そして士規七則の最後は次のやうに結んであります。

「右士規七則、又約して三端と為す、曰く『志を立てて以て万事の源と為す。交を結びて以て仁義の行を輔く、書を読み以て聖賢の訓を稽ふ』と、士苟も此に得ることあらば、亦以て成人と為すべし」

武士としての生き方、それは三つに要約出来る。その一は志を立ててそれを一切の行動の源とすること。第二には友を選ぶこと。それは第一の志を立てることと関連してくるので、嘘のない、立派な人を友としたいといふ気持で生きてゆけば、その交りの中には非常に豊かな人間生活が実現出来るし、それが又周囲に大きな影響を与へていくのです。そして第三には聖賢の書を読んで、先人の心をこめた生き方を身につけようとすること。この三つのことを体得すれば、その人を成人と為すことが出来る。成人とは、二十歳になって成人式を迎へたといふやうなことではなく、一人前の人間としての生き方を我が身に確立してゐる人といふ意味でせう。鳥獸とは異つた人間としての喜びと誇りをもって生きていく志を確立し、友との交はりに心を碎き、先人の書物を心で読んでいくことの出来る人、それが成人です。

先ほどの小林先生の「さういふことを諸君ははっきり知つてゐなければ駄目です」といふ、「さういふこと」をしつかり受けとめることの出来る人、それが成人なのです。

他とのつながりにおける自己

かうして自分がともかくにも“人”としてこの世に在るといふこと自体の中に、人間としての生き甲斐を自覚し認識することが、人間として何より大切な第一歩であることが判つたな

ら、次にいま一つ大切なことに気づいていただきたい。それは「他とのつながり」「他とのかはり合ひ」における自分、といふことです。

このことについては昨年の講義で詳しく申し上げましたので、「日本への回帰」(第十集)をお読みいただきたいと思ひますが、日本人は対人関係においてさまざまに一人称を使ひ合わせる。それを細かに見ていけば、日本人がいかに「他とのつながり」「他とのかはり合ひ」を大切にしてきた民族であるかがわかるのです。複雑な人間関係において日本人は大変厳しく言葉を訓練し、言葉を整理してきた。従つて逆にわれわれが使つてゐる言葉を厳密に見ていけば、日本人が人間関係に対していかに微妙に、真剣に、秩序正しくそれを位置づけてきたかはつきりわかるのです。すなはち日本語、特に話し言葉のもつ複雑多岐な変化の中に、日本人の人間付きあひ、いはゞ社会観の根底がひそんでゐるのです。

われわれは日本人であるよりも前に人類の一員であるといふ人が多い。それはたしかに頭の中で考へればさうかもしれない。しかしわれわれは日本人として生れ、日本語を話すことによつて人間の中に加はつてゐる。だからわれわれは正しくきめこまかに日本語を語り、日本人としての思想を整へ、日本の文化伝統を一心に鍛へ、咀嚼した時にはじめて世界人類の一員の中に加はることも出来るし、お手伝ひしませうといふ資格も出来るのです。日本人である前に人類の一員であるといふやうな考へは自分を一人の人間として、人類の一員に加はらせるための

必然的、かつ不可欠の要素を飛びこして観念の世界で遊ぶものだといふことに気付かなければなりません。

ともあれ日本語を通じて見られる日本人としてのつきあひ、対人関係のこまやかさ、自分はその中に一人の日本人として生きてゐる、さういふ具体的な姿を離れた抽象的な自分といふものは存在しないことをしっかり考へていたゞきたいのです。

さういふことがわかつて来れば、われわれはもう一つ、日本の風土が持つてゐる素晴らしい大自然の中に包まれて生きてをり、その中で日本人の性格が形成されてきたことに気づきたいと思ふのです。すなはち「他とのつながり」といふ時の「他」の中には日本の風土、森羅万象のことごとくがふくまれてゐることを知らなければなりません。日本はどこへ行つても美しい。川の流れば豊かで、四季は規則正しく、しかも一瞬もとゞまることなく変化していく、日本人はその四季の変化に置き去りにされないやうに常に心を動かしてゆく、そのやうに絶えず心が訓練されてゐるのです。日本人はその具体的な自然の姿の中に自分の真実を確認しながら、何千年といふ歴史を歩んできた。従つて概括的に、科学的に物事を処理することは不得手であつたかもしれないが、具体的なこと、実証的なことには実に敏感に反応してきたのです。その森羅万象との微妙なつきあひの中に日本人の性格は形造られてきたといつていい。

ところが近代の自然科学の急速な進歩によつて、社会、歴史といふやうな分野までがすべて

科学といふ名によって蔽ひつくされてしまった。そこに日本人のこのやうな生き方が全くわからなくなつてしまつた原因があるのです。同じ科学といつても、自然科学における科学性と社会科学、人文科学におけるそれとは然るべき時期にはつきりと弁別しなければならぬ。それをしないであると日本といふ国が全くわからなくなると思ふのです。

現代の学問から排除されたもの

天皇の問題が学問の世界から全く排除されてしまつてゐることなどその適例です。天皇の御存在は日本人の心の中に素晴らしいものとして受けつがれてきた。しかし天皇といふものは日本だけにしかないもの、日本人の心情の中だけにしか生きてゐないものですから、さういふ、いはば日本人の主観に属するものはすべて学問の世界から排除してしまふ。天皇に対する具体的な個々のつきあひ方は学問の対象にはならない。かうして天皇問題は大学の講座の中で、真剣にとりあげられないし、大学の講座の仕組みそれ自体が、天皇といふものを受け入れることが出来ないやうになつてゐる。従つてそれを受けて高校でも、中学でもまともに天皇の問題が扱はれないのです。

また日本人の意識なり考へなりを問題にする際には、いま生きてゐる日本人だけが日本人だ

といふ考への上に立つて話をすゝめていく。従つて現在の政治で、過半数の賛成を得られれば、その線に沿つて政治が行はれていく。共産党の勢力が過半数を占めれば天下をとることができるやうに仕組まれてゐる。しかし日本の運命を決定する際に、今生きてゐる日本人だけで物事を決めていいのだろうか。われわれは幾千年、幾万年前からこの日本の国土に生き、日本の文化を培つてくれた無数の祖先とのつながりの中で、その端くれとして生きてゐるにすぎないではないか。とすれば日本が将来どうあればいいかを考へるといふことは、生きてゐる人だけの多数決で決めることなど絶対に許されはいはずです。たゞ死んでゐる人に投票してもらふことは出来ないから、やはり生きてゐる人が、先祖とともに、さらには将来生まれるであらう子孫とともに生きてゐるといふことを考へて投票権を行使しなければならぬ、それが投票権を行使する際の基本的な心構へでせう。だがさういふことは、政治学でも、社会学でも一切教へてくれない。そんなことは客観性のない、主観の問題だといふことで学問の対象にはならないのです。

かうして天皇のことも、祖先のことも、子孫のことも、私達の生命と、生き方そのものと、分ちがたく結びついてゐるもの、一番大切なことがすべて今日の学問の系列の中からのみ出してしまつてゐる。このやうな学問のあり方を基本的に改めない限り、日本のことも、そして日本人として生きていく私達の生き方も全くわからないやうになつてしまふのです。

この現代の学問からはみ出してゐるもの、大学の学問系列の中では扱ってくれないもの、——それは端的に言へば採点の対象にならないものと言つてもいいのですが——そこにこそ人間たるに必要な、本当の学問の世界があると云つていいのです。そのはみ出したもの、採点してくれないもの、それを一体どこにどう位置づけていけばいいか、それは自分の心の中以外にはない。そして自分で勉強する以外にはない。いろんな先生や先輩や友人に教へを乞ふて、自分で道を拓く以外に道はないのです。

国亡びるとき

最後にフランスのアンドレ・マルローが、最近出光佐三さんのお書きになつた「永遠の日本」といふ書物に序文を寄せてゐますが、その一節を御紹介しておきたいと思ひます。それは

「国亡びるときは、その国民がみづからの歴史を忘れるときにほかならない」

といふ言葉です。この言葉は単に一般的な事柄について抽象的に言はれた言葉ではなく、現実の日本を見、日本の青年たちや、日本の教育の状況がどのやうになつてゐるかといふことを確認しながら述べられた言葉であるといふことが大切です。マルローは日本の文化に深い関心を寄せ、すぐれた理解を示してゐる人ですが、その日本の文化と、現実の日本の教育なり、学

問の現状との間のずれを、強く感じて述べた言葉だと思ひます。歴史の中には科学では扱へないものが積み重なつてゐるので、科学を主にした学問だけで歴史を扱つてゐると、日本の歴史は全くわからなくなつてしまふ。さういふことをつゞけてゆけば日本は一体どうなるのか、そのやうな意味をこめて発せられた警告だらうと思ふのです。

このやうな誤つた学問によつて歴史が語られてゐるのは日本において特に目立つ現象なので、世界の諸国では必ずしもかうではない。例へばマコーレー・トレヴェリアンといふ人は「歴史はポエティカルなもの、詩的なものでなければならぬ。経済学が歴史の主流になつてしまつたところに人類の悲劇が発生してゐる」としてマルクス流の唯物史観、経済史を歴史のすべでたとする見方をきびしく批判してゐますし、一世紀ほど前のドイツの哲学者ウィルヘルム・ヴントは、お互ひにいいことをしようと思つてゐる程度では人間の道徳的感情が維持出来るものではない。もっと積極的に全体を思ふこと、すなはち一つの家庭の中にゐれば家庭全体を万遍なく思ふことの出来る心、国にあっては国全体を、どんな隅っこに生きてゐる人までも一緒に考へることの出来る心、さういふ心を鍛へることがなければ、人間の本当の倫理的、道徳的感情は持続できないと言つてゐる。人間の心が実に重大な問題として扱はれてゐるのです。

このやうな西洋の学者の言葉からしても、現在われわれが考へなければいけないことは、世の中がどうあらうとも、大昔から今日に至り、また永遠につゞいていく人間の道は、変ること

なくあるといふことです。道のなかつたところにも数多くの人が歩いていくうちに道が出来てくる。かうして何百年、何千年と人々が歩いてきた道の中に、そんなにでたらめな、間違つたものがあるはずはないのです。そして何か聞き嚙りの考へで、世の中の仕組みをひっくりかへし、平等にしてさへゆけばいいのだ、そのためには伝統も何も破壊しても構はないのだといふやうな考へをもつ人は、人類そのものに対して一体自分がどこにゐるか、その位置づけを明らかにしてもらはなければ困るのです。人類が、そして日本人が一筋に生きてきた道、その道に一人づつ人間の生き方を整へてさへゆけば世界に貢献出来るすばらしい道が開かれるはずです。しかしこのままで推移してゆくと、もしかすると日本は亡びるかもしれない。そのことが世界人類に対して、どんなに大きな犠牲を払はせ、またどんなに申し訳ないことになるのか、こゝそすべての日本人が心をこめて考へなければいけないことだと思ひます。

(亜細亜大学教授・国民文化研究会理事長)

学

問

——いのちに至る道——

小
柳
陽
太
郎



十七条憲法第一条

十七条憲法と論語——黒上先生のことば
違さりなきままに——桑原先生のことば

現代学界の風潮

近代史学の誤謬と学問の正道

十七条憲法第一条

古典を読むといふことを私達は非常に安易に使つてゐるのですが、「読む」といふことは考へてみれば実に容易ならぬことなのです。例へば論語に「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」といふ有名な一文がありますが、一般の注釈書には「その日の朝にすぐれた先人の歩んできた道を理解することが出来るならば、夕方には死んでもいい」と書いてある。それで一応の解釈はすんだといふことになるのでせうが、勿論それでは「読んだ」ことにはならないので、古への聖人の生きてきた道と言っても、それは一体どういふことなのか、この「道」といふ言葉の中に孔子はどのやうなおもひをこめてゐたか、それに深く思ひを馳せなければこの一文はわからない。さらに「道を聞かば」の「聞く」といふのも単なる「知る」とは違ふ、それは心を澄まして先人の生きてきた道、具体的には先人の残した言葉といふことになりませうが、その道を全身のおもひを傾けて聞くといふことでせう。かうして先人の心と感応しあつた時には先人のいのちと自分のいのちが通ひ合ふやうな忘我のおもひを味はふに違ひない。そのやうな予感をこめて孔子は夕に死すとも可なり、自分は死んでもかまはないと表現したと思はれます。「夕に死すとも可なり」といふ言葉は決して誇張ではなかつた。それを素直にうけとめる

なら「道を聞く」といふ言葉には無限の奥行きがあることがわかるはずで。古典を読むといふことは、その奥行きを深く偲ぶこと、その奥深い人生にこの身をさらすことだと言つてもいい。それなくして「古典を読む」といふことはあり得ないし、その道を歩まなければいかに学問をつみかさねても、人のいのちにふれることは永久に不可能だと思はれるのです。

ここでは聖徳太子がお書きになった「憲法十七条」の「第一条」を先人がどのやうに「読んで」きたかを中心にお話したいと思ひます。この第一条は皆さん御存知の通り「和を以て貴しとなす」といふ有名な言葉ではじまります。ところがその言葉があまりに有名なために、その言葉の陰にあつて、その言葉を本当に生かしてゐるものについて人々はあまり考へない。丁度先程引用した論語の中の「道」と同じやうに、「和」といふ言葉の中に、太子がどういふ思ひをこめてゐらつたかを人々は偲ばうとしないのです。そしてたゞ「仲よく暮らすことは大切だ」といふ程度の一般的な解釈で安心してゐる。しかしそれでは到底太子のお心に迫ることは出来ないでせう。最初に全文を読んでみます。

『一、に曰く、和を以て貴しと為し、忤ふこと無きを宗と為す。人皆党あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。然れども上和ぎ下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。』



先づ大切なことは和とは何か、それをすぐ「仲好くすること」といふやうな言葉に入れかへないで、そのままにして次を読んでいくことです。すなはちあとを讀めば自ら「和」の内容がわかってくる、そのやうな讀み方が大事です。「和を以て貴しとなす」につゞいて「忤^{さか}ふこと無きを宗と為す」といふ言葉がある。「忤^{さか}ふ」はさからふことでせうが、それは単に喧嘩早く論戦を挑むといふことではなく、いつも自分といふものを意識する、人の世界にすつと入っていくことが出来ない、さういふ心の姿勢、心の「こだはり」をいふのでせう。その「忤^{さか}ふ」といふ心理をもつと具体的に述べられたのが次の文です。すなはち「人皆党^{たじら}あり、亦^さ達^される者少し」——人は皆それぞれ自分たちの世界に閉ちこもる性質をもつてゐる、「たむら」の「むら」は群がるの「むら」に通じるのでせう。「達れる」といふのは「達」といふ字から考へても、相手の心

の中にすつとはいって行く、飛びこんでいくといふことでせうが、さういふ人は非常に少い。かういふわけで「或は君父に順はず」、君といふのは国家生活における天皇、或は天皇に集約されていくそれぞれの社会における主君、家庭生活における父、さういふ長上の言葉に従はうとはしない、そして、「乍ち隣里に違ふ」といふことになる。「乍ち」といふことは君父に順はない心理が、そのまゝ隣の人に心を通はせることが出来ないといふ結果を導くことを示してゐると思はれます。かう見てくると、「和を以て貴しとなす」以下、次々に出てくる言葉は対句的な表現がなされ、言葉がととのへられてはゐますが、よくみると後になるほどより具体化され、後に出てきた言葉が前の言葉を補足するといふ形で展開されてゐることに気が付きになると思ふのです。人間はそのやうにエゴイズムに充ちた存在なのだ——「然れども上和ぎ、下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは則ち事理自ら通ふ」——上の人がやはらかな気持ちで下に接し、下の人がまた暖かな心で上の人に親しみ合つてゆけば本当の平等の世界が実現されて、事を論じてゆくのに「諧ふ」ときは、——「諧」といふ字は音楽で使ふハーモニイ、それぞれの音がそれぞれの美しさを保ちながら、それが一つに集約されて全体で美しい調和のとれた音色を発するといふことですが、かうして一人／＼の心が生かされたまゝで全体の中に命が通つていく、そのときには「事理自ら通ふ」——「事」は人生のさまざまな事実、「理」はそれを支へてゐる道理、その事実と道理が一致するはずだといはれるのです。「事理自ら通ふ」

といふ言葉は難しいのですが、昨日、山田先生が、小林秀雄先生の「文化が病んでゐる」といふお言葉について、「文化が病む」といふのは人生の厳肅な事実を一片の論理で裁断するところに生まれるのだとおっしゃいましたが、「事理自ら通ふ」といふことはまさにその逆、人生の事実がそれを支へる道理と一致し、そこに命が通ふといふことです。従つて、それは小林先生の言葉を用ひれば「文化が生きてゐる世界」だと言つてもいいでせう。さうであれば、「何事か成らざらむ」、あらゆることが実現出来るはずだ、憲法第一条はさういふ不動の確信をお述べになつたお言葉で、結ばれるのです。

このやうに読んだあとで「和を以て貴しとなす」といふ最初の言葉にかへつてみると、この冒頭の言葉が、人間の醜さを深くみつめられた太子のお心の中から生れた言葉であることがよくわかります。すなはち「和」を理解することは太子の人生を見つめてをられる御心の深さを理解することと切りはなしては考へられないのです。なほこのやうな太子の御心をお偲びする手がかりとしては、このあとにある憲法第十条の「忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり、心各執あり、彼是とするとときは則ち、我は非とす、我是とするとときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ」といふ御言葉も是非味はつていたゞきたいのです。人には皆おれがおれがといふ執着心があつて、常に人の意見にさからはうとするが、所詮人間は凡夫にすぎないのだ——この人間に対する激しい御痛

感、その中に「和を以て貴しとなす」といふ御言葉を浮べてみなければ私達は到底、太子の和の精神をお偲びすることは出来ないのです。

十七条憲法と論語——黒上先生のことば

さてこの憲法第一条について書かれた先人の言葉は多いのですが、ここでは二つの文章を御紹介したいと思ひます。その一つは私共が常に人生の先達として仰いでゐる黒上正一郎先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の一節です。先生については、これまでの合宿教室において毎回御紹介がなされてをりますので、すでに御存知と思ひますが、その御生涯を聖徳太子の御研究と後進の指導に捧げられて、昭和五年に、僅か三十歳でこの世を去られた篤学の方です。当時共産主義運動を中心に荒れ狂ふ思想界のたゞ中、聖徳太子の教へを若い人たちに伝えるべく、第一高等学校に昭信会を、東京高等師範学校に信和会を作り、心魂を傾けて後進を指導なさったのです。先生がお残しになったこの一冊の書物、それをどのやうに私達がかれまで人生のしほりとして仰いできたか、そのことについては昨年の合宿レポート「日本への回帰」に夜久先生が書いてゐらっしゃるのでここでは省略させていただきます。では御手許の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の六二頁を開いて下さい。

『我等はここに憲法第一条に「和を以て貴しとなす」の教示が、同じく論語に和の貴ぶべきを説いて

「有子曰、礼の用を貴しと為す。先王の道斯れを美と為すも、小大之に由れば行はれざる所あり。和を知って和せども、礼を以て之を節せざれば亦行はるべからず」(学而第一)とあるに對し

「人皆党あり云々」

と仰せられし内容の相違に想到するのである。』

先生は太子の御言葉を、論語に記されてゐる、類似の言葉と比較することによって太子の御氣持を偲ぼうとされるのです。有子といふのは孔子の弟子有若のこと、その言葉の概略は、「礼といふ人生の秩序は実に大切であるが、その用、それを働かせるものとしては和^二人の心を和やかにする心の働きが大切である。もっとも古の聖人の道ではこの和といふものが大事だとされてゐるけれども、すべて和といふものによっていけば自然うまくいかぬこともある。和が大切だとは言へ、礼といふものによって節度が与へられないと物事は実現出来ないものだ」といふことでせう。

この論語の文章と太子の御言葉、それはいづれも「和を貴しとなす」といふ言葉が使はれてゐる。しかしその兩者をじつと心をこめて見ていけば、そこには大きな相違がありはしない

か。

『即ち論語に於いて和の貴しとするのは、礼、換言すれば道德秩序を維持するが為に内心の和を必要となすのであって、而も和しかそのものは礼を以て節せざれば、其の意義を全うせずと教ふるのは、ここに和の思想は道義生活実現の手段と見らるゝのである』

論語の方も和を重要視してゐるけれども、それは道義生活実現の為の手段にすぎないやうであると言はれるのです。

『其の礼と和と相互補足の関連を説くのであるけれども、而もこの二概念を統一する内的根拠としての体験内容は之を充分に説示せられぬのである。それ故に其の思想は何処かに形式的硬化を示すのである。』

論語では和と礼は補足關係に立つべきことを主張してゐる。しかしそれは言葉の上だけの話です。その二つが本当に統一されるためには、そこには一つの体験が用意されなければならぬ。体験があつてはじめて言葉は生きてくるはずだ。しかしこの文章の中ではその体験は充分に表現されてはゐない。だからそこには「形式的硬化」が感じられると言はれるのです。硬いといふことは人生の事実から離れてゐるといふことでせう。人生そのものは軟かです。その人生から離れ、論理が先に立ってしまふとそこに「硬さ」が生まれるのです。

『而るしかに太子の憲法に於ては、和の貴むべきを示させ給ひて、直ちに人皆たひら党あつて、達者少さとれるもの

なき人生事実を洞察せさせ給ひ、それ故に自ら凡夫たるを省みて、個我執着の弊を打破し、全体協力生活の精神にめざむることに依つて上下和諧して、君父隣里に忠順なるべき生を実現すべしと示し給ふのである』

ところが十七条憲法においては、和を以て貴しとなすといふ言葉は、人皆党あつて、達れる者の少いといふ太子御自身の人生に対する深い洞察の中から生れた言葉であり、上下が和諧すべきことも、君父隣里に忠順たるべき生を実現すべきことも、すべて自ら凡夫たるを省るといふ人生痛感から生まれるものである。

『この上下和睦の内的根底に立つとき、一切の事業は自然に眞実の道理と合一し、国家生活は総ての波瀾と障礙とを打破して開発進展せしめらるべきことを宣ふのである。「上和ぎ下睦びて……何事か成らざらむ」とは実にこの確信を顕彰せさせ給ふ御言葉である。論語に説くころの「和」は何処かに礼なる概念と対立せるに對し、太子の「和」が人間心理の洞察に基く団体協力の根本精神に生きしめられてあることは、そこに著しき対照を示すのである』

この上下和睦の内的な根底が確立された時はじめて「一切の事業は自然に眞実の道理と合一し」、太子の御言葉で言へば「事理自ら通」つて「何事か成らざらむ」。すなはち「国家生活は総ての波瀾と障礙とを打破して開発進展」するに違ひないと太子はおっしゃった。黒上先生はさう言はれるのです。この「何事か成らざらむ」といふ、非常に張りつめた、緊張した言葉の

調べに心をとどめていたゞきたい。太子は「あらゆることが出来るはずだ」といふ一つの理論をおつしやったのではない。そこには太子のゆるぎない確信が表現されてゐる。確信の表現といふのは芸術的な緊張を伴つてはじめて可能なのです。言葉をかへて言へば言葉の緊張の強さによつて確信の深さを計ることが出来るのです。ともあれ論語の文章の「和」といふのが、礼と対立した一つの概念として扱はれる危険性を孕んでゐるのと対照的に、太子の御言葉がいか

に生き／＼した人間の精神を伝へてゐるか、黒上先生の御言葉を通して、味はつていたゞきたいと思ふのです。

達りなきままに——桑原先生のことば

次に桑原暁一といふ方の御言葉を御紹介申し上げたいと思ひます。先生は第一高等学校時代、先に申し上げました「昭信会」で、黒上先生の教へを直接におうけになつた方で、国民文化研究会の小田村先生、夜久先生の先輩に当られる方です。長い間東京の千歳高等学校で国語の教鞭をとつてをられ、この合宿教室にもお見えいたゞいたこともありすが、一昨年、お亡くなりになりました。先生が御残しになつた書物は、国民文化研究会叢書の中に三冊ござい

ますが、ここではその中の「日本精神史鈔」の中の一節を読ませていたゞきます。一二九頁のと

ころです。

『法隆寺五重塔の美しさについて自分などが今さら何も言ふことはない。ただ一ことだけ言ふことが許されるならば、それは上求菩提下化衆生の精神そのものであるといふことである。』
 法隆寺の五重塔を見てみると上に悟りの世界を求めてゆくといふ求道心と、それと同時に下に生きとし生けるものを正しい道に教へ導くといふ心と、その二つが一つにとけあつた精神、それは聖徳太子の御精神そのものですが、それが偲ばれてならないと言はれるのです。

『両の手に広く衆生を抱きつゝ、急がず、あせらず、だんだんと衆生を上へ上へと引きあげて行く、といったらよいであらうか、またそれは「和」の形といつてもよい。太子にとって「和」とは、相共により高きものを志向するといふことであつた。』

『両の手に広く衆生を抱きつゝ』以下は実に美しい言葉だと思ひます。特に最後の「相共により高きものを志向する」といふ言葉の中には、「共に是れ凡夫」とか「人皆党あり」とかいふ太子の御言葉の、特に「共に」「皆」といふ言葉が偲ばれます。

『自分は久しい間、目にし口にしてきた憲法十七条をあらためて熟視して、これまでわかつたつもりのものが、実はまるでわかつてゐなかつたことを知つた。それをくはしく述べることが別の機会にゆづつて、いまは太子の「和」とは何か、についてその一端に言及するにとどめたい。』

「久しい間目にし口にしてきた」といふ桑原先生の御言葉の中に、太子と一緒に生きてこられたそのお人柄が偲ばれます。ここで先生は重大な問題を提出なさるのです。

『くどくなるのはいやだからなるべく簡単にいふが、「人皆党あり云々」とありながら、次に「然れども上和らぎ下睦びて云々」と言つてゐるところに疑念がさしはさまれる。何となれば「人皆党あり云々」といふと、そのことが実は「上和らぎ下睦ぶ」ことを妨げてゐる、と思はれるからである。上和下睦は党心（偏執心）なき達れるものゝ間でなければ期待できぬことである。』

「人皆党あり云々」と言つておきながら、「然れども上和ぎ下睦びて云々」とつながつていくのはおかしい。「人皆党あり」とは上和ぎ下睦ぶといふやうなことが出来ないのが人間だといふことではないか、先生はそこに大きな疑問をいだかれます。だが太子がそのやうなことをおっしゃるはずはない。とすればこのところは一体どのやうに考へればいいのか。先生はその疑問にこたへて次のやうにおっしゃるのです。

『この疑問を解くためには、党心あつて達りなきものであればこそ、上下和睦して、はじめで事理通ふことができる、と読まねばならぬ。上下和睦してともに議を尽すこと、そのことが党心あつて達りなきまゝに、それを超える方途である、といふのでなければならぬ。』

私は最初にこの文章に接した時には、駭然として、文字通り目がさめたやうなおもひがいた

しました。これは太子のお言葉に対する単なる解釈といふやうなものではない。それは太子と共に生きてこられた桑原先生にはじめて垣間見ることの出来る世界ではなからうか、そこには先生の全生涯をかたむけた痛切なおもひがこめられてゐると思つたのです。

『このやうにして、太子にとって「和」とは私心を捨て去ることではなくして、お互ひに私心あるものなればこそ、衆とともに議を尽し、論を究めることによつて、わづかに個々の私心を超えたもの、すなはち事理が実現されるといふのである。自分が太子にとっての「和」とは、衆とともにより高きものを志向することである、といったのは、憲法第一条のこのやうな理解に基づいてゐるのである。』

お互ひに私心があるからこそ、共に生きる他に道はないのだ、さうしてはじめて「わづかに個々の私心を超えたもの、すなはち事理」通ふ世界が実現される、先生はさういはれるのです。この中の「わづかに」といふ言葉などにも先生の深いおもひが湛へられてゐることがわかります。

黒上先生にしても、桑原先生にしても、いはゞ名もない篤学の方々です。しかし御二人とも太子と共に生きてこられた、その痛切な人生経験がこのやうに美しい言葉を生んだのでせう。ここには学問をすることがそのまゝ古人のいのちにふれるといふ道が示されてゐると思ふのです。学問を重ねれば重ねるほどののちの深いところにふれてゆくことが出来る、ここにはさう

いふ学問の本来あるべき姿がある。だがそのことは現代の大学における学問には決定的に欠けてゐるものではないでせうか。

現代学界の風潮

ここで現代の学問の主流をなしてゐる人たちは、一体この憲法第一条を、そして聖徳太子といふ人間像をどう見てゐるか、どう描いてゐるかについて少しふれておきませう。もっとも憲法第一条については積極的にとりあげた論文も見当りませんので、ここでは岩波書店から出てゐる「日本古典文学大系・日本書紀下」及び同書店出版の家永三郎著の「日本思想大系・聖徳太子」の憲法十七条の頭注をとりあげます。いづれも現在の出版物の中でも最も權威ありとされてゐるもの、簡単な注ではありますが学界全体の趨勢はおわかりいたゞけるかと思ひます。

最初の古典文学大系本では「和を以て貴しとなす」の注は次のやうに書かれてゐます。

『禮記儒行に「禮之以和為貴」。論語学而に「禮之用、和為貴」。(十七條憲法が)これらの儒書と異なることは、礼との關係を述べていないことである。その点から憲法の和は仏教の和合の精神を説いたと解する説もある』

頭注ですから説明は簡単ですが、要するに憲法の「和」は礼記や論語からとられたものと思

はれるが、これらの儒書と違ってゐるのは礼との関係が述べられてゐないことで、その点からこれは仏教の和合の精神を説いたものだといふ説もあるといふのです。さらに

『この説の可否はともかくとして、憲法は儒教を建前として見られるにもかゝらず、仏教思想がかなり濃厚なことは、特に第二条、第十条に著しい』

とあって、憲法の思想が儒教から生まれたものか、仏教思想を受けつぐものかといふことが興味の焦点になつてゐます。このことは「人皆党あり」の注に

『管子、韓非子などの法家は、朋党が国家に害あることを力説する。なお、憲法には以下の諸条にも儒教、仏教のほか法家の思想が所々に見える』

といふ個所にも見られるところですが、和といふ言葉にこめられた執筆者のおもひをしるといふやうな姿勢は全く見られず、和といふのが単なる概念として扱はれ、その出典だけが問題にされてゐる。先程小田村先生が小林秀雄先生の「経験の具体性を信じないで、抽象問題におきかへてしまふ」といふ言葉を引用されましたが、まさしく和といふ言葉の中にこもる経験の具体性については全く考へられてはゐないのです。たしかに太子は論語をおよみになつたでせう。そしてそこに使はれてゐる言葉をお使ひになつたかもしれない。しかしどういふおもひを和といふ言葉の中にこめられたか、それは先程述べてきたやうにその後につづく文を見れば明らかです。本当の学問ならばその似通つた言葉にこめられた内容の相違を明らかにするこ

とが何にもまして大切なことではないか。ところがここではよく似た二つの言葉は線をつなぎさへすればいいといふ調子で扱はれてゐる。これを一体学問と呼ぶことが出来るのでせうか。次に家永三郎氏の「日本思想大系」本の「君父に順はず」といふ部分の注を見ますとそれがさらにイデオロギッシュな扱ひになってゐます。

『君父への随順を求めるのは、家父長制と専制君主制との確立していた中国の儒教の忠孝道德による』

かうなれば憲法の注として問題であるといふ以前に、儒教道德に対する理解がまことに浅薄だと言はざるを得ません。儒教で大切にする忠孝といふ道德を、あたかも家父長制と専制君主制の産物のやうな言ひ方はあまりにも図式的ではないか。論語の中にたゞへられてゐる孔子の深い人生体験も全く無視して、下部構造が上部構造を支配するといふ偏見が露骨に顔をのぞかせてゐるだけではないか。しかもこれがそのまま十七条憲法にうつがれてゐるといふ独断は、全く学問でも何でもない。アジテーションそのものだと言はざるを得ないのです。

次に聖徳太子を論じた書物として中央公論社刊の「日本の歴史」第二巻、大阪大学の直木孝次郎教授の文章を読んでみませう。

『十七条憲法が高遠な思想を述べた文章であることはまちがひない。多くの学者によって言はれてゐるやうに、儒教、仏教、法家などの説をもちこみ、用語の出典は、詩経、尚書、孝

経、論語、左伝……などに及ぶといふ。さすがに太子である。太子の天才をもってしてはじめて可能である。といふのが通説である。用語はそれぞれの原典から直接とったのではなく、美辞名句集といったやうな書物から孫引きしたのかもしれないが、いくら太子が偉いといっても、七世紀初頭の日本でそこまで進んだ文章が書けるだらうか、と疑うのが津田流の考へかたである。読者はどちらの考へかたに賛成されるだらうか。』

いふまでもなく、通説を信じる者は愚かで、津田左右吉氏の学説こそ正しいのだと言はんばかりの文章です。そのやうな問題の出し方も実におかしいのですが、さらに大きな問題は、いづれにしても聖徳太子の偉大さを、様々の言葉、概念を操作するのがいかに巧みだったかといふことだけで評価しようとする筆者の人間観です。それは概念を操作することが学問であるといふ現在の学界の風潮の反映かも知りませんが、人間そのものがすっぱり落ちてしまつてゐるといふ点で、その二つは全く共通だといはざるを得ません。しかもこの書物の付録で著者は司馬遼太郎氏と対談してゐるのですが、著者はその中で

『日本書紀やなんか書いてあるものだったら、もう完全無欠で、倭国の教主、日本の聖主といふ文字通りの聖徳太子ですが、そんな完全な人間はあり得たはずはないので、もっと人間的な聖徳太子といふのを再構成するのが歴史家の任務ですけれども、それがむずかしい問題です。』

と言つてゐます。平安時代に書かれた「聖徳太子伝暦」などなら完全無欠な太子像と言つてもいいかも知れない。しかし日本書紀には太子に対する思慕のおもひこそあれ、どこに完全無欠な人間像が描かれてゐるか、しかも「もつと人間的な聖徳太子といふのを再構成するのが歴史家の任務」であるとは一体何か。これまで見てきたやうに、太子御自身がいかに自分が愚かであるかを繰りかへしくおつしやつてゐるではないか。人間的な太子像は、太子の御言葉一つ一つをお偲びするときに、痛いほどに理解されてくるはずです。さういふ学問の正道を棚に上げて、人間的太子像を再構成するといふのは歴史学者の傲慢以外の何ものでもありませんまい。

近代史学の誤謬と学問の正道

次に、最近出版された小学館の「人物・日本の歴史」の中の、松本清張氏執筆の「聖徳太子」の一節をとりあげます。

『近代史学の照射はレントゲン光線にも似て情容赦がない。こうした太子の経歴や事蹟のある部分は虚線として映し出され、ある部分は疑わしい線として浮び上り、虚線はぬぐいとられ、疑問線は学会の論議をうけている。戦前に十分に許されなかつた自由は、戦後になつていきいきとした史料批判となり、聖徳太子像のゆがみを修正しつゝある。それでもなおかつな

ものかに遠慮したような、歯切れの悪い学説がないでもないが』

筆者はかう書いたあと、聖徳太子の事業として伝へられるもの一切に「レントゲン光線」をあてて、それらすべてが実証出来ないものばかりだと断定するのです。このやうな断定がいかに独断に満ちたものか、ここで申しあげるまでもありませんが、たしかに「近代史学の照射はレントゲン光線にも似て情容赦がない」といふのは巧みな比喩です。昨年 of 合宿教室で小林秀雄先生は、科学といふものは計量出来る経験だけに絞ったものだとおっしゃいました。しかしこの人生には計量出来ないものが山程ある。人間の喜びとか悲しみは一体計量出来るものか、小林先生がきびしくおっしゃったお言葉はまだ私達の耳に残ってをります。ところが、科学では、近代の史学では、この計量出来るもの、合理的判断に耐へるもの、いはゆる客観的なものだけを学問の対象として扱ふわけですから、丁度肉を取ってしまった骨ばかりといふことなるのです。かうして近代史学の鏡にうつし出された歴史像はまさしく松本氏のいふレントゲンで映し出された骸骨のやうなものになるのです。かうして現在の学問の世界では、十七条憲法の中にこめられた太子の御心、今日はとりあげませんでした。法華、維摩、勝鬘の三つのお経について御書きになった、所謂三経義疏の中に表現された太子の御精神、さういふものに触れようとする努力はなされず、それらが太子の御作か否か、たゞそれだけが学界の関心事になつてゐる、そのやうな学界の風潮の赴くところ、学問は「いのちに至る道」であるどころか、む

しろいのちを断ち切ることによってはじめ成り立つものだといふことになってゐるのです。一体これでいいのか。だがこのやうな風潮は西洋の学問をうけ入れた現代の学界の状況ではあつても、明治以前は決してさうではなかつた。その時代の学問のあり方について小林秀雄先生は著書「考へるヒント」の中で次のやうに述べてをられます。

『当時の学問とは学といふよりむしろ芸に似てゐた。彼等の思想獲得の経緯には团十郎や藤十郎が、たゞ型に精通し、その極まるところで型を破つて、抜群の技を得たのと同じ趣がある。彼等の学問は彼等の渾身の技であつた。』

当時とは江戸時代のこと、その当時の人々にとっては学問とは何かを知るといふのではなく、昔の人が生きた道を自分も一緒になつて歩いていくことだつた。それを先生は芸のごときもの、渾身の技であつたと言はれるのです。

『彼等は皆読書の達人であつた。素行や仁斎の古学と言ひ、徂徠の古文辞学と言ひ、近代的な学問の方法といふやうなものでは決してなかつた。彼等はただひたすら言を学んで、我が心に問ふたのであり、紙背に徹する眼光をいかにして得ようかと肝胆を砕いたのである。』

当時の学問にとつて、勝負は読みの深さ浅さによつて決まつた。眼光紙背に徹するか否か、問題はそこにあつた。従つて

『彼（伊藤仁斎）は孔子の研究家とは言へない。むしろ深い意味での孔子の模倣者なのであ

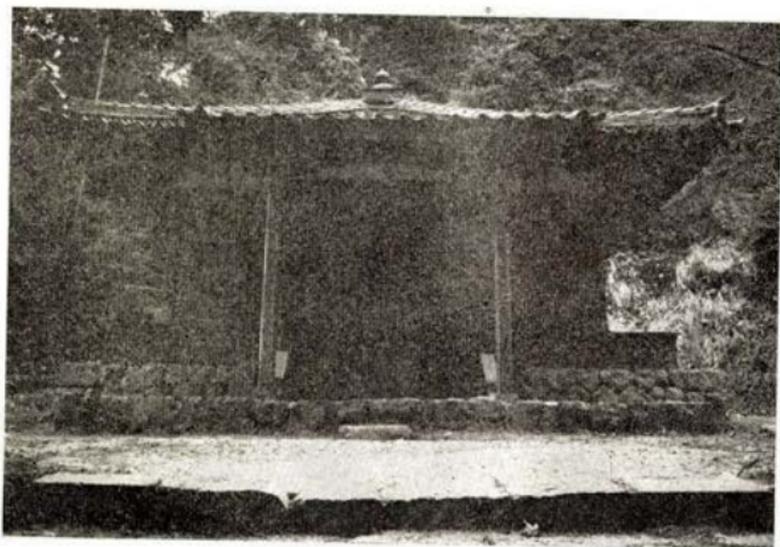
る。彼は孔子の思想を正しく説明したのではない。むしろ孔子といふ原符を正しく弾いた人である。』

といふことになるのです。「正しく弾く」とは「渾身の力」を傾けて、芸の極地を極めるといふことと同じでせう。ここにはまさしく「いのちに至る」学問の正道がある。だがそれは単に江戸時代以来のものではなく、聖徳太子の三経義疏にも見るごとく、日本古来の学問の道筋だった。その道筋を共に歩んでいきたい、それが大学の学問の中心に据えられる時は何時か、その日のためにお互ひに力を合はせて励んでいきたいと切に思ひます。

(福岡県立修猷館高等学校教諭)

若き友らへ語りかける言葉

長内俊平



ロゴスとコトバ
自己はありやなしや
我を忘れて
通ひ慣れる

ロゴスとコトバ

壇上から話をするのは余り得意ではないので、今日は諸君が私の家に遊びに来て居って、御馳走でも食べながら、その間に私がぼつりぼつり話をする。さういふつもりで語りかけたいと思ひます。

実はこの間、大野晋さんといふ方が書いてをられます、『日本語をさかのぼる』といふ本を読みまして、大変感動したところがあります。それは聖書のヨハネ伝に、「はじめにコトバあり、コトバは神とともにあり、コトバは神なりき」といふ一節がありますが、この翻訳がどうも間違ひではないかといふことを書いてをられるのです。

つまりヨハネ伝の翻訳は、「ロゴス (Logos)」を「コトバ」と訳してしまつてゐるのです。が、このことを大野さんは、大きな誤りであると言つてをられるのです。

簡単に申しますと、「ロゴス」といふのは、ものを集めて来て、それを整理して筋道を立てる。即ち論理を組み立てる。さういふ理性といふものが「ロゴス」といふものだからです。ところが日本語の「コトバ」といふのは、「コトのハシ(端)」、「コト」といふありのままの全体を表現することは、なかなか難かしいことでありますから、その一部分を口で表現するといふ

ことなのだそうです。

したがって「コトバ」は「ロゴス」といふやうな、論理とか、或は論理を組み立てるところの、理性などといふものとは全く違ふ性格のものらしいのです。

私はこのことをなぜ申しあげるかと言ひますと、この合宿で先生方が色々と話されたことを振り返ります時に、論理といふものは「コト」の一部分しか説明出来ないものであるに拘らずそれを恰も全体的ことをとらへてゐるかのやうにうけとり、その論理を求めることが、非常に立派な学問であるかのやうに錯覚してをつたのでないかといふことを、ロゴスをコトバと翻訳したといふことのなかに、感じさせられたからなのです。

ところで日本語には、「コトバ」の他に、「コトノハ」といふのがあります。これは「コトバ」とは違って、古くから非常に大切にされて来たものらしいのです。昨日志賀君の話のなかに、「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり」といふ松陰先生のことばがありました。だが、「コト」といふものも、この心のやうに温く生きてゐるものであります。それを的確に表現することは非常に困難である。それで小柳先生が「コト」を本当に表現する言葉、それは芸術的な緊張を伴つてゐるものである、とおっしゃいましたが、さういふ芸術的な緊張をともなつたものを「コトノハ」といふのだそうです。

それで、私が今からお話することは、——私は達人でございませぬから——「コトノハ」での話



は勿論出来ませんので、できるだけだけの努力をして、私
のことはを以って「コト」を皆さんに訴へたい。従ひ
まして論理的ではございません。最後になって「長内
は何をしゃべったんだ？」といふことになるかも知れ
ませんけれども、そのなかの一つの言葉でも心にとど
めていただけるものがあれば幸いです。

自己はありやなしや

先程、和歌創作の導入講義で、菊池神社のことが出
て参りましたが、実は私、以前この菊池にゐたことが
あるのです。

今の年代ですと、大学二年の頃ですか、丁度諸君の
年の頃に、航空隊に入り限府といふところで—今の菊
池市ですが—赤トンボの練習をしてゐたのです。

それで日曜日になると、菊池神社に参拝して、宮司

さんから御神酒をいただき、帰りには菊池神社の近くの小さなお寺の和尚さんのところへよく遊びに行ったものでした。するとある日、その和尚さんが、突然私に、「自己はありやなしや」と聞かれたのです。私は冷汗が出て来ましたが、しばらくして「ありとも言はず、なしとも言はず」と名答(?)したわけです。諸君なら何と答へますか。丁度諸君の年頃ですよ。

さて、私は今年の天長節即ち四月二十九日ですね、例年のやうに家族と一緒に家の神様を拝み「今日の吉き日は 大君の うまれたまひし、吉き日なり……」といふ祝歌を斉唱し、それから門口に日の丸の旗をたてて、八幡様にお参りに行ったんであります。

去年、をととしまでは、自分一人が、自分の家族だけでも、日の丸の旗を立てたり、天長節の歌を唱へばいいんだといふ考へもありました。

しかし今年は、八幡様に行く途中の家々に、日の丸の旗があまり立ってゐないことを本当に淋しく感じました。私今までこんなに淋しく感じたことはないんですよ。

そこで私思つたのです。自分らだけでも紀元節、天長節を守っていくんだといふやうなことは、とても心の満足は得られるものでない。

隣のおやぢさん、向ひの奥さん、みんなが日の丸の旗をたてて、「おめでたうございます。今日は天子様のお生れの日ですね。おめでたうございます。」といふ世の中が来ない限りは、

私の本当の喜びといふものがないといふことを感じたのであります。

いいですか。このことは先程言った「自己はありやなしや」といふことと関係があるんですよ。私の家内、子供と離れて、私はありません。今日諸君とここでつきあってゐることを絶った私といふものはないんですよ。

これをロゴ斯的に説明するとかうなります。「人間は空気がなければ生きてゆけないでせう。水がなければ生きてゆけないでせう。人をセメントの箱に入れて置くと、水や空気や食物を与へて置いても、三日もたたないうちに狂ふさうですね。人間、他とのつながりを絶つたら死ぬさうですよ。気狂ひになるさうですよ。」と。

さう言へば諸君は、「ああ、さうか、さうか」と、分つたやうな顔をするでせう。ところがさういふわかり方といふのは、本当にわかつたことにはならないんですよ。

小田村先生が、お話のなかでパリーの一主婦の夢のことにふれられ、生きる力といふことをおっしゃいましたね。本当のわかり方、本当の知り方といふものは、しみじみと感ずるか、身体がぶるぶる震へるやうな感動でもって感じ取るか、さういふ知り方でなければ生きる力にはなりません。ここは大事なところです。生きる力といふのはどういふことかと言ひますと、しみじみとわかるか、身体がぶるぶる震へる様な知り方をしますと、次の日からの生活態度が変つて来るんですよ。

くどい様ですが、親不孝な態度をとる人に対して、「お前を生んでくれたのはお母さんじゃないか。毎日ご飯を食べさせてくれてゐるんぢやないか。授業料を送ってくれてゐるぢやないか。」といくら説明したって、親孝行にならないんですよ。その人がある朝早く起きて、子供のためにご飯を炊いてゐるお母さんの後姿を見て、「ああ、私は親不孝であったなあ」といふふうにしみじみと感じて、始めてその人は、次の日から態度が変つて来るんであります、論理的にいくら説明しても、感ずる力を持たない人にはわからないですよ。

さういふしみじみとしたわかり方でなければ、本当の生きる力にはならないといふことを、私は諸君に訴へたいのです。

ここで御製を何首か拝誦したいと思ひます。私は朝夕御製を拝誦できることを、本当に嬉しく有難く思つてゐます。昨日も吉田君が今上陛下の御製を拝誦してくれましたね。ここで最初に拝誦したいと思ひますのは、今晚の慰霊祭で神主の役をして下さる関さんの「神宮林奉仕記」の中にひかれてゐる次の御製です。

植樹行事に際して

人々とうゑし苗木よ年とともに国のさちともなりてさかえよ

くはを手になへうゑをへて人々のするそのさまをみるがたのしき

それから吉田君が、拝誦してくれましたあの大御歌

(昭和三十四年)

(昭和三十五年)

ともしび

港まつり光りかがやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる

（昭和三十二年）

これらの御製を拝誦してをりますと、「人々とうゑし苗木よ」、「人々のするそのさまを見るがたのしき」と国民と共に苗木を植ゑてをられる陛下のお喜びが、しみじみと伝はって来りやうに思はれるのです。そして港まつりのみ歌からは、思はず御自分もともしびを振って、国民にお答へになつてをられる御様子が、目に浮ぶやうに思はれるのです。

また、明治天皇の御製のなかに

風

なにとなく人の心もさわぐかな空ふく風のしづまらぬまは

（明治四十三年）

をりにふれて

おのづからわが心さへやすからず隣のくにのさわがしき世は

（明治四十五年）

車上雪

しづのをが一人ひきゆくをぐるまの重荷の上につもる雪かな

（明治四十年）

といふのがございます。

このやうに、本当に他ともなる生といふものを、日本の歴代の天皇はお祈りになられ、身を以って行じてこられたのではないでせうか。

自己とは何かといふことは、生涯の問題ですので、どうか諸君も胸に温めて絶えず念っていただきます。

個人主義などとよくいひますけれども、個人といふものが一体あるものかどうか、とことんまで考へてほしいと思ふのです。

我を忘れて

私達の先輩に桑原暁一さんといふ方がゐらっしゃいます。二年前になくなられましたが、この方の本をなくなつてから初めて読んでゐる様なもので、何故もつと早く桑原さんを知つて教へを乞ひに行かなかつたかといまでも毎日の様に思つてゐます。その桑原さんの遺著『国史の地熱』の中の一節に「小歌うたひて」と題されて太平記の文章を引用されてゐるところがあります。一寸読んでみます。

△興国元年（暦応三年）（一三四〇）の四月の初めつ方、につたよしさだ新田義貞わきやぎようぶきようよしすけ舎弟脇屋刑部卿義助

（一三四七）は、四国の宮方を統卒すべく、伊予国へ渡った。しかし五月四日より病をうけ、わずか七日をすぎてはかなくなつた。宮方の最後の拠点は太館左馬助氏明のこもるところの世田城であつた。寄手の大將細川刑部大輔頼春は一万余騎を七手に分けて城の四辺に陣々を構えた。城中、すでに矢尽き食乏しく、防ぐべきようもないので、九月三日の暁、太館左馬助主従十七騎をはじめ士卒みな、城を出て壮烈な死を遂げた。しかし篠塚伊賀守一人は例外であつた。大手の一、二の木戸を広く押し開け、ただ一人突つ立つていた。降人に出るためかと見るに、さにはあらず、紺糸の鎧に竜頭の甲の緒を締め、四尺三寸ある、いかもの造りの太刀に八尺あまりの金さい棒（こんいと ぼう）わきにはさみ、「よそにては定めて名をも聞きつらん、今は近づいてわれを知れ。畠山庄司重忠（しやうじしげただ）が六代の孫、むさしの国に生い育ちて、新田左中将殿（義貞）に、一騎当千とたのまれたりし篠塚伊賀守と云ふ者こゝにあり、討つて勲功に預かれ」と大音声挙げて名告るやいなや、百騎ばかり控えていた敵の中へ、少しのためらいもなく走りかゝる。その勢い、骨柄の勇鋭たるのみならず、かねて聞き及ぶ大力なればこれに手向かうもの一人もなく、百騎の勢はさつと東西にひきのいて、途をあけて彼を通す。彼は馬にも乗らず、弓矢も持たなただ一人のこと。何ほどのことがあるう、遠矢にて射殺せ、とつて返さば馳け悩まして討て、とて二百余騎、彼の跡を追う。ところが――

篠塚は少しもさわがず、小歌うたひて、しづかにあゆみけるが、敵近づけば、「ああ、御辺

たち、いたう近づいて頸に仲たがひすなと、あざ笑つて立ち止まる。敵矢先をそろへて射れば、「某が鎧には、かたがたのべろく、矢は、よも立ち候はじ。すは、射て見給へ」とて、うしろをさしまかせて休み居たり。篠塚、名譽の者なれば、一人なりとも、もしや討ちとどむる、と追つかけたる敵二百騎に六里の道を送られて、その夜の夜半ばかりに今張浦に着きにけり。

その沖には敵の乗りすてし、水手^{かこ}だけ残っている船があつた。彼は鎧を着たまま泳ぎつき、「われは宮方の落人に篠塚と云ふ者ぞ、この船出いて、われをいんの島へおくれ」とて、おどろきさわぐ水手を尻目に、廿余人がかりで繰り上げる碇^{いかり}をやすくと引き上げ、十四五尋^{ひろ}ある帆柱をかるくと押し立て、屋形の内にて高枕のいびきをかいて寝てしまった。水手^{かじとり}梶取、これにおそれをなして、彼をいんの島に送りつけたのであつた。

(いんの島は因の島、すなわち瀬戸内海の小島であらう。)

この後に桑原さんは、「あとがき」として、御自分の所感をわづか数行書き添へてをられ、これは、「死も生も、何も彼も、すべてを通りぬけた、いわば透明な虚無の声である。」と書いてをられるのであります。私これを読んでるうちに次のことばが浮んで来たのであります。それは五年前のこの合宿で、やはり「国史の地熱」と題されて桑原さんが御講義をなさつた「今でもお話をききながら胸がわくわくしたことを忘れません」時に引用された、北畠

顕家が、後醍醐天皇へさしあげた上奏文のなかの、「私を忘れて君を思ふ、悪を^{しりぞ}卻けて正に帰さんと欲するの故なり。」といふ言葉であります。

○
 時間がないのでまとまりませんが、私の貧しい体験も話しておかないと、長内は頭でものを考へてゐると言はれるから申します。

時は昭和二十五年四月、所は東北大学、ある男が構内を通りかかった。すると二百名ばかりの学生が、まはりに輪をかき、五十名ぐらゐるの学生が中に坐つて、その真中に学生部長を据ゑつけて、つるしあげをぞしてゐたりける。その男は入試に合格はしたもののまだ入学式は終つてゐなかつたが、そばで聞いてゐると、「全学の名において……」といふ声が耳に入った途端にその若武者は、「待て!! いま汝は『全学の名において』と申しつれど、おれは賛成した覚えはない。先生、こんな者どもを相手にする必要はないから、こつちに来なさい」と言ひつつ、つかくゝと入つて行つて先生の手を握り、そのまま追つたてて二人で静かに帰つてぞゆきたりける。誰も後を追ふ者はなかつた。それは私でしたよ、本当に。

私は諸君に何を話したいと思つてゐるかお分りですか。諸君は近頃よく勉強し、私も大変教へられるところが多く、感心するんですけれども、この「我を忘れて」といふことを一つ若い青年にやつてもらはなくてはいけないと感じてゐるのです。

「我を忘れて」といふのは、私の体験から言ひますと、三つの特徴があるやうに思ひます。一つは心に動揺がない、不安が残らない。二つには、懐かしいところへ自然に帰ってゆくやうな気持である、いま一つは自分の一身（身体・生命・名譽等）のことは忘れてゐる。さういふ状態なんです。私が学生に取りかこまれてゐる先生の所へ、つか／＼と歩いて行つたのも、さういふ「我を忘れた」状態だつたと思ひます。

それなら「我を忘れる」といふことは、どうしたら出来るかといふことでありますけれども、これは宇宙に瀰漫してゐる情操（宇宙のいのち）に自分の情緒の波長が合つた時なのか、祖先の声が聞えて来るためなのか、さういふことは分りませんが、諸君だつて心のささやきはきこえてくるでせう。幼心のあるものには、きつときこえてくるものなのです。

ところが諸君は、心のささやきがきこえて来てもすぐ実行しないんです。「そんなことをするのは馬鹿らしい」とかなどと、いはゆる「知」ね、生きる力にならない「知」といふものが邪魔をするんですよ。

だから、それを乗り越えるためには、心のささやきが聞えたときはやって下さい。失敗してもいいぢやないですか。青年らしく、心のささやきに従つて、全力で生きて行つてほしいと思ふんです。あなた方は、この合宿で先生方のお話を聞いて、「いいお話がきけた。少し分つた。」ではいけないと思ふ。「我を忘れて」といふ生き方をしてはじめて、須佐之男命のやう

な、自分の娘さんを、大國主命に取られた時に、遠くからはるばると、ゴツツイ愛情の声をかけてやったやうな男になっていくぢやないですか。さういふ体験を経ないで大人になりますと片輪の人間になりますよ、そして日本の國は駄目になりますよ。

きようはゆっくり話しをする時間もなくて、「厩裏のはたに繩なふ父は、過ぎし昔の手柄を語る」といふことになりましたが、本当は失敗した話の方がよかったのかも知れませぬ。今度諸君が私の家に遊びに来た時には、ゆっくり御神酒でも馳走しながら、私の失敗談を話してあげることによませう。

さうさう、恋も我を忘れることのひとつですよ。選ばれたるものを除いては、熱烈な恋の出来ないやうな者は、熱烈な愛国者になれない。本当に素晴らしい恋をすることも「我を忘れる」ことのひとつであります。

通ひ慣れる

最後に、きようはこれから慰霊祭がありますが、慰霊祭のことに関連して、もう一つだけ話をさせていただきたいと思ひます。

小田村先生と小柳先生の共著に、『歴代天皇の御歌』といふ御本があります。その「はしが

き」を小田村先生が書いてをられるのですが、その一節に、

△遠い遠いところに居られるやうに感じてゐた御歴代の天皇がたが、御歌を拝読するわれわれの目の前に、身近かにお姿を現され、お声をかけてくださるやうな気さへしてくる。▽

と書いてをられます。

私ね。通ひ慣れるといふことが、如何に大事かといふことを言ひたいんですよ。「神は何ぞや」なんて、いくら考へたつて神は出て来ませんよ。神社にお参りに行つて、お祭りに参列して下さい。降神の儀の時など、身体がぶるぶると震へて来ますよ。

古典を読むといふこともさうなんですが、通ひ慣れなければ、懐かしさが湧いてこないんですよ。きよの慰霊祭も、祖先のところへ我々が通ひ慣れる、厳肅な方式の一つとしてあるのだと思ふのです。慰霊祭といふものを、頭で考へてもわかりません。きよの祭壇を作つてゐる庭に、祖先の御霊が降りてこられることを、身体で感じてほしいのです。

(電源開発株式会社北本事務所所長代理)

今上天皇のお歌について
——和歌と学問——



夜久正雄

けさの感想——心の世界

学問と歌とは

和歌と学問

黒上正一郎先生「凡そ精神科学研究は……」

W・ヴントの「精神科学」

言と事と心と（本居宣長「うひ山ぶみ」から）

学問と和歌（同じく「うひ山ぶみ」から）

正岡子規の歌論

「天皇制」論について

明治天皇のお歌

今上天皇のお歌

けさの感想 — 心の世界

けさ、私は、講義の準備もございましたので、みなさんより少し早く起きましたが、洗面してゐると、ひぐらしが二声、三声鳴きました。朝のひぐらしの声といふものはまことに心にしみみるもので、静かな明け方の空気をふるはせて、生きてゆく命をうたひあげてゐるやうにしみじみと聞かれました。それから洗面をすませて窓を開けて、ちよつと外に出ましたが、外に出てみると、我々の毎朝集まるあの広場に、明治天皇の御製の書かれたのぼりが翩翩とひるがへつてをり、空はだんだん明けてゆく景色で、本当にすがすがしく心が開けていく思ひがいたしました。

さうすると、明け方のはとりの声が聞えました。これはひさしぶりに聞くにはとりの声で、これも心にしみてくるものでした。世界が明けて人間の営みがこれから始まってゆくといふやうな思ひで、しみじみとこの人生に心を開かせられるやうな、さういふ思ひでございました。その時、小田村さんの御講義の資料の中にもありました『国民同胞』一六五号に、広瀬誠さんの書かれた「暁の鶏声と日本の古伝承」といふ文章がチラッと心をよぎりました。広瀬君は、かういふ明け方のことを思ひながらあの文章を書いたのだなあと思つたのです。それはそ

れだけのことでどうといふことはございせん。ただ、けさ、明けて行く天地の中に立つての私のつたない思ひなのですが、そのとき、ふとふり返ってみると、人の心といふものは、かういふ広い天地につながって生きてゐるのだといふ感じが特にしみじみとしたのです。

これを、何か自分の特別の立場で研究する——自然を研究の対象にするといふと、自然の全体は、分析的な考察の対象となりますから、自然とひとつになつてゐる世界は、一言で言へば、壊れてしまひます。にはとりの声の波長をしらべるとか、それをひぐらしの声の波長とくらべるとか、そんなことを考へたりしらべたりすれば、全体として自分の味はつてゐる心持とはちがつたものになつてしまふ。この美しい自然を感じてゐる心の世界、その中にふと友の文章が浮んでくる、そしてその文章と同時に友人の面影まで浮んでくるといふ、さういふ世界は、広い、限りなく広い世界であつて、それは、自分の欲とか専門とか、さういふことに執着してゐては、全体として感ずることはできないのですが、無心にそれを受けいれるならば、ほとんど限りなく広がってゆく広大な世界であるといふ思ひがしたのです。

そんな感想にふけてゐたのですが、それでは講義の準備ができませんから、部屋に帰つて来て、きょう話すことを整理してゐると、すぐ部屋のそばで、小鳥が美しい声で鳴きはじめました。そのとき私は、昨日長内さんが話してをられた先輩の、亡くなられた桑原（暁一）さん（国文研叢書『国史の地熱』その他の著書）のことを思ひました。みなさんには唐突に聞える



でせうが、——朝の小鳥の声を聞いてみると、鳥の声に託されて桑原さんの魂が、ぼくのすぐそばによみがへって来て、僕を見守ってゐるやうに感じたのです。それは、やはり我々の心の世界のことなのであって、我々の心の世界には、さういふ死んだ人の言葉も声も、面影も生きてゐるし、たくさんの人の声がひびいて来てをり、また、広い限らない世界にひろがっているものである、——つくづくさう感じたわけなのです。

学問と歌ことば

そこで、我々の言ふ「学問」は、かういふ世界の我々の心をひろげるものでなければならぬ、さういふ学問が本当の学問なのだといふ気持がします。さういふ広い世界に我々の心をつないでゆく、そのつながり

をゆたかにしてゆく道、そのつながりを深めてゆく道、それが本当の学問なのだといふことをつくづく考へるわけです。

合宿も今日で四日目といふことですが、私はどれだけの日数が過ぎてゐるのかわからないやうな心持です。そんな気持で現在の壇上に立つてをりますが、ちよつとふり返つてみただけでも、たくさんの人の顔とことばとが浮んで来て、とてもひとつひとつ思ひ出すことはできません。しかし、さういふ経験が私の心の中にいっぱいになつてゐる。思ひ出さうとすれば限りなくたどることのできる経験——我を忘れて聞いたことば、我を忘れて経験したこと、さういふことが、我々の心の中にいっぱいになつてゐる、それが本当の経験なのでせう。その経験が今後のわれわれを導いてゆくのです。

昨日の慰霊祭に小田村先生が祝詞をあげられましたが、その中に次のちかひのことばがありました。

「いましみことたちの残したまひし御命みいのちのこもれる数々のみ言葉を学び、其そを、我らが心に生々とよみがへらせつつ、さまざまに乱れてある現し世まがことの禍事を誤ることなくふみわけふみわけつつ進み行かむと誓ひまつる。」

この「み命のこもれる数々のみことばを学び、其を、我らが心に生々とよみがへらせつつ」それをしるべとして生きてゆく、——これが学問の根本だと私は考へます。

「学問」とは、学ぶこと、——真似をすることです。すぐれた人を仰いでその真似をすることです。行為の形だけまねたのではダメなことはおわかりでせう。行為のもとになる心を学ぶのです。その心は言葉として残されてゐます。簡単なことですが、これが学問の根本だと私は思ひます。

昨日の慰霊祭で「海行かば」を斉唱いたしました。この歌は、昨日も説明がありましたやうに、『万葉集』のおほともちのやかもち大伴家持の長歌の中に出て来ます。『万葉集』巻の十八、「陸奥の国より金をこがね出せる詔書をことば賀ぐ歌」の中に、家持はこの歌を大伴氏の言立ことだてと言つて、この精神にはづることなく忠誠のまことをつくすことを詠じてゐるのです。ですから、家持その人にとつても祖先からの伝承であつたと見られます。家持は、この歌ことばを「言ひ継ぐ」ことを誓つてゐるのです。家持がこの長歌を作つたのは奈良時代、天平の昔のことですから、いまから千二百年の昔になります。その時すでに、家持の言葉をもつてすれば、家持の遠い祖先おほくめぬしのみことの大久目主命以来、つまり神代の昔からうたひつがれて来たと言つてゐるのです。その言葉を家持が長歌の中にうたひとどめ、それを千二百年後の今日のわれわれが、心からうたひあげるといふこと、——私は、学問はここにきはまると思ひます。

また同じ時、三井甲之先生の「ますらをのかなしき命つみかさねつみ重ねまもる大和島根を」の歌が朗詠されました。これは、昭和二年の歌ですから、今から五十年前の歌になりま

す。「海行かば」の歌からすれば、ごく最近の歌と言へませう。しかし、その間には、千年の歳月のちがひなど意識できない、国をおもふ同じいのちのあらはれが感じられるではありませんか。説明すれば、年月のちがひが出て来ますが、実際にわれわれが経験してゐるのは、その歌をよんだ時に感激したといふことなのです。遠い昔の人の心をことばを通して、われわれの心にひしひしと感じたといふことなのです。これが大事なことなのであって、我々の心の世界といふものは、どんなにひろがってゆくものであるか、その世界を限りなく感ずるといふことは、我々がその世界の中の小さな、しかししたしかな一点であることを感ずることです。これが学問の基礎としての自覚といふことだと思ひます。

いま私の述べましたことは、本日お話ししたいと思ふことを、感想として一気に述べたわけでございます。つまり、学問の中心には和歌があつたといふことをお話ししたのです。

和歌と学問

さて、みなさんにおくばりしてある講義資料は、「和歌と学問」といふテーマに即しまして、私が教へを仰いで来た人々の言葉からの摘録であります。これを作りしたのは七月の十日のメ切でしたので、その段階で整理しましたので、多少の順序を考へて、摘録しましたが、

いま思ひますと、その一つ一つがそれぞれほとんど独立して、学問の本当の姿を浮彫りにしてゐると思はれます。その一つ一つの言葉にふれて、学問の本質といふものを歌の世界があらはしてゐるといふことを、これから続けてお話ししてみようと思ひます。

ところで、みなさんはひとり残らず歌を作られたわけですから、その経験をありのままにふりかへつてみて、これからの話をお聞き願ひます。歌を作ったことのない人には理解しにくい箇所があると思はれますが、それは致し方ないことでせう。われわれは自分の経験にもとづいて理解するのですから。

「歌をよむ」といふ言葉はおもしろい言葉で、自分で歌を作る「詠む」も「よむ」と言ひますが、人の歌を「読む」のも「よむ」です。同じに使ふのです。これは、同じ心の働らきだからでせう。我々は自分ではすぐれた歌を詠むことはなかなかできないので、人のすぐれた歌を読んで、さういふ気持を自分の心の中で、再現するのです。そして、実際に当つてさういふ心持を実現するやうに望むのです。柿本人麿の恋愛の歌を愛唱するのは、彼のやうな恋愛感情で恋愛したいと願ふことです。吉田松陰の辞世の歌を読んで涙ぐむのは、いざといふ時さういふ気持で死ねたらいいなあといふ、一種のあこがれの気持がそこに働くからです。前田秀一郎君が、松尾さんのお作りになった歌を何首か読んでくださいましたが、あの歌を読んで感じない方はないでせう。そのとき、われわれの心に松尾さんのお心が伝はつて来て、我々ももし松尾

さんのやうな境遇になったときには、自分もまたさういふ気持で生きられたら本當なのだなあといふ気持が無意識裡に働らいて、長内さんの話でいふ「なつかしい」といふ感じがするのですね。自分の生命の根源につらなつてゆくやうな、死んだ親のことばを聞くやうな、さういふ感情を味はふのです。人のまごころにふれるといふことはかういふことでせう。

黒上正一郎先生「凡そ精神科学的研究は……」

次に講義資料に入つてまづ黒上先生の言葉をあげます。

「凡そ精神科学的研究は人生そのものを対象とするが故に、冷静なる学術的研究もまたそれが研究者の体験に統一せられて生命を得るのである。殊に悠久の国民生活を照したまふ御心の表現に対しては、研究そのものも亦現実生活における憶念の信の実現を念とし、同信師友の協力によつて無窮に相続せらるべきと共に、又それは御心によつて開発せしめられたる研究者の信念告白を内容たらしむべしと信ずるのである。」（『日本への回帰』第十集、一九一ページ。『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』序説、九ページ）

これは、黒上先生の研究態度をあらはしてゐるお言葉だと思ひます。要約すれば、聖徳太子の研究といふのは、ただ概念理論の研究であつてはならない。太子のお心をあらはしたその文

章をよく読んで、そこから我々が生きる道として学んだことを、この世に実現することを志すべきであるといはれるのです。「研究そのものも……研究者の信念告白を内容たらしむべきであると信ずるのである。」と強い言葉で結ばれてゐます。文字の上の訓詁や解釈にとどまらざるはならないといふことを強く言はれるのです。真の学問とは何かといふことを黒上先生が告白的に述べてをられるのです。

W・ヴントの「精神科学」

右の文中の「精神科学的研究」とある「精神科学」といふ言葉は、ドイツの大学者ウイルヘルム・ヴント（一八三二—一九二〇）のガイステス・ヴィッセンシャフト *Geistes Wissenschaft* の訳語です。ヴントは社会・人文の学を綜合して、「精神科学」としましたが、その第一原理として「主観的判定」の原理をあげてゐます。精神的表現に対しては研究者はまづ自己の体験に基いて判断する、といふのです。

ヴントは、人間の精神を研究するにはその表現を対象としなければならぬと言つて、言語を重視しました。そこでヴントの精神科学は文献の価値判断といふことになりませんが、その場合、人が誰でもすることは、人の言葉を自分の心に照らして理解することだと言ふのです。こ

れは当り前のことですが、このことを確認しておかないと、とんでもない間違ひをおこすことになるといふのです。

自分の体験に照らすといふのは、研究者自身が自己の体験をかへりみるのですが、この自己の体験をかへりみるといふことは、また体験の表現によってのみ可能なのです。つまり研究と表現とは表裏の関係にあることになります。これはやがて黒上先生が「研究そのものも……研究者の信念告白を内容たらしむべきであると信ずるのである。」と言はれたことに通じるのです。

言と事と心と（本居宣長「うひ山ぶみ」から）

次は、本居宣長の学問論です。宣長は、三十年かかった『古事記伝』を完成した年に、『うひ山ぶみ』といふ学問の入門書を書きました。これは、短い簡明なものですが、畢生の著述であった古事記研究の結論とも言へるのではないでせうか。寛政十年、一七九九年頃のことですから、ヴントより百年以上も前のことになります。その一節を読んでもみます。

「……まづ大かた人は、言ゴトと事コトと心ココロと、そのさま大抵相かなひて、似たる物にて、たとへば心のかしこき人は、いふ言のさまも、なす事のさまも、それに応じて、かしこく、心のつた

なき人は、いふ言のさまも、なすわざのさまも、それに応じて、つたなきものなり、又男は、思ふ心も、いふ言も、なす事も、男のさまあり、女は、おもふ心も、いふ言も、なす言も、女のさまあり、されば時代時代の差別も、又これらのごとくにて、心も言も事も、上代の人は、上代のさま、中古の人は中古のさま、後世の人は、後世のさま有て、おのおのその言へる言となせる事と、思へる心と、相かなひて似たる物なるを、今の世に在て、その上代の人の、言をも事をも心をも、考へしらんとするに、そのいへりし言は、歌に伝はり、なせりし事は、史に伝はれるを、その史も、言を以て記したれば、言の外ならず、心のさまも、又歌にて知るべし、言と事と心とは其さま相かなへるものなれば、後世にして、古の人の、思へる心、なせる事をしりて、その世の有さまを、まさしくしるべきことは、古言古歌にあるなり……」

正に、この通りと言ふほかありません。学問はまづことばの味識からはじめなければなりません。そこで、宣長は、学問をする人は、歌をよまなければならぬと言ふのです。

学問と和歌（同じく「うひ山ぶみ」から）

「すべての人は、かならず歌をよむべきものなる内にも、学問をする者は、なほさらよま

はかなはぬわざなり。歌をよまでは、古への世のくはしき意、風雅ミヤビのおもむきは知りがたし。……すべてみづから歌をもよみ、物がたりぶみなどを常に見て、いにしへ人の、風雅のおもむきをしるは歌まなびのためには、いふに及ばず、古の道を明らめしる学問にも、いみじくたすけとなるわざなりかし。」

私は、宣長の言葉をその通りにとります。宣長は日本人はすべて歌をよまなければならぬと言つてゐるのです。わけても学問をする人は歌をよまなければならぬと言つてゐるのです。

なぜ宣長がかう言つたかは、文中の「いにしへの人の風雅のおもむきをしるは云々」といふ言葉を説明してゐる、次の文章によつてわかります。

「いにしへの人の風雅のおもむきをしるは云々　すべて人は、雅の趣をしらでは有るべからず、これをしらざるは、物のあはれをしらず、心なき人なり、かくてそのみやびの趣をしることは、歌をよみ物語書などをよく見るにあり」

「物のあはれをしらず、心なき人なり」といふのは、人にして人にあらずといふ意味でせう。次に、宣長はいはゆる学者の通弊を指摘します。

「然して古人のみやびたる情をしり、すべて古の雅たる世の有さまを、よくしるは、これ古の道をしるべき階梯なり、然るに世の物学びをするやうを見渡すに、主と道を学ぶ輩は、上

にいへるごとくにて、おほくはたゞ漢流からざまの議論理窟のみにかかづらひて、歌などよむをば、たゞあだ事のやうに思ひすて、歌集などは、ひらきて見ん物ともせず、古人の雅情を、夢にも知らざるが故に、その主とするところの古の道をも、しることあたはず、かくのごとくにては、名のみ神道にて、たゞ外国とつくにの意のみなれば、実まことには道を学ぶといふものにはあらず。」

尻馬に乗るやうですが、社会科学と言って、国家社会の研究をする大方の学者に、よく読んでみてもらひたいものです。また、和歌を専門的な芸術の一分野として、あるひは趣味として学ぶいはゆる専門歌人に対しては、次のやうに批判します。

「さて又歌をよみ文を作りて、古をしたひ好む輩は、たゞ風流のすぢにのみまつはれて、道の事をばうちすて、さらに心にかくることなければ、よろづにいにしへをしたひて、ふるき衣服調度などをよろこび、古き書をこのみよむたぐひなども、皆たゞ風流のための玩物にするのみなり。そもそも人としては、いかなる者も、人の道をしらでは有べからず、殊に何のすぢにもせよ、学問をもして、書をもよむほどの者に、道に心をよすることなく、神のめぐみのたふときわけをもしらず、なほざりに思ひて過すべきことにはあらず、古をしたひたふとむとならば、かならずまづその本たる道をこそ、第一に深く心がけて、明らめしるべきわざなるに、これをさしおきて、末にのみかゝづらふは、実にいにしへを好むといふものに

あらず、さては歌をよむも、まことにあだ事にぞありける、のりながのをしへにしたがひて、ものまなびせんともがらは、これらのこゝろをよく思ひわきまへて、あなかしこ、道をなほざりに思ひ過すことなかれ。」

歌をよんで「物のあはれ」——人の心のまことを知るのが、学問の根本であると宣長は言ひましたが、これを明治天皇さまは「ことのはのみち」とも「しきしまの道」ともおっしゃったのです。

正岡子規の歌論

次の正岡子規の歌論も、歌のことばを通して人のまことにふれる道を示したすぐれた文章の一つと言ふことができませう。短い文章ですが、子規の人生論、歌論はこの一文に圧縮されてゐるとも言へませう。この文章は直観的印象の告白からはじまり、表現技術としての歌語、声調の分析、さらに作者の思想信仰へとつづいてゐて、ことばを通じて作者のまことにいたる子規の研究態度が実によくあらはされてゐて、しかも、黒上先生の「研究が告白になる」といふ学問の本筋があらはされてゐるのです。原文には段落がありませんが、理解しやすいやうに、いまのべた趣旨にしたがつて、段落をつけてみました。よく読み味はつてみてください。

「又、晴を祈る歌に

時によりすぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめたまへ (註・源実朝)

といふがあり、恐らくは世人の好まざる所と存じ候へどもこは生の好きで好きでたまらぬ歌に御座候。此の如く勢強く恐ろしき歌はまたと有之間敷これあるまじく、八大竜王を叱咤する処竜王も憐伏致すべき勢相現れ申候。

八大竜王と八字の漢語を用ゐたる処、雨やめたまへと四三の調を用ゐたる処、皆此の歌の勢を強めたる所にて候。初三句は極めて拙き句なれども其の一直線に言ひ下して拙き処、却て其の真率偽りなきを示して祈晴の歌などには最も適當致し居候。

実朝は固より善き歌作らんとて之を作りしにもあらざるべく、只々真心より詠み出でたらんがなか／＼善き歌とは相成り候ひしやらん。こゝらは手のさきの器用を弄し言葉のあやつりにのみ拘る歌よみどもの思ひ至らぬ所に候。……」(「八たび歌よみに与ふる書」)

「天皇制」論について

さて、いままで述べて来ましたやうに、日本人の学問といふものは歌をよむこととかたく結びついて来たのですが、さうして現在でもさういふ真の学問が興るべきであると思ひますが、

それを忘れたのが、近代日本の社会科学人文科学の学者ではないでせうか。宣長の言ふ「漢流の議論理窟」です。これは「欧米流の議論理窟」と言ひかへてもよいでせう。「欧米流」といふのは「欧米摸倣」といふ意味です。その代表例ともいふべきものが、「天皇制」論です。

『広辞苑』を引くと「天皇制」について、「①広義においては、天皇が君主として存在する統治体制。②天皇に一切の権力が集中され、天皇に直属する文武の官僚によって、その権力が行使された近代日本の絶対主義的政治機構。③（省略）」（初版）とあります。「絶対主義的政治機構」といふ「絶対主義」を同じ『広辞苑』で引くと、「君主に無制限の権力を付与し、国家は君主の一身に体现されるとする説。またかような政体（絶対君主政体）。この国家形態はヨーロッパ十七、八世紀に見られ、就中、ルイ十四世『朕は国家なり』の統治はその典型、云々」とあるのです。フランス・ルイ十四世の統治に名づけた「絶対主義」といふ言葉で、いはゆる明治憲法による日本の近代国家の形態、殊に明治天皇の統治を説明するといふことは、その前提として、明治天皇とルイ十四世との間に統治思想の類比をみとめなければなりません。明治天皇さまに「朕は国家なり」といふお言葉があるでせうか。み祖神のみこころをかしこまれつゝ国と民とのために昼も夜もお心を勞せられた明治天皇さまのお心はお歌や詔勅にあふれてゐて、いつでも研究することができますから、みなさんにも研究していただきたいと思ひますが、絶対の権力を誇示するやうなお言葉はひとつも見当りません。ルイ十四世の統治思

想とその政治機構とについて私は知りませんから、それを「絶対主義君主政体」と言へるのかどうか、はっきりしたことがわかりませんが、いまかりに『広辞苑』に説くやうな統治思想であり統治体制とであるとしたり、それは明治天皇の統治思想と雲泥の差がありますし、いはゆる明治憲法の精神と機構ともまたそんな絶対権力を君主に認めるものでもないことは、論ずるまでもないでせう。しかもなほさういふ説が、『広辞苑』といふ辞書にまで採用されてゐるといふことは、かういふ考へが学界の常識として通用してゐるからに他ならないのでせう。学問の根本としてのコトノハノミチ・シキシマノミチを忘れた結果が、このやうな「理窟」を生み出してしまつたのです。宣長の言ふ「物のあはれをしらず、心なき人」の説です。ウタを忘れた科学が、こんなまちがつた説を生み出して来たのです。

明治天皇の御歌

天皇の統治思想を知るには、詔勅もさることながら、その歌をよむことが、一番の近道であるとは、宣長の言ふ通りで、私どものまたくり返し申し上げてゐるところです。そこで、私は、明治天皇さまのお歌から、統治思想のよくあらはれてゐるお歌を抜き出さうと試みました。しかし、それはできませんでした。ほとんど、どのお歌にも国と民とを思はれるお心があ

ふれてゐると思はれるからです。昼間、政治の衝に當つてお心を使はれてゐる間だけではない、また非常の時ばかりではない。平時・戦時をわかつたず、昼夜をわかつたぬ御心労のあけくれの御様子、その数千の御製にあふれてゐるのを拝するのです。いま、ただ三首のお歌をかゝげてみただけで、「絶対主義」などといふ言葉が、明治天皇さまのお歌のどこにあるかと声を大にして私の言ふ意味が、おわかりにならうと思はれます。

明治三十七年「述懐」

うらやすき世にもおもひはあるものをくにたみいかに身をつくすらむ
民草のうへやすかれといのる世に思はぬことのおこりけるかな
夏の夜もねざめがちにてあかしけるよのためおもふことおほくして

そして、かういふ国と民とのうへを思はれるお歌は、明治天皇の御製にあるだけではありません。神武天皇以来、御歴代の天皇さまがたのお歌として残されてゐるのです。それは小田村寅二郎・小柳陽太郎両先生の『歴代天皇の御歌』にその一端をうかがふことができます。歴代天皇さまがたは、宣長の言ふ「学問の道」としてのうたをよみ継がれて今日の今上天皇さまに至るのです。

一首の歌をよむとは、己れの体験を全体としてかへりみてことばにあらはすことですから、

それは自己をかへりみることになるのです。そして安心するのです。道徳的に言へば自覚と反省ですし、宗教的に言へば解脱です。このやうにして、自覚と反省と解脱とをくり返して生きてゆくのが、歌をよむことであるとすれば、それは人としてなすべき根本の道と言へませう。その道を、国民に率先して、建国以来お伝へになられるのが、天皇さまのお歌です。天皇政治の本質を考へる時には、この御製を抜きにして考へることはできません。かういふ学問——しきしまのみちは、近代の大学ではほとんどとりあげられません。

しかし、私が最近大変心強くしてゐるのは、多勢の若い人たちが、今上天皇さまのお歌、また明治天皇さまのお歌について、その研究を発表してくださつてゐることです。かういふ文章は、いはゆるジャーナリズムの表面にはあらはれません。それは、いまのジャーナリズムには、歌のわかる人が稀だからです。しかしジャーナリズムの表面にはあらはれなくとも、本当に心うたれるやうな文章がいくつも世の中に出てをります。東中野君や吉田君たちも、青年研究発表の時間に、確信をもって御製拝誦の感動を語つてくれました。

今上天皇のお歌

今上天皇さまのお歌を朗誦して感想を申し上げます。(この感想については、日本を守る会

発行『昭和史の天皇』所載の拙論「今上陛下と昭和五十年」に要旨を書いたので、それを御参照願ひたい。本稿の紙数の制限もあるので、感想・説明を省略して、講義資料にかかげた御製を次に記すこととする。

大正十年、東宮時代のお歌「社頭暁」

とりがねに夜はほのぼのとあけそめて代々木の宮のもりぞみえゆく

昭和三年「山色新」

山やまの色はあらたに見ゆれども我まつりごといかにかあるらむ

昭和六年「社頭雪」

ふる雪にこころきよめて安らげき世をこそいのれ神のひろまへ

終戦当時のお歌（木下道雄先生『宮中見聞録』から）

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

外国と離れ小島にのこる民のうへやすかれとただいのるなり

昭和三十七年「遺族のうへを思ひて」二首（『あけぼの集』から）

忘れめや戦の庭にたふれしは暮しささへしをのこなりしを
国のためたふれし人の魂をしもつねなぐさめよあかるく生さて

昭和四十五年「七十歳になりて」四首（『あけぼの集』から）

七十の祝ひをうけてかへりみればただおもはゆく思ほゆるのみ
ななそちを迎へたりけるこの朝も祈るはただに国のたひらぎ

よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそち
ななそちになりしけふなほ忘れえぬいとせ前のとつ国のたび

昭和五十年新年発表の御製御歌（御製九首のうち二首、皇后御歌二首のうち一首）
御製

米国大統領の初の訪日

大統領は冬晴のあしたに立ちましぬむつみかはせしいく日を経て

十一月八日内宮にまゐりて

冬ながら朝暖かししづかなる五十鈴の宮にまうで来つれば

皇后御歌

おだやかに冬たつこの日みともして伊勢の宮居にまうでけるかな

昭和五十年宮中歌会始の御製御歌

御製「祭り」

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

皇后御歌「祭り」

星かげのかがやく空の朝まだき君はいでます歳旦祭に

今年九月に、両陛下はアメリカを御訪問になるといふことでございます。その時には、世の中もおだやかならざる時でもございますので、われわれ国民は、まづもって心を集めて、両陛下が御無事に、御すこやかに、訪米のお仕事を終へさせなさいますことを、お祈りしなければならぬと思ひます。みなさまにもお心を合はせていただいて、御一緒にお祈り申し上げたいと存じ申し上げます。本講を終わります。長時間の御静聴を感謝いたします。

(亜細亜大学教授・教養部長)

短歌創作のてびき

九州大学医学部大学院二年

前

田

秀

一郎



短歌創作の動機

短歌創作の意義

柿本人麿の歌

松尾まつ枝刀自の歌

短歌のつくり方

短歌創作の動機

皆様は、このあと阿蘇登山、短歌創作といふ時間を持たれることになってをりますが、初めて短歌を作られる方もいらっしゃると思ひます。短歌を作るなどといふことは、自分には縁遠いことで、短歌創作のことを思ふと折角の阿蘇登山も気が重くなるとお考への方も多いのではないでせうか。

私は昭和四十八年に九州大学を卒業致しましたが、学生時代に親しい友人が、よくポケットに文庫本の「万葉集」を入れてゐて、あるとき、その中の恋の歌を示してくれたことがあります。それは、次の歌でした。

君に恋ひいた甚も術すべなみ平山ならやまの小松が下に立ち嘆くかも

「あなたが恋しく思はれて何とも仕方がないので奈良山の小さな松の下に立ってはげしく嘆いてゐることですよ。」といふ歌です。

友人は「素晴らしい歌だらう。言葉がピンピン響いて来る。かういふ歌を詠まれると、思はず抱き締めたくなるなあ」と話してくれました。ところが、私には全然響いて来ないので、別に女の人を抱きしめたくなる気持がわからない訳ではありませんが、歌からは、さういふ気

持はどうしても起って来ない。「自分には、それ程、感動のおこらぬ歌なのに、どうして友人は楽しきうに読み味はってゐるのだらうか」といふのが、私が短歌に初めて触れた時の疑問でした。

その後、しばらくして、その友人が福岡地区の大学生十数名と一緒に行ってゐた勉強会に出席するやうになり、その中で各自のつくった歌を持ちよって互ひに批評し合ふ機会をもつやうになりました。そこでの短歌には、自然の美しさや、友だちとのつき合ひなど、日々の生活の中で友だちの心に残ったことがらが様々に詠み込まれてゐました。同じ学生生活を送ってゐる友人達の、自分にも身近かな事柄を詠み込んだ短歌の一首一首を、皆と読み、批評し合ひ、自分もまた短歌を創作して、皆に批評してもらふのです。その場合、自分で良い歌と出して提出しても、その思ひはなかなか友達には伝はらない。

しかし、友達が直してくれると、自分の詠みたかったことが、より正確に表現され、感動が相手にはつきり伝はってゆくのがわかりました。さういふ体験を通して、私にも短歌に込められた友だちの感動が伝はって来るやうになり、友達の短歌を読むと、その友達がより一層親しく感じられるやうになりました。そのやうにして短歌をよんでいくうちに短歌を創作することは、自分の内心を省る、自分の心の動きを知ることになるといふことに気付かされました。それは、次のやうなことです。

短歌は、五七五七七の文語定型詩ですけれども、その僅か三十一文字に、自分の思ひや、自然の美しさを詠まうとしますと、自分が最も詠みたいのは、どういふことなのか、自然の姿のどういふところを詠みたいのか、言ひ換へると感動の中心は、どこにあるのかをはっきりと見定めることが大事になってきます。感動の中心を見定めるには詠みたいと思った自然の姿なり、自分の思ひを、よく見詰めることが必要です。その上で、自分の心にできるだけびったりとした言葉を選んでいく。さうすれば、眼には見ることの出来ぬ自分の心の動きが、言葉の姿として短歌にはっきりと詠み現はされていくのです。そのやうにして歌が詠めた場合には、たとへ、拙ない歌であっても、自分の思ひを詠み現はすことが出来たといふよろこびで、心が晴れやかになります。ところが歌をつくる途中で、面倒になって実感のない言葉をつかったり、人を驚かせよ



うと思つて、大袈裟に詠んだりしてしまふことがあります。その場合には、自分の気持が人に伝はるとか伝はらないとかいふことの前に、自分自身がすでに納得がいかず、作歌後の充足感はありません。そのやうな歌では到底人の心に訴へることは出来ないのです。

私はかうして、歌を作ることは自分の内心を省ることになるといふことに気付き始めたのですが、その当時は、丁度全国の大学で、いはゆる大学紛争が熾烈に行はれてゐる時でした。私達の医学部でも、学生の無期限ストライキといふ極めて異常な事態に陥り、講義はいつふたたび始められるのか、そのめどすらつかぬままに数ヶ月を経過してゐたのです。さういふ紛争の中で人々はさかんに、自己批判といふ言葉を使つてゐました。

この言葉は、「相手に対して自己批判を迫る」とか「自己批判を勝ち取る」といふやうに用ひられ、相手に間違ひを認めさせ、自分の正しさを確認させることによって討論の決着をつけるといふやうな場合に用ひられるのです。しかし、私達は、間違ひを改めよと問ひつめられても、なかなか心から改めることは出来ません。さうではなく、独り自らの姿を省て、その誤りをしみじみと感じた時にはじめて改めることが出来るでせう。

このやうに、しみじみと自分の姿を省るといふことを抜きにして、人の誤りを諭したり、世の悪風を正したりすることが出来る筈はないのです。自己批判といふ形で相手を屈服させることによつて統一された社会集団、或ひは国家には、人々の間に拭ひがたい不信感が根深く存在

してゐるに違いない。そのやうに私は考へました。そして、短歌を作ることが、自分の内心を省ることになるといふことに思ひを致した時に、短歌を創作することは、単に趣味で詠むといふ以上の大切な意義のあることに気付いたのであります。このことが、私が短歌を創作して行かうと思ひ定めた動機でした。

短歌創作の意義

その後、多くの素晴らしい短歌に触れ、自分も短歌を創作していくうちに、作歌には、内心を省るといふことの他にも、大切な意義のあることを知るやうになりました。そのひとつには、短歌を作ることによって、私達の情意は深められるといふことです。短歌は、心を動かされた物事を詠みあらはすものですから、感動がなければ歌は出来ません。しかし、歌を詠まうとして、周囲の物事を注意深く見てゐますと、今迄は見過してゐた美しい物が、思はぬところに潜んでゐるのに気付かされ、深く心を動かされることが、しばしばあります。そのやうな体験を繰り返すうちに、私達の物に感ずる心は深められていくのです。私たちはそこに歌を作る歓びをしみじく感じるのであります。

次に、短歌は、先程申しました様に、目には見ることの出来ない自分の心の動きを他人が読

んでもはつきり分かるやうに言葉に表します。それ故、短歌を作ることは、自分の心の動きを言葉の姿で捉へる事になるのですが、このことは、また、他の人の作った短歌を読むことによつて、その作者の心を知ることにもなるのです。

短歌は千数百年の伝統を持つてをり、その間には多くの人々によつて、数多くの素晴らしい短歌が歌はれ、伝へられて来てゐます。それら短歌の一首一首を読み味ふことによつて、私達は年月の隔りを越えて、歌に込められた作者の心を活き活きと感じ取り、作者と親しく交はることが出来るのです。そして又、友人と短歌を詠み交はすといふ事は、その友人と心を開いて語り合ふことになるのです。

このやうに、短歌が、人の心と心とを結び付けるといふ事は、短歌の持つ最も素晴らしい意義だと思ひます。そのことに就いては述べられた最も適切なことばとして、この合宿教室の必携書であります、夜久正雄先生と山田輝彦先生の御共著「短歌のすすめ」の百十六頁を読んでみたいと思ひます。この箇所は一昨日、山田輝彦先生が御講義の中で、現代思想には死といふ問題が欠落してゐるとお話をなさいましたが、そのことに関りがあるのです。

「お互いに、われわれ人間は、いつか死ななければなりません。そのことを考えますと、はかないというもおろかです。しかし、はかないものであるがゆえに、そのはかない命を、何を目的にして燃やすのか、ということが問題です。有限の命を、何か永遠のものにつなぎたいと

いうのが、すべての人の心にある本然の欲求であろうと思います。そういう気持が短歌という形式に生命を吹きこむのだと思います。私は、歌というものは、言葉によるコミュニケーションが絶望的である、不可能であるという認識に対する、一つの果敢な闘いであろうと思います。漱石は『行人』という作品の中で『人と人との間に架する橋はない』という言葉を引きいています。が、歌は人の心と心の間に架せられる見えざる橋であり、孤独な生をつなぎとめるきづなであることを信じます。本当に、まごころを詠んだ歌は、今のいくつかの例でもわかるように、必ず人の心に響いて来るものであり、無垢の心をとりもどさせずにはおかないのです。」

柿本人麿の歌

これから、プリントで用意して参りました歌のいくつかを皆様と一緒に読み味はっていきたいと思ひます。まず最初の万葉集巻一にある柿本人麿の次の歌は、よく御存知のことと思ひます。

ひわがし
東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ

「かぎろひ」といふのは、曙の光のことです。「かぎろひの立つ」は、曙に東の天が光るところです。歌意は、「東方の野には曙の光のさしそめるのが見えて、ふと振り返ると、月は既に

西に傾いてゐる」といふ壮大な歌です。この歌は、後に文武天皇となられた軽皇子が、お亡くなりになられた父君の日並皇子ひなりのみこを慕はれて、父君が御在世中よく狩に行かれた大和国安騎野にお出かけになり、そこで野宿をされた時に、お供に従つてゐた人麿が詠んだものです。その時、人麿は長歌一首と短歌四首を作つてをり、その中の一首が、この短歌です。

軽皇子の父君、日並皇子は、天武天皇と持統天皇との間にお生まれになつた方でありませう。大化の改新、壬申の乱といふ動乱の時期を経て、天武天皇の御代となり、やがて律令制国家の確立、国民文化の発展といふ隆盛の時代を迎へようとする時にあつて、日並皇子は、天武天皇の後継者として人々の声望と信頼を一身に集めてをられた方です。しかし、持統天皇の三年、御歳二十八の若さで亡くなりました。この時、軽皇子は、やうやく七歳でした。軽皇子は幼い時に亡くなられた父君を慕はれるお氣持から、都をお癈ちになり、荒山道を越えて、父君、日並皇子が御在世中によく狩に行かれたといふ安騎の野に行かれ、父君のなされた如くに野宿をされるのです。この時の人麿の長歌と短歌とを全部読んでみますと、人麿が、日並皇子を慕はれる軽皇子のお氣持に深く感動し、自分もまた、日並皇子が、この野に狩に來られた頃の思ひ出に胸が詰まり、眠られなかつたことがわかります。夜の荒野の草原の中で、思ひのはけ口を歌に求めてゐた人麿が、ふと天を見るとほの白く曙の光がきざしてゐる。もう夜が明けるのかと思ひつつ、ふと西の空を見ると、月は既に傾いてさやかに光つてゐる。沈痛な一夜を過

し、夜明けを迎へた人麿一瞬の感慨が見事に詠み込まれてゐます。そのすぐ後に次の歌があります。

日並皇子の命の馬並めて御獵立たしし時は来向ふ

「日並皇子が従者達と馬を並べ給ひて朝獵に立たれたその時は、今来向ふよ」といふ意です。最初の歌は、東がやうやく明るくなってくる頃のことをうたったもので、この歌は、それからしばらく時が経って、これから狩が始まらうとする、その時に詠まれたものです。今、狩が始まらうとする時にあたって、人麿はお仕へした日並皇子の御勇姿を目の前にうかべて、お偲び申し上げてゐるのです。「時は来向ふ」の「時は」といふ言葉には、「自分がお仕へした日並皇子が御在世の日、この朝露に濡れた草原を、従者達と勇壮に踏み分けて朝狩りに出で立たれた、その時はいまふたたび廻つて来た。昔と同じやうに狩が始まらうとしてゐる。しかし、あのお元氣であられた皇子にふたたびお会ひすることは出来ない」といふ人麿の痛切な思ひがこもつてゐます。今は亡き日並皇子をお偲びする人麿の氣持の痛切さが「時は来向ふ」といふ張りつめた力強い結句に現はれてゐると思ひます。

このやうに、歌は一首歌つてもまだ思ひが尽きないときには、さらにもう一度一首歌ふという風に、次々と歌つていくものです。これを連作と申しますが、連作として詠まれた歌は一首一首は、確かに独立した歌ですが、その全体を通して読むことにより、さらに一首にこめら

れた作者の思ひを、より活き活きと感じとることが出来るのです。

最初の歌は、夜明けといふ天地の厳肅な一瞬が歌はれてをりますが、これは単なる叙景の歌ではないと思ひます。人麿の痛切な気持ちがあつて、このやうなすばらしい歌が生まれてゐるのです。このやうに私達は、自然の姿を歌に詠む場合にも、それを受け止めた自分の心を詠んでゐるのです。さういふ意味では叙景の歌も抒情の歌であるといふことが出来ると思ひます。

松尾まつ枝刀自の歌

短歌は、先程も申しましたやうに、千数百年の長い伝統を持つてゐます。その伝統を支へて来たのは専門歌人のみではありません。日本人であれば誰もが、お年寄りも若い人も、男も女も、知識や財産のあるなしに拘らず、皆が同じ五七五七七といふ定型に、をりをりの自分の思ひを詠み込んできたのですが、それらの歌の一首一首によって、この短歌の長い伝統が守り継がれて来てゐるのです。そのやうな短歌の中から、今日はこの九州熊本の地にお住ひの九十一才のお婆さんが詠んで来られました短歌を中心として皆様と共に読んでいきたいと思ひます。そのお婆さんは松尾まつ枝様といふ方です。お婆さんは、此度の戦争で、次男にあたられる御子息を亡くされました。御子息は、松尾敬宇中佐と申し上げます。中佐は、開戦後、間もな

く、昭和十七年五月三十一日、シドニー特別攻撃隊指揮官として特殊潜航艇に乗り、シドニー湾内深く突入し、敵の主力艦隊を奇襲、大痛撃を与へて、壮烈な戦死を遂げられたのです。時に二十五才でした。奇襲は六名の軍人により、三艘の特殊潜航艇で行はれましたが、当時、オーストラリア海軍は、この日本軍人による勇敢な行為に非常に感激し、時のグールド海軍少将は「このやうな勇敢な行為は、一国のみの独占物ではない。オーストラリアの青年よ、鋼鉄の棺桶に乗って国に殉じた、このやうな日本の若者の勇氣にぜひ見習っていただきたい。」と讃へ、一部の非難を退けて、日本人の棺を日章旗で覆ひ、オーストラリアの海軍葬で手厚く葬ひ、戦争中ではありましたが、遺骨を故国に送り届けてくれたのです。この特殊潜航艇と中佐の遺品はオーストラリアの首都キャンベラにある戦争記念館に、オーストラリアのために戦つて亡くなられた十万余千人の戦死者の名前や数々の歴史資料と共に安置されてゐます。中佐は、そのやうに軍神と讃へられる立派な方ではありますが、本日皆様と一緒に読んでまいります。松尾まつ枝様の歌は、そのやうな軍神のお母さんの歌として読んでいただきます。私も、むしろ、子供を亡くされた世の多くのお母さん方の御心を代表する歌として読んでいただきたいと思ひます。

中佐が突入されて二ヶ月ほどして御家族に戦死の内報と中佐の遺品とが届きました。その遺品の中に小さな手帳があり、その手帳には、中佐がまだ海軍兵学校時代に、お婆さんが折りに

ふれて送つてをられた福寿草や、もみぢの押葉が貼られてをり、中佐の次の歌が記されてるまました。

菊池神社へ参拜の母を偲び

日曜も遊べざりけりあやかれと神詣でする母を思ひて

菊池神社は、後醍醐天皇をはじめとする南朝御一統に子孫をあげて忠誠の志を貫いた熊本菊池一族をお祀りする神社です。その神社にお母さんがお参りしてをられることを伝へ聞いた中佐の作られたお歌です。「菊池の尊皇の精神にあやかつて立派な軍人に育つて欲しいと菊池神社にお参りして下さるお母さんのことを思つて、日曜も遊べなかつたことよ」といふ意味です。中佐、二十才前後の作です。「日曜も遊べざりけり」といふ事実が先に述べてあり、「母を思ひて」といふ句が歌の最後にきてゐる、いはゆる倒置法が用ひてありますが、そのことによつて、一層、故郷のお母さんを思はれる中佐の心が伝はつてきます。当時の海軍兵学校は、緊迫した内外情勢の中で、連日、厳しい訓練に明け暮れてゐたと思はれます。そのやうな中でも、十八才から二十才といふ若い生徒たちは、日曜日だけは外出して、のびのびとした時を過したと思ひます。その日曜日さへも遊ぶことが出来ないといふ中佐の言葉に、お母さんの御気持をしっかりと受け止め、それに応へていかうとされる中佐の、お母さんへの愛情がしのばれる歌です。「遊べざりけり」といふのは口語的表現で、正しくは「遊ばれざりけり」となる

のでせうが、さうすると口調が悪くなつてしまひます。しかし、さういふ用語の拙さを越えて、お母さんを思はれる中佐の気持ちに直に伝はつてくる、いい歌だと思ひます。遺品の中に、この歌を見出されたお母さんは、次のやうに歌はれました。

菊池なる神のみいづにあやかれと祈りし母を偲びし子はも

「みいづ」とは、神様の尊いお力といふ意味で、最後の「はも」は感動、詠嘆の意をあらはす助詞です。「菊池の神様の尊い御力にあやかりますやうにとお祈りしてゐた母の心を知つて、偲んでくれたわが子よああ」といふ意味です。

やがて、中佐が戦死を遂げられて一年たちました。その一周忌に、お母さんは次の歌を詠まれました。

君が為散れと育てし花なれど嵐のあとの庭さびしけれ

「君」とは天皇のことです。「天皇陛下のため、国のためには命を捧げても尽すやうな男子に育つて欲しい、さういふ思ひで育ててきたわが子ではあるけれども、シドニー湾での戦ひに戦死してのち、家の中は本当にさびしいものです。」といふ歌です。国家の非常に際して身を捨てて任務を果たし、戦死した御子息への限りない愛情がたくまずして、この「嵐」「庭」といふ表現を生んだものと思はれます。二周忌には

靖国の社に友と睦ぶとも折々かへれ母の夢路に

と詠まれます。「敬宇中佐は、靖国神社におまつりされて、同じやうに国のため戦ひ、命を捧げた他のお友達と仲良く暮らしてゐることでせうけれども、折々は私の夢の中にもお顔を見せて下さいね」といふ歌です。亡くなられても、元氣にしてをられた時と変ることなく、お母さんは中佐を偲ばれ、語りかけてをられるのです。この翌年、戦争が終結します。

戦争は終りましたが、お婆さんには御不幸が次々と起ります。昭和二十五年には御長男の自彊じきやう様が四十一才で御病氣のために亡くなられ、その後、しばらくして、奥様もまた亡くなられ、あとにはお二人の間の四人の女のお子様が残されました。そのお孫さん方をお婆さんは御主人と二人で育てていかれるのです。この時、御主人は七十九才、お婆さんは七十才でした。さらに六年の後、昭和三十五年には御主人もまた、お亡くなりになりました。お婆さんはこの時以降、四人のお孫さん方をお一人で育てていかなければならなくなったのです。御主人が御亡くなりになった夜、お婆さんは次のやうに詠まれます。

たらちねを残しゆきにし兄弟はらからが父を迎へてなに語るらむ

お婆さん、七十六才の時のお歌です。「たらちね」といふのは母親のことで、ここでは御自分のことです。「自分を残していった兄弟は、今、父を迎へて何を語ってゐることだらうか」といふ歌です。この歌には、淋しいとか悲しいといふ言葉は使はれてをりませんが「なに語るらむ」といふ亡くなられた方に呼びかけられる言葉に、お婆さんの深い悲しみがこもつてゐる

す。お婆さんは、このやうな悲しみ中で、残されたお孫さん方を立派に育てていかれるのです。

そのやうな月日送つてをられたころ、本日この私達の合宿教室にお出で戴いてをります熊本大学の名誉教授で地質学者であられます松本唯一先生が昭和二十九年ニュージーランドへ火山研究に行かれた時、帰途にキャンベラの戦争記念館に立ち寄られ、そこに松尾中佐の遺品や特殊潜航艇が鄭重に陳列されてゐるのを御覧になりました。先生はその時、中佐のお母さん、まつ枝お婆さんを、これらの中佐の遺品にぜひ対面させてあげたいと思はれました。帰国されると先生は、お婆さんのオーストラリア訪問を実現するために、御自分の家屋敷を売つても構はないといふお心で資金集めに奔走されます。昭和四十年にはキャンベラ戦争記念館の館長が、はるばる松尾家を訪問され、中佐のお墓参りをされました。なほ、昭和四十三年、四人のお孫さん方のうち三人の方は既に結婚してをられたのですが、この年には一番年下の方が結婚されました。四人のお孫さん方は、お婆さんのお力で、それぞれ立派に成長され、結婚されたのです。

かうしてこの年に松本先生を中心とする方々のお力が稔り、八十四才のお婆さんは松本先生、長女のふじ江様と御一緒にオーストラリアへ旅に立たれたのです。その時、お婆さんは、次の歌を作られました。

あたたかき人のなさけにつつまれて鹿島立ちする今日のよろこび

とつ国のあつき情にこたへばやと老いを忘れて勇み旅立つ

「鹿島立ちする」とは、祖国をあとにして旅に出ることです。「とつ国」は外国のことです。「こたへばや」の「ばや」といふのは願望をあらはす助詞で「こたへたいものだ」といふことです。一首目は、「今日のよろこび」と率直に言ひ切つてをられますし、二首目には、さういふ言葉はありませんが「勇み立つ」といふ力強い言葉に、お婆さんの喜びがこめられています。二首の歌ともに、周囲の人々の暖かいお力に対する感謝と、御子息に對面することが出来るよろこびに溢れた歌です。御一行の飛行機は、夕刻羽田を發つて、翌朝にはすでにオーストラリアを見下す海上を飛んでゐました。機上での一夜、お婆さんは、一睡もされなかつたといふことです。そのお氣持が「機上にて眠れず」といふ次の歌によく表はれてゐます。

海に空にあまた勇士の母を待つ心しのびてぬむれざりけり

「あまた」とは、「数多くの」といふ意味です。「このたびの戦争で、海に空に戦ひ、亡くなられた数多くの勇士たちが、それぞれに母親の訪れを、ちっと待ち望んでゐる。さういふ勇士たちの心を思つて眠れなかつたことよ」といふ意味です。お婆さんは、御子息の松尾敬宇中佐がかはいくてたまらない。さういふお氣持から、八十四才といふお年にも拘らず、はるばる

とオーストラリアを訪問されたことと思ひます。けれども、御自分の御子息を思はれる気持は、ただ御子息のみに、とどまるのではなく、このたびの戦争で亡くなられた敵味方全ての若い勇士たちの心を偲ぶ心にまで、ひろがってゐるのです。お婆さんは、おそらく、この時はじめて飛行機の上から御覧になったオーストラリアの青い海や空のひろがり、お婆さんのひろやかな心に受けとめられて、すばらしい歌を生み出してゐるやうに思はれます。

シドニーでは、オーストラリア海軍をはじめ、オーストラリア国民の熱烈な歓迎を受けられます。御一行は、六軍人の戦死したシドニー湾上で慰霊祭を行なはれました。その時、お婆さんは次のやうな歌をうたはれました。

シドニーの海にて

みんなみの海の勇士に捧げばやとはるばる持ちしふるさとの花

幼な子が心をこめてつみし花勇士の靈に届けこの花

荒海の底をくぐりし勇士らを今ぞたたへむ心ゆくまで

二首目の「幼な子」といふのは、曾孫さんのことで、中佐にとつては、姪のお子様にあたる方です。曾孫さんたちの摘んだふるさとの菊池の菊の花束をシドニー湾上に捧げられたのです。三首目については後で、シドニー湾上に立った時に、思はず大声で叫んだ、その叫び声が、あとで思ひ返すと歌になつてゐたと述懐なさつたさうです。

その後、御一行はオーストラリアの戦没勇士の記念碑にお参りになり、花束を捧げられました。お婆さんはコンクリートの上に直接、日本式に坐られて、手を合はせて記念碑にお参りをなさったさうですが、その時に沿道を埋めたオーストラリアの人々から思はず拍手が湧き起ったといふことです。首都キャンベラでは、ゴルトン首相自ら御一行を労らはれました。そして、戦争記念館でお婆さんは中佐の特殊潜航艇と遺品とに対面されたのです。このやうに、オーストラリアの人々は、心から親切にお婆さんを歓迎してくれました。

お婆さんは、シドニー訪問の際に、もう一つのことを、ひそかに行はれました。敬宇中佐には出撃前に、許婚となられ、将来を約束した木下敏子さんといふ方がをられました。木下さんは、中佐を心から慕ってをられたのです。戦死の報せを受けた敏子さんは、その時の思ひを歌にうたってをられます。その中の一首が次の歌です。

君と行きし湘南の山のなつかしくわれまたひとりゆかむとぞ思ふ

行く末を夫とたのみ、恋ひ慕ってゐた方が、国の非常に際して、命をかけて、その務めを果たし、戦死された。そのことを知った敏子さんが、亡くなられた中佐に、心のうちを語りかけてをられる、心にしみる歌と思ひます。敏子さんは、中佐が戦死された後にも、中佐の御両親を實の両親として慕はれ、孝養を尽くしてをられました。その敏子さんが、周りの人々の勧めもあって、中佐が亡くなられて三年目に他所に嫁がれました。その敏子さんが、お婆さんがオーストラリアを

訪問されるといふことをお聞きになり、歌を作ってお婆さんに托されたのです。お婆さんは、その歌を書いた紙を石に括り、シドニー湾上、中佐の戦死された所を見下す断崖から海へ投げ込み、中佐に届けられたのです。その歌は次の歌でした。

ひとたびはゆかむと思ひし南溟の君につたへよ今は安しと

「南溟」とは南の海です。中佐が亡くなられて二十余年を経過した後の今も、敏子さんは中佐を慕はれ、生きてをられた時の如くに話しかけられ、「今は安らかに暮らしてをります。どうか安心して下さい」とことづけられたのです。

オーストラリアを発つ日が迫り、再び戦争記念館を訪問されたお婆さんは、次の歌を詠まれます。

吾子の靈^{あこ}生きてあるらし彼の艇のかたへにわれは住みたしと思ふ

「かたへ」とは、そばといふことです。このやうに後髪を引かれる思ひで、お婆さんはオーストラリアを発たれたのです。

お婆さんが折りにふれて詠まれた歌は、このやうに非常に心を打つものがあり、松本唯一先生をはじめ、有志の方々のお力によって、歌集が出版されました。お婆さんは、その歌集に「合掌のあけくれ」といふ題をつけられました。今日は、この歌集の中からいくつかの歌を紹介させていただきます。

最初の柿本人麿の短歌や、松尾刀自の短歌を読みますと、どちらも人を偲ぶ心の痛切さが、素晴らしい歌を生み出してゐることが分かります。短歌は、元来、自分の心を人に伝へようといふ気持で詠まれて来たものでせう。美しい花を見て「ほら、綺麗だよ、見て御覧」といつて、呼びかけたくなる気持、さらに、そこに居合せない人にも、また亡くなられた人にまでも語りかけずにはをれない気持、そのやうな気持が歌になるのだと思ひます。そして、自分の気持を正確に詠めば、自づと人に伝はつていくのです。新聞の歌壇などで見受けられる歌の中には、しばしば、自分だけしか分らないやうな孤立した感情を非常に難解な言葉で詠んでゐるものがあります。そのやうな歌が芸術的に高い歌と評価されがちですが、私は、そのやうな歌は短歌の本当のあり方からは、外れたものであると思ひます。

短歌のつくり方

最後になりましたが、短歌を作る上での技術面に就いて少しお話し致したいと思ひます。

これは、「短歌のすすめ」の三十五頁から百十七頁に詳しく書いてありますから、後で、そこを是非読んで戴きたいと思ひます。

(一) 用語、仮名遣ひ

まず、用語のことですが、勿論、現代語を用ひてよいのですが、短歌の五七五七七といふ定型は、文語の語法の中から生み出され、文語で読み継がれて来ました。ですから、文語の語法と短歌の調べとは切り離せないものになってゐます。かういふわけで歌は文語の語法にならつて詠むべきだと思ひますが、文語の語法で、歌を詠めば、仮名遣ひも歴史的仮名遣ひ、正仮名遣ひを用ひるのが当然です。しかし、急に歴史仮名遣ひを使はうとしても無理ですので、今日は現代仮名遣ひで結構です。ただ、ゆくゆくは、正仮名遣ひで詠んで戴きたいと思ひます。

(二) 一首一文

短歌は原則として、一首一文といつて感動の中心を一つに定めて、一首一文で詠むことが大切です。たとへば、最初の人麿の

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ

といふ歌に、もし、文の切れ目を示す句点を入れるとしますと唯一ヶ所、歌の最後に来ます。勿論、倒置法などの使はれた、たとへば中佐の「日曜も遊べざりけりあやかれと神詣する母を思ひて」といふ歌でありますと、句点は「遊べざりけり」の後で、文の途中にきますが、この場合も一ヶ所のみです。例外はありますが、原則として句点は一箇所といふのが普通です。このやうに、一文で詠み通すことによつて一貫した精神が、そこに流れるのです。歌ひたいたことが、いくつもあるときには、歌ひたいことのひとつを一首づつに詠んでゆく連作形式を

取ることが必要です。

(三) 字余り、字足らず

短歌は、五七五七七といふ定型詩ですが、この定型が生み出されたのは千数百年前ですから、それ以前には、おそらく多くの人々によって様々の歌が詠まれたことと思ひます。そのやうな歌の中から、五七五七七といふ形が出来て来た時に、皆がその素晴らしさを認め、同じ形に自分の思ひを詠み込んで来た、そのやうにして確立されたのが定型だと思ひます。ですから、私達が歌を詠むといふことは、この伝統に繋ぐていくことでもあるのです。もっとも、時によつては五音のところ六音になったり、七音が八音になったりすることがあります。これを「字余り」と言ひますが、思ひが痛切で必然的にさうなつた場合には許されることだと思ひます。時として、それは素晴らしい歌になります。たとへば、先程のお婆さんの最後の歌です。

吾子の靈生きてあるらし彼の艇のかたへにわれは住みたしと思ふ

この「住みたしと思ふ」は、一字多い八音です。しかし読んで不自然には感じません。「住みたし」と思はれるお婆さんのお氣持がつよいので、自づと八音になつてしまつた。このやうな時には、字余りは問題になりません。ただ、五音のところ四音となつたり、七音が六音になつたりする「字足らず」はよくありません。感動が薄いやうな時に、しばしば「字足らず」になつてしまひます。これは避けなければなりません。しかし、音数を合せることのみ

注意が集中してしまつては歌は出来ません。先づ、思ひのままを言葉に表現してみる、その上で五七五七七に近づけていくといふ気持で詠まれればよろしいと思ひます。

さて、今から、阿蘇の雄大な自然の中で、参加者全員が歌を詠みます。

どうか、思ったことをそのまま率直に詠むことを心掛けて下さい。歌を詠まうとして、自然や自分の周りをみてゐると、今まで気づかなかつた、さまざまの自然や人の心の美しさが目に見えてくる。それをすなほに歌によんでいただきたいと思ひます。

若き日の吉田松陰

天江筆者五時之所心一季之膽敢七憶斯三世之海師以
此望爲志之太陳八林其衆以爲爲華國之依爲就中
本州一州國統統宗廟社稷禮持感應信史所載守具
極細定成齋 朝惠節對運徒之列天下屬靜謐書
若相協者每日於當社拜前拜讀一品之由立初先單以
斯其一二其前其前念如伴敬白

福岡県立三池高等学校教諭

志賀建一郎

はじめに

九州遊歴

第一回江戸遊学

東北遊歴

第二回江戸遊学

長崎下向と下田踏海

はじめに

昨日以来、既に三人の先生方による御講義と、かつて合宿教室に参加した皆さんの先輩にあたる三人の方の青年研究発表が行はれました。その中でとり上げられました多くの問題の中でも、とりわけ、戦後日本の思想的混迷の様子と、大学或ひは一般の思想界の、学問に対する姿勢の誤りに対する指摘について、今、皆さまはどのやうに受けとめてをられるでせうか。戦後の日本と言へば、正に私達が生まれ、育った時代ですし、大学と言へば、皆さまが、日々生活し、勉強してをられる場所ですから、ともすれば私達はその現状を、そのまま正しいものとして、或ひは疑ふべからざるものとして受けとめがちです。しかし、多分、今の皆さま方の多くは、これまでの大学生活、中でも今までやって来られた学問を振り返り、今後どのやうな姿勢で学んでゆけばよいだらうかといふ或る緊張した感慨をもってをられるのではないでせうか。しかし、この学問に対する反省と自覚はそれぞれの人生を生きる上での大切な出発点とも言へるのではないかと思ひますし、単に今の私達のみならず、古来、多くの青年達がぶつかった問題でありました。これよりお話をいたします吉田松陰といふ方も、身をもってこの問題に取り組まれた方であったのです。これから学生時代より、折にふれて読んでまいりました松陰先生

の文章のうち特に感銘の深かった若き日の御言葉のいくつかを読みながら味はって参りたいと思ひます。

最初に、松陰とその時代について、概略説明します。松陰は、天保元年（一八三〇年）に生れ、安政六年（一八五九年）に、三十才の若さで刑死されます。この時代は、東アジア一帯に欧米諸国の勢力が及び、漸く動乱の時代に入らんとする頃で、松陰十一才の天保十一年には、阿片戦争が起り、清国は英国に屈服します。かくして幕府はアジアの風雲急なるを知り異国船打払令を改めて、天保薪水令を布令します。更にその後、英仏艦は相ついで琉球を訪づれ、強引に宣教師等を上陸居住させるなどして南方より日本に迫り、北方には、かねてより千島、蝦夷地にロシアの勢力が迫つてゐます。そしてこのころ、既にその開拓が太平洋岸カリフォルニアに及んでゐた米国は、新たに東南アジアに着目し、東インド艦隊司令長官ビッドルは弘化三年（松陰十三才）浦賀に来航します。孝明天皇が踐祚なされるのが、丁度この年で、これ以降天皇は、度々社寺をして、外患防止の祈禱をおさせになるなど深く憂慮なされます。

この間松陰は、外国勢力近接の風聞を聞きつつも、未だ故郷長州を出ることなく、専ら兵学の勉強に打ちこんでをりました。松陰は、本来毛利藩士杉百合之助の次男として、長門国松本村に生れたのですが、血縁筋にあたります吉田家の後継ぎがないために、吉田家の養子となり六才の時に、その家督を継ぎます。吉田家は、代々、山鹿素行を祖とします山鹿流兵学の師範



として、藩主を初めとして、毛利藩士に兵学を講じ、国防の指導の任にあたる家柄でありました。吉田家を継ぐと言ひましても、実際には、杉家にて養育せられ父百合之助や叔父玉木文之進などの薫陶を受けます。杉家の家風は、清貧の中でありながら学問を尊び、家族相和す中に、厳粛な気風を湛へたものであります。松陰は幼時より兄梅太郎と共に、父親の畑仕事を手伝ひ乍ら、経書や和漢の詩文を暗誦し、又玉木文之進から兵学についての厳しい教育を施されます。これら一族の人々は以後、平時はもとより松陰のいかなる苦境の時にあっても心よりの理解者として松陰を守り育てていくのですが、松陰も一族の人達の愛情と期待によく応へて、研鑽を重ねてゆきます。松陰は十一才の時に初めて藩主毛利敬親侯の御前で、素行の武教全書を講じ、その才能を高く評価され、以後敬親侯よりは、陰に陽に、篤い信任を受けることとなります。こ

のやうにして松陰は兵学修業を続けていくのですが、机上の学問から出発して、徐々に實際の国防、特に海防の必要性を自覚するに至ります。それも最初は、毛利藩である防長二国の海防のことが主でありましたが、海外の事情、特に阿片戦争等の模様を知るに至って、もっと大きな視野が開けてくるのです。それは国家防衛と日本の進路についての模索でした。かくして松陰は当時の唯一の海外への窓口であった長崎と、海外事情に明るく、松陰の尊敬する学者である葉山左内の住む平戸を訪問する為に、九州遊歴の旅に出かけます。嘉永三年松陰二十一才の時でした。次にこの遊歴の時に書き記した「西遊日記」中の序文の一節を読んでまいりたいと思ひます。

九州遊歴

「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは触に従ひて発し、感に遇ひて動く。発動の機は周遊の益なり。」

人の心といふものは、もともと活きたものなのだ。活き活きしてゐるのが本来あるべき姿なのだ。そして心が生きてゐるならば、何ものかにふれるチャンスは必ずあるものだ。これが機ですね。機とは、チャンスとは、必ずある。では機とはどのやうにあらはれるものかといふと、「触に従ひて発し、感に遇ひて動く。」何か自分の心にふれてくるものに従つて心が発

す、開けていく、或ひは、感動すべきことにあたって心が自ら動かされていくといふのです。そのやうに、本来活きた心といふものを、そのままに活かしていききたい。「発動の機は周遊の益なり」とは、つまり各地を巡って志ある人たちに会ひ、故人の足跡を訪ね、さらに当時、日本が当面してゐた海防の状況、或ひは長崎の事情を具さに見る（つ）ぶることが周遊であり、それを成せば、心は必ず発動するといふのです。実に潑刺とした文章です。しかし、これは単に心といふものについての理論的分析ではないでせう。私には、松陰が心の内の予感をそのままに語つたもののやうに思へます。不十分な書物と、正確とは言へぬ他人からの伝聞によって、僅かに知り得てゐるに過ぎぬ国家の現状、しかもそれは松陰にとつて実に憂慮すべきものであったのですが、それをずばり自分の目で確かめることが出来る。又、かねてより憧れてゐた一流の学者に、直接教へを乞ひ、疑点を晴らすことが出来るかもしれぬ。又、天下の志ある人達と膝を交へて語ることが出来る。松陰の心は、これらの期待と、それらが実現したときに、自分の心が大きく発動するであらう予感で一杯だったのでせう。そしてこの予感、松陰が、自分の心が生きてゐるといふ自覚によつて支へられてゐたと思はれるのです。この初めての遊歴にあつて感じた松陰の感慨が、一時的なものでなかつたことは、これ以降、萩に拘禁されてゐた一期を除き、人生の殆んどを遊歴の内に過ごしたことで明らかです。この「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり」「発動の機は周遊の益なり」の確信は、松陰の学問の前提であ

り、人生の根底に据ゑられてゐた思ひと言へるのではないでせうか。

松陰は萩を出発した後、長崎でオランダ船に乗船して見學し、平戸に、葉山左内の門をたたき、山家流兵学の大家山鹿萬介を訪れ、更に熊本の志士を訪ね、ここに以後無二の親友となる宮部鼎蔵と相識るに至るのです。この旅を通じて松陰は、自分の見識が未だ十分でないことを実感しながらも、国家の当面する問題に自ら推参しようとして、學問への意欲はますます高まってくるのです。

私達も又、各地から旅してこの合宿に参加してゐます。これはやはり周遊でせう。周遊の益、これは発動の機なのです。私達の心が生きてゐるさへすれば、「触に従ひて発し、感に遇ひて動く」のです。この言葉を合宿に臨む姿勢として、又、次の松陰の言葉を読む姿勢として、ここで十分に味っていただきたいと思ひます。

さて松陰はこの年の十二月、萩に帰郷しますが、學問の中心地である江戸に上りたい氣持を抑へられません。この希望は容れられて、翌嘉永四年三月、松陰二十二才の時、敬親侯の隨員として勇躍江戸に向ひます。

第一回江戸遊學

当時の江戸には天下の学者が集つてゐました。この中にあつては松陰と雖も、馳け出しの田舎者といふ感じは免れ難かつたでせう。着くや否や、師を選択する余裕もなく、多くの学者の門をたたいて、連日遮二無二勉学を続けます。この猛烈な勉学のさ中に、松陰は次のやうな手紙を兄梅太郎に宛てて書くのです。

「武士の一身成立覺束なき譯左の通り。

一、是れ迄學問迎も何一つ出来候事之れなく、僅かに字を識り候迄に御座候。夫れ故方寸錯亂如何ぞや。

先づ歴史は一つも知り申さず、此れを以て大家の説を聞き候處、本史を讀まざれば成らず、通鑑や綱目位にては垢ぬけ申さざる由、二十一史亦浩瀚なるかな。頃日とばとば史記より始め申し候。……砲術學も一骨折れ申すべし。文章も一骨折れ申すべし。算術も一骨折れ申すべし。……體中の骨何本之れあるかは存せず候へども、十本許りも折れ候はば、跡はいかをくひ候猫の様に成り申すべくや。是れも一つの懸念。……僕學ぶ所未だ要領を得ざるか、一言を得て而して斯の心の動揺を定めんと欲す。萬祈萬祈。」

（書簡「兄杉梅太郎宛」嘉永四年八月十七日）

私は、初めてこの手紙を読みました時、何か明状し難い気持ちに襲はれたことを今でも覚えてゐます。それ迄接して来た松陰の文章とは何かかけ離れてゐるやうで、これが果して松陰先生

の文章なのだらうかといふやうな思ひがしたのです。しかし、何度も読んでゐます内に、かへつて、松陰といふ人物のなまの姿とも言ふべきものが感じられて來ました。

松陰は、江戸での数ヶ月の勉学を経て、この時、混乱の只中にあつたのです。萩にゐる時学んだものは殆んどここでは役に立たない。それは「僅かに字を識」つた程度のことだったのかといふ冒頭の慨嘆は、松陰の率直な氣持でせう。そして、正に「方寸錯乱」してしまつた。江戸には、多勢の学者が門を開いてゐるのですが、松陰はその悉くを修得したいと思ふのです。例へばまづ中国の歴史、そして、砲術学も、文章も、算術も、それらは皆、実に骨の折れる仕事です。こんなことを続けて行けば、「體中の骨何本之れあるかは存せず候へども、十本許りも折れ候はば、跡はいかをくひ候猫の様に成り申すべくや。是れも一つの懸念」といふのです。いかを食つた猫の様などいふのは、何かしら、くにやくにやして背筋がしゃんとしない状態の比喩でせうが、一つのユーモアです。一体、何故さうなつたのか。「僕學ぶぶ所未だ要領を得ざるか。一言を得て而して斯の心の動揺を定めんと欲す。萬祈萬祈。」肝心要かなめのものが分かつていないためではなからうか。それを解く一言が欲しいといふのです。以上のやうに松陰は、江戸での勉学の体験をかみしめ、「方寸錯乱」の様をみつめてゐるのですが、大切なことは、動揺し真剣に迷つてゐるにもかかはらず、その姿は全く萎縮してゐないといふことです。かへつて、明るささへ感じられるやうな、余裕があるのですが、何がさうさせてゐるのでせう

か。ここで言ふ「要領」とは、単にテクニクのことではないでせう。もつれた糸を解きほぐすやうな糸口、多岐にわたる勉強でバラバラになりそうな心を統一し得るやうな腹の据ゑ所、そのやうなものに違ひありません。それを示唆する一言を松陰は、身心を研ぎ澄まして待つてゐるのです。その予感、その緊張感こそ松陰の「活きた心」を示す証あかしであり、明るさの源であると思へるのです。

さて、松陰はこの手紙の冒頭に、「武士の一身成立覺束なき譯左の通り」と記してゐますが、松陰は本来身分制度上では武士ですから、ここでいふ「武士」とは、自ら到達すべき或る理念を指してゐると考へられます。納得のゆく学問を成し得なければ、自分は武士とは言へないといふ、この深刻な反省は、松陰のめざした学問が単なる個人的修養に留まらず、広く社会の中で自らの果すべき役割を摸索してゐたことに基くのです。つまり、学問と人生とが不可分のものとして考へられてゐたと言へるでせう。

その姿勢は松陰が十八才の時に書いた「寡欲録」と題した文章にも既にはつきりと表現されてゐます。

「吾れの自ら處るは當に學者を以てすべし。謂ふ所の學なるものは書を讀み詩を作るの謂にいひあらず、身の職を盡して世用に供するのみ。又當に武士を以てすべし、謂ふ所の武なるものはいひ麤暴の謂に非ず、君に事へて生を懐はざるのみ。」

学者として、武士として生きるとは、世の中に役に立ち、主君につかへて、生に執着しないことだといふのです。実に明解です。松陰にとつて、学者であることと、武士であることとは、一つのことですから、まとめて言へば、世の中の為には、命を捨てる覚悟で生きるといふことでせう。これは松陰の終生変らぬ人生観であり、この上に立って、江戸での勉学も成されてゐるのです。右の引用は「寡欲録」の一部ですが、全文の意味は、それだからこそ自分は、一切の欲望、物欲のみならず、すべての精神的欲望も含めて、切り捨てて行きたいと願ふといふものです。ここには、若い時代の非常に鋭しい覚悟が伺へますが、ただ何かしら固い、肩を張ったところが感じられることも否めません。ところが松陰は後に安政三年二十七才の頃、「講孟餘話」の中で次のやうに述べてゐるのです。

「余前日寡欲の説、今日は變じて薄欲となるのみ。薄と云ふ者は寡すくなきに非ず。深く意を留めざるなり。山水風月より詩文書畫より、心目に接し眞に樂しめば敢て禁ぜず。心目を去れば敢て追はず。」

かねては、欲望を寡くしたい、捨て去りたいと思つてゐたのだが、それは、欲といふことに執とらはれてゐたのではなかつたか、今では欲望の対象に対して、たいして心になかなかねければ良いといふ氣持になつたといふのです。実に柔軟な態度ですが、裏返して言へば、これは最も大事なこと、武士として、学者としてやるべき事をやってをれば、後は自在に思つたまま振舞へ

ば良いといふことでせう。つまり、他事に深く心を留める余裕などないやうなひたむきな人生を送って来た松陰の素直な感想だと思へるのです。このやうに氣持が転じて行つた過程こそが、今読みました江戸での勉強の様子であり、その後の松陰の人生であつたのです。

東北遊歴

「方寸錯乱」の中にあつて、「一言を得て而して斯の心の動揺を定め」ようとした松陰は、どのやうな形でその状態を脱却したかを考へてみたいと思ひます。

この頃松陰は、偶然、江戸に遊学に来ていた肥後の宮部鼎蔵をはじめ数人の友人達と深くつき合つてゐたのですが、そのつき合ひ方といふのは、共に机を並べて勉強したり、酒を飲んだり、旅をしたりといったものでした。その中で、古今の英雄の事跡を論じながら、心に迫るものがあれば涙を流し、暴逆な人物を論じては、切齒扼腕するといった風でした。かうして友とのつき合いの中で、松陰は自らの志を確かめ乍ら、又、兼てより憂慮してゐた海防の事情を具體的に見聞することを怠らなかつたのです。これより以前松陰は宮部と二人で、江戸湾の喉元にあたる安房、相模両国の海防状態を踏査してゐますが、今度はロシアの脅威を受けてゐる北部の国情を見る為に、同じく宮部と共に、東北地方を遊歴しようとするのです。ところがかね

てつき合つてゐた江幡五郎といふ友人がこの遊歴に途中まで同行することを求めます。江幡の目的は、亡くなつた兄の仇討だったので、松陰達はこれを壮挙としていたく感激し、同行を約して出発の日時を赤穂浪士討入りの十二月十四日と定めます。ところが突然、藩庁との事務的な行き違ひで、藩の許可証が、十四日に間に合はないことになるのですが、松陰は、あくまで友との約束を重んじ、脱藩をして遊歴に出かけます。松陰はこの時の気持を次のやうに日記に記してゐます。

「余は則ち自ら誓ひし所を行ふ。国家に負くを顧みざるには非ず、誠に丈夫の一諾ゆるがせにすべからざればなり。」

ここで国家とは、日本のことではなく、長州藩のことです。形から言へば、藩の掟に背き、脱藩することになってしまつた。そのことが心苦しくないのではない。ただ、友と一たび誓つて交した約束をおろそかに出来ないが為にこのやうな行動に出るといふのです。又、この文の後には、藩の掟に背くことは、自分一個の罪であるけれども、他藩の友人との約束を破ることは、長州藩士としての自分の不実であり、これは藩の名譽にかかわる大事だといふのです。松陰は後に自らを「二十一回猛士」と称し、生涯二十一回の「用猛」、命を賭した行動を行ふという意気を示してゐますが、この脱藩東北行を用猛第一回に数へてゐることからも、この時の意気込みが伺へます。「丈夫の一諾忽せにすべからず」といふ言葉は強烈です。松陰は、学問

の世界での閉塞状態を友との真剣なつき合いの世界に没入することによって、あたかも断ち切る如くに、抜け出すのです。学問の世界での迷ひは決して解決をみた訳ではないのですが、結果的には、後に述べます一年半後の江戸遊学の時には、自信をもって、しかも十分な批判力をもって諸学者と対することが出来るのです。この松陰の迅速な決断と行動力は、まことに、松陰の「活きた」精神の発露と言へるのではないでせうか。

一行はまづ水戸で落ち合ひ、水戸藩士の中でも水戸学を奉ずる人々と交ります。当時の水戸は、前藩主烈公斉昭の指導の下に、外国勢力に対する危機感を最も強く意識してゐた藩で、幕政にも影響力をもち、全国有志の人々の与望を集めてゐた存在でした。それと共に第二代藩主光圀公以来、営々として「大日本史」の編纂に励んでゐた藩です。松陰はこれ以前、日本の歴史は殆んど知らずそれを残念にも思つてゐたのですが、ここに来て、切に、日本の歴史を知りたいと思つたのでした。しかもそれは、多くの学問の内の一つとしての歴史ではなく、「皇国の皇国たる所以」を知るためのものであり、日本人として、祖国の本然の姿を知らんがためであつたのです。

一行は嘉永五年正月、水戸を発つて愈々遊歴の旅に出ますが、この旅の途次に作られた多くの漢詩の中から次の一篇をここで御紹介したいと思ひます。

海棧酒を把つて長風に對し

顔紅に耳熱く酔眠濃かなり。

忽ち見る萬里雲濤の外

巨龜海を蔽ふて鱧鱸来る。

我れ吾が軍を提げ來りてここに陣し

貔貅百萬髮上り衝く。

夢斷え酒解け燈も亦滅し

濤聲枕を撼かし夜鏖々。

水戸の北方の磯原といふ所で詠じたものです。彼方から風が吹き込んでくる海辺の部屋で酒を飲んでゐると、いつしか眠つてしまつて夢をみた。突然、海の遙か彼方から、あたかも巨大な海亀が海を覆ふやうにして、多くの兵船がやつて來るのに気づいた。自分は直ちに軍を率ゐて海岸に陣したのだが、我が勇猛な將兵は、悉く怒髮天を衝いて極めて意氣盛んである。と、思ふ間に夢からさめて気がつく、既に酔ひは醒め、燈も消えて辺りは闇である。ただ、鏖々と波の打ち寄せる音だけが聞こえて來る。以上のやうな意味ですが、この詩は声に出して何度も誦してゐますと、夢から醒めて、じつと思ひをこらしてゐる松陰の胸の鼓動が聞こえてくるやうな詩です。

この後江幡と別れた松陰と宮部は、まず日本海岸を北上して、途中佐渡に渡り、青森を通じて、太平洋を南下して四月に江戸に歸つて來ます。藩邸に出頭しますと、萩に歸されることになり、長州藩士としての士籍を削られますが、幸ひ、父親の育みとされて久し振りに両親の下で生活することになります。この間松陰は、先に決意してをりました「皇國の皇國たる所

以」を学ぶための国史の勉強を始めます。以後の松陰の活動は、海防を例にとりましても、ただ外国船の侵略を防ぐといふことのみならず、そのやうな事件をきっかけにして日本の国柄を正しく発現させるといふもつと大きな視野からの策論がなされ、行動が展開されてゆきます。

さて、萩にあつて、独学で膨大な読書量をこなしてゐた松陰は、かつて十分でなかつた江戸での学問を更に続けたいとの願ひを押へ難く、藩主敬親侯の温情によつて、以後十年間の遊学が許可されることとなります。

第二回江戸遊学

嘉永六年正月に萩を発して江戸に赴く途中松陰は、大和五条の森田節斎を訪れて、文章学をしばらく学びながら滞在し、又伊勢神宮を拜して、江戸に着きます。この直後の六月三日、恰かも符節を合はせたやうに、ペリーが、四隻の東洋艦隊、所謂、黒船を率ゐて、浦賀沖に入港して来たのです。米国使節の来日は、前年、オランダ国王よりの書簡によつて既に幕府に通告されてゐたにも拘らず、幕府は、これを秘し、しかも十分な対応策を欠いてゐた為、この応接も実に不十分なものでした。浦賀沖の黒船の動静は江戸市中へも広まり、江戸城と浦賀を結ぶ

早馬は、江戸市民の不安な注目を浴びてゐました。松陰は、このニュースを聞いて直ちに前回の江戸遊学の時に門をたたいてその海防論に接してゐた佐久間象山の屋敷を訪ねますが、彼は既に浦賀に向かつて出発した後だったので、松陰は意を決して、単身浦賀に向かひます。この時の様子を松陰は次のやうに記してゐます。

「浦賀の辺警査しきさりに至る。余時に客と兵書を講ず。余乃ち書を投じて起ち、袂たもとを振つて出で、將に浦賀に趨かんとす。時已に初夜」

落ち着かぬ気持のままに、松陰は兵書を講じてゐたのですが、閃めくやうに決断が下されま
す。「余乃ち」以下の文章は、簡潔ですが、いかにも劇的で、力に充ちてゐます。そしてこの
決断によって松陰はかつて夢にまで危惧してゐた外国船の侵寇を目の当り見ることになり、こ
れをもって、以後松陰の行動は、時務に直接拘はるものになつていくのです。

この時ペリーは、開国を要求する大統領フィルモアの国書を持参してゐて江戸への武力攻撃
をも辞さぬ覚悟で幕府と交渉してゐたのですが、幕府の方はと言へば、鎖国の祖法は曲げ得ぬ
ことを繰り返して乍ら、まづ、長崎への回航を要求して時日を延引し、鎖国であることの名分を
立てようとするのですが、容れられないとみるや、將軍家慶死去に伴ふ、幕政の多忙を理由
に、決断を将来に持ち越し、曲げて大統領の国書を、久里浜において受けとるのです。かくて
ペリーは鎖国の法を強引に押し切つて、日本への上陸の実績を残し、明春の来航を約して日本

を去ります。国書受理に至る動向つよを具さに観察することによって、松陰の学問姿勢はこの時明確に定まり、佐久間象山に師事して、具体的な日本の対応策を求めることに的が絞られます。その松陰の目から見れば、国家の危機に敏感に対処し得ぬ江戸の大多数の学者たちは、かつては、その権威に大きく心を動かされたものであったにも拘はらず、今や、俗儒として、厳しく批判すべきものとなりました。この松陰の批判精神の確立が、学派的党派性の観点からではなく、みずからの志が定まる所におのづから視界が開けるやうにして確立されたことは、人生と学問との関係の本来の姿を示してゐると言へるのではないでせうか。松陰はこの僅か一ヶ月前には、森田節齋の下で文章道に専念するか、兵学を続けるか未だに迷ひ苦しんでゐたのですが、これ以降このやうな意味での迷ひは、松陰には無縁のものとなるのです。

この頃、幕府は、老中阿部正弘の指導の下にあつたのですが、ペリーの要求を、幕府の手に負へぬものと自覚して、全国諸侯に諮問すると共に事の経過を朝廷に奏聞するに至りますが、これは独断専横を事とした徳川幕府の歴史の中でかつて例を見ないことでした。このやうな情勢の下で、天下の有志はやうやく、京の孝明天皇の御存在の現実的な重みを実感しつつありました。

長崎下向と下田踏海

米国がペリーを派遣して我国に開国を迫るといふ情報を得た露国は、後を追ふやうにして、プチャーチンを派遣します。彼は七月、長崎に寄航して、幕府の応接吏と長期に亘る交渉を開始するのですが、この頃、松陰は、何よりも外国の事情の实地見聞の必要性を痛感し、象山と相計つて、漂流に名を借りて露艦に乗り込む計画を立てるのです。鎖国の法下では死を賭したことであったことは言ふまでもありません。その覚悟を秘めて九月に江戸を発して西下する途次、松陰は初めて京都に立ち寄るのです。松陰はそこで当時、京都にあって、著名な勤皇家詩人であった梁川星敞に会ひ、孝明天皇が外患に対し深く憂慮してをられることをはじめて聞き知るに及ぶのです。この時の松陰の感動は、翌朝直ちに皇居を拝した時に作った漢詩に次のやうに表現されました。

山河襟帯 自然の城

東来日として帝京を憶はざるなし。

今朝盛嗽して鳳闕を拝し

野人悲泣して行くこと能はず。

鳳闕寂寥にして今古に非ず

空しく山河のみありて變更なし。

聞くならく今上聖明の徳

天を敬ひ民を憐む至誠より發したまふ。

鶏鳴乃ち起きて自ら齋戒し

妖氛を掃って太平を致さんことを祈りたまふ。

従来英皇不世出

悠悠機を失す今公卿。

人生萍うきくさの如く定在なし

何れの日にか重ねて天日の明を拝せん。

年少のころより皇室の尊きを思ひ、特にペリーの来航直後、土籍を削られてゐるにも拘はらず、処罰を覚悟して藩主に上書した「將及私言」（用猛第二回）の中で「天下は天朝の天下にして乃ち天下の天下也、幕府の私有に非ず」と明言し、まづ「国家の大義」を明らかにする必要の急なることを説いた松陰は、その中で、「天朝の宸襟を慰め奉る」ことこそが大事だといふ具体的な尊皇の心構へを述べてゐます。そしてこの朝、松陰は、皇居を拝して、「野人悲泣して行くこと能はず」といふ痛切極まりない一句を留めました。又この時に松陰が、心に思ひ描いた天皇の御姿は、「鶏鳴乃ち起きて自ら斎戒し、妖氛を掃って太平を致さんことを祈りたまふ」ものであったのですが、この天皇の御姿こそ、当時の志士達をはじめ、古来国民が仰いできた天皇の御姿そのものであったのです。この時の感動はおそらく、松陰がこれまで考へ続けてきた尊皇論の内実が実感されたといふことであり、又、皇室への敬慕の心が、激しく燃焼したといふことでせう。又、具体的には、今決行しようとしてゐる渡航の企てが、ひいては梁川星巖より洩れ伺った国難を憂慮されてゐる孝明天皇の「宸襟」を「慰め奉る」ことになるかもしれないといふ喜び、更に、そのやうな、天皇と国民とをめぐる不可思議のつながりのさ中に今自分があることの言ひ知れぬ感慨に打たれたのではないでせうか。恰かもこの時、「悲泣し

て行くこと能は」ぬ松陰の全身、全靈は、孝明天皇の御心に大きく包摂された如くです。

さて、京都を発った松陰は長崎に向ひますが、目ざすプチャーチンは、既に長崎を離れており、松陰の意図は実現のチャンスを失ひました。この後松陰は、萩に帰り、京都に立ち寄り、暮の十二月二十七日に江戸に着きましたが、半月後の翌安政元年一月十四日、ペリーは再び艦隊を率ゐて、江戸湾口に現れ、幕府に、開国の要求をつきつけるのです。幕府はあくまで戦火を交へることを避けたいとの避戦の立場を前提として極力交渉を有利に展開しようとするのですが、砲撃をも辞さぬペリーの前に、策つきて、三月三日和親条約は締結されます。この間松陰は、どのやうな気持でこれを見てゐたか、次の文にそれを見てみませう。

「江戸を去る□十二里、金澤沖に居然□□夷舶碇を並べ居り候状態、實に切齒に堪へず、且つ日を逐ひて猖獗しょうけつの形を顯はし、測量上陸、言語道斷の趣に御座候。穩便穩便の聲天下に満ち、人心土崩瓦解、皆々太平を樂しみ居る中にも、有志の輩は相對して悲泣するのみに御座候。」

(書簡「父杉百合之助宛」安政元年正月二十七日)

強い危機感と、激しい憤りがこめられた文章で一読して慄然とさせられます。

松陰が何より恐れたのは、「人心」の「土崩瓦解」であつたのでせう。それは、日本人の精神の死を意味します。「太平を樂しみ居る」江戸市中の満座の中で、松陰とその同志達は眼を見開き、たじろぐことなく、現実を見据ゑてゐるのです。この思ひは、松陰をして、条約締結

後に再び海外渡航の企を決行せしめるに至るのです。これが下田踏海ですが、皆さま御承知のやうに、これもペリーの拒否の前に見事失敗致しました。この果敢な決断と行動は、実に松陰の本領発揮と言へるのですが、それと共に、失敗後の松陰の態度も、その面目が躍如として表はれてゐるところです。

松陰は、ペリーに乗船を拒否された後、自首をしますが、その場で捕へられ、江戸へ護送されます。次の文章は、その途次のことを回想したものです。

「扱さて宿しゆくにて番人等ばんにんらう寝ねずの番をなす故、亦爲に大道を聞かすること下田の獄に在る時の如くにして、更に快なり。余生來の愉快、此の時に過ぐるはなし。」（回顧録・安政二年三月）

「大道を聞かす」とは、一体何を語ったのか明らかではありませんが、恐らく、「国家の大義」とその中に生きる国民の生き方、又、現実の日本が置かれてゐる情勢とそれへの対処等であつたのでせうが、それが何故、生れてこの方、最も愉快な時であつたのでせうか。然も渡航の企画は失敗し、処罰を待つ身であれば絶望してゐて不思議ではありません。なのにどうしてこのやうな言葉を書き記したのか。これは、一つには、成功や、失敗の次元で行動を評価するのではなく、行動の動機が、永久の生命とでも言ふべき大いなるものに根ざしてゐたことの実感と、それを力一杯やったことに対する深い得心があつたからではないかと思ひます。この松陰の気持は次の、赤穂義士ゆかりの泉岳寺前を護送される時に詠んだ歌にも良く表現されてゐる

ます。

かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂

さらに松陰の教育者の性格とでもいふべき、自分の心を伝へずにはおかないといふ性格が、一挙に開花したといふことも挙げられると思ひます。これまでの松陰は、あくまで師について学ぶといふ生活を主体としてゐましたが、これを境にして、後の松下村塾に結実する新しい人生が展開されていきます。それは決して求めて師となるのではなく、已むに已まれぬ気持で、その時々相手に対し、人生の大道を説くといったものでした。この喜びに、松陰は、この時目覚めたと言へると思ひます。

以上、下田踏海に至る若き日の松陰を概観して参りましたが、松陰の本領は、何に對しても、心が常に活き活きと働いたことであつたと言へるのではないでせうか。そしてここに腹を据ゑた松陰の学問とは、心の向かふところを確かに定め、その方法を模索するところに展開されたと思ふのです。言はば、松陰の学問とは、人生と一体であり、それが、祖国の運命を直視し、天皇の御心につながったとき、大きく飛躍していったと言へるでせう。その松陰の精神は、遺された文章の中に実に活き活きと表現されてゐます。私達は、松陰の言葉の中に潜む息づかひを直接感して行くことによつて、松陰の学問の姿勢につながつて行きたいと切に思ふのです。

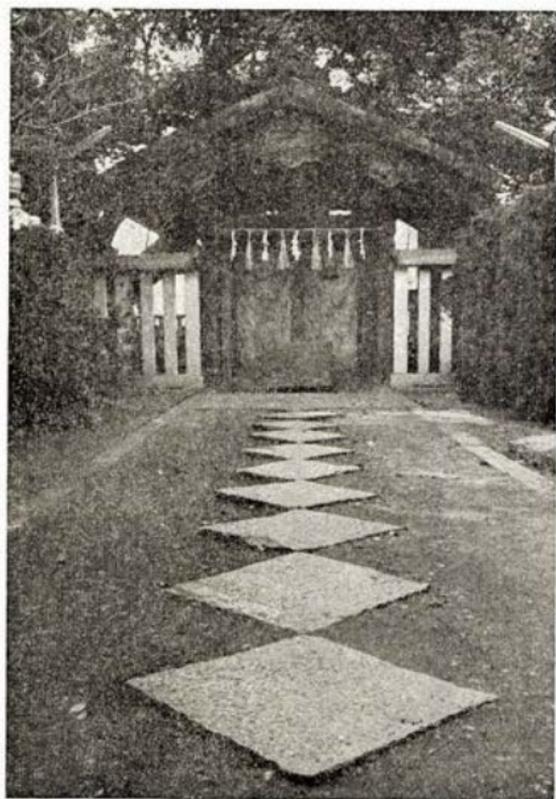


講

義

最近の日本の動きは世界の驚きである

世界経済調査会理事長 木内 信胤



はじめに

過去一年間の内外の事情

日本の動き

ベトナム撤退とアメリカの精神革命

アメリカ経済学の問題点

独裁へ急転回したインド

ソ連は何を意図してゐるか

情報統制で自滅へ進む北鮮と中共

日本の動きは世界の驚きである

インフレの終熄

前代未聞の不況と国民性

政治改革の可能性

はつめじ

今日のお話の題を『最近の日本の動きは世界の驚きである』としたのはいささか早計に失したかも知れません。いまの日本が世界が驚くやうな動きをしてゐるのは事実だと思ふのですが、八月九日の現時点ではまだ驚いてゐないやうだ。だがそれは世界が日本の實際を知らないからであつて、やがて知るに至れば必ず驚くはずだと思ふ。日本は非常に素晴らしい、いい動きをしてゐるのだが、そのことに世界が気づいてゐない。それどころか、あなた方全部がそれに気づいてゐない。ですから、この題は非常に乱暴な言ひ方になつてゐるのです。

世の中には、日本はもうとても駄目なんだと思つてゐる人がゐる。その人達は駄目だけでも放つておくわけにはいかないから、出来るだけのことをしてゐるのだといふ。だが私は少し違つて、皆が駄目だとは思ひながらも出来るだけのことはしようと思つてゐるから、日本は必ず良くなるのだと思つてゐるのです。昨年この合宿教室でご一緒した小林秀雄さんは、私とタイプが違ふかも知れないが、猛烈な楽観論です。昨年「日本を守る会」といふのが出来た。明治神宮の宮司さんが中心の会ですが、その「日本を守る会」のことを小林さんに話したら「日本は守つてなんでもらふ必要はない」と言はれる。日本はこれでいいのだ、これで立派なの

だといふのが小林さんのお考へです。これにはちょっと驚きました。小林さんは新聞は読まない。テレビは時々見る。野球が好きで、野球と相撲は見る。あとはテレビでニュースを聞くだけで他は何も見ない。それで本居宣長ばかりをやっている。さういふ心境にお立ちになると、日本といふ国は馬鹿によく見えて来るのかも知れませぬ。

過去一年間の内外の事情

△日本の動き▽

昨年八月「この秋には政治は必ず乱れるだらう」といふお話をしましたが、そのころは田中内閣では仕方がないと思つてゐた。このまま秋まで続くはずがないと思つてお話ししたわけですが、『文芸春秋』の記事がきっかけとなつて、田中角栄氏は総理の地位を去り、続いて三木武夫氏といふ意外な人物が総理になった。これが日本の大事件ですね。私はいつも世の中には意外なことが突発するものだと言つて来ましたが、まさかと思ふことが常に起る。しかし田中内閣がああいふスタイルで突然アウトになる、そのみならず三木さんが後に出て来るとは誰れも思はなかつた。こんな時にこそ世の中は意外なことの連続だということを、心に刻みつけるべきだと思ひます。



世の中が嫌になる、自分の知恵で考へてもう駄目だと思ひ込む、さういふ時がある。しかしそこに宇宙の大自然とか神様とかに對する信仰心のやうなものがあれば、神様はかうしておくはずがない、何とかして下さるだらうといふ話になる。ですから意外なことが突発するといふことは非常に楽しいことです。意外なことが突発するから恐ろしいと思ふのはよほど駄目な人であつて、積極的な態度であれば、意外なことが起こることを楽しみと思ふやうになる。

田中総理が辞めた、あの辞めっぷりが意外だった。『文芸春秋』の記事が出て十日間はノー・リアクションでしたが、その後天祐といふか、まるで誰かが日本を引っ張つてゐると思ひたくなるやうな弾みがついた。それは田中さんが外人記者会見に行ったことです。外人の記者にはアメリカ人記者が多い。彼らはニクソンを二年越しに締め上げて、辞任にまで追ひ込ん

だ。その連中の仲間ですから田中さんが金脈で怪しいといふことになればシャープに突く、それを日本人記者が聞いてゐて、大きな刺激を受けた。田中さんは何とか答弁はしたけれども、油汗を流して「今日は辛かった」と言つたさうです。そこで日本の記者どもが負けぢやゐられないといふので騒ぎ出したから、とうとう辞職にまで追い詰められた。世の中が大きく動くとき、それはさうなるはずだからさうなるのですが、きっかけといふものは常に小さい。そのきっかけにすぎないものを、原因と思ふ勿れ。原因は他に大きなものがあつて、それが表面に出るきっかけが、これこれであつた、と世の中はかういふふうに捉へるべきです。

現在三木内閣は何ひとつ出来ないといった姿です。独禁法も酒・タバコの値上げ法案も通すはずであつたが通らない。自民党の改革も宙に浮いてゐる。わづかに政治資金規制法と公職選挙法の改正とが国会を通つただけ。中共との間に日中平和友好条約を結ぼうとしてしきりにやつてゐるが、それも駄目。何ひとつ出来ないといった姿ですが、にもかかはらずインフレはいつの間にか終熄し、入れ代つて出て来た不況は、深刻ではあるが社会的には格別悲惨といふ状況は現はれず、倒産も思ひのほかには少ない。失業に至つては欧米の尺度から見ればゼロに近い、これが一番目立つ日本の不思議です。私はこのレジュメを書いた四月ごろ、もういま頃はこれを世界が驚いてゐるはずだと思つたのですが、まだ驚いてゐないらしい。あなた方もインフレが止つたことすらまだおわかりになつてゐないのではないかな。世の中の遅鈍なること、

はがゆき限りだが仕方がない。もっともそこにおもしろ味があるのかも知れない。

ベース・アップも、格別の政治的手段を用ひないで、昨年の三三二%が今年は一三%といふ低率に収った。春闘では毎年労組が強くなつて、昨年はゼネスト擬ひの「交通ゼネスト」までいつたのですが、今年はそれをやらうとしたが出来なかつた。これは彼らの惨敗なのです。彼らはベース・アップが一三%しかとれなかつたから負けたと言つたが、それはごまかしです。春闘なるものは世界にユニークなものです、それが意外にも労組の惨敗につながつたのです。

外交では問題の「日中平和友好条約」は音もなく消え去つたかのやうであり、台湾とのあひだには、極めて突然に「航空路」が復活した。もつれてゐた日韓関係は宮沢外相がソウルに行つて、日本政府は二年前の金大中事件を論ずることはもうやめにしたといふことを決めてきた。これで日韓関係はあるべき姿に立戻つた。これをいまの新聞に影響されてゐる方は憤慨なさるかも知れないが、私は二年前から同じことを言つて来た。なるほど日本の主権を侵犯したかも知れないが、だからと言って向うのほうが「まことに相済まなかつた」と言つて来た以上、日本はどう出ると言ふのです？賠償でもとるのですか。領土の割譲でも求めるのですか。「勘弁してやる」としか言へないでせう。さうであれば、向うが現実にやり得る最高の謝りの姿を見せれば、それで勘弁してやつたらいいのです。金東雲といふ一等書記官の指紋があつたといふのが唯一の証拠でした。恐らく彼が現場の指揮者だったのでせうね。しかし世の中には

理屈通りに押すわけにはいかないことが一杯あるもので、ほどほどのところで我慢しなくてはならない。いかに言はんや相手は外国です。しかも大事な国なのだから適当にやらねばならないのを、まるで鬼の首でも取ったやうに騒ぎ立てた。これでは、どうにもならない。本当に金大中事件は日本国のまづさをさらけ出した事件でした。日本の新聞しかご覧になってゐないから、そのことがまだおわかりにはならないのでせうが、ともかく三木内閣といふ左がかった内閣でありながら宮沢さんの決断で、金大中事件は「これでおしまひだ」といふことを宣言した。これも意外なことでした。

△ベトナム撤退とアメリカの精神革命▽

世界ではアメリカの動きが一番大事です。アメリカは四月二十九日にベトナムからの完全撤退を余儀なくされた。この時を以って戦後三十年の一時期が終つて、「新しい時代」に入つたものと思はれます。なぜかと言へばアメリカが新しいアメリカになるだらうから。これは非常に大事なことです。私は確信的にそのやうに思ふが世界では必ずしもさうではないやうだ。

アメリカはベトナムで敗退した。四月二十九日に引き揚げて、三十日に共産側の臨時革命政府と称する連中と北ベトナム軍がサイゴンに入城する。アメリカはきれいにゐなくなった。だから四月をもつて戦後は一時期を画し、五月一日から新しい時代に入った。その前にカンボジ

アでも同じやうなことがあった。ブノンペンからアメリカ人が引き揚げてしまったのは四月十七日です。それから二週間足らずでサイゴンが同じ運命になった。あの終戦直後から三十年にわたって続いてゐた旧仏領インドシナ問題に結末がついたわけです。アメリカは一言の弁解もしないで引き下がった。ちよつと變つてゐましたね。マスコミも政府の人も何も言はない。ただ頭を下げて黙って引き下がったといふ形だが、それはアメリカにとつてはそれほどショックではないのです。と言ふのは、それはアメリカの受けた大きなショックの中の最後の一撃といふべきものに過ぎなかつたので、余り大きなものではないのです。本場のショックはアメリカが南ベトナムに最大の兵力を注ぎ込んだ直後だった。すなはち一九六七年の一月がピークで、五十四万人を投入した。アメリカは、これだけの兵力があれば必ずうまくいくと計算して注ぎ込んだ。この時の国防長官はマクナマラといふ「人間コンピューター」と言はれた人でした。コンピューターの考へてやったのだが、その年のうちにさっぱり良くならないことが判明した。この時が一番のショックだったのです。それ以来八年間「こんなはずではなかつた」とアメリカ人は煩悶を重ねた。何しろ五十余万の大軍ですが、学生はあまり永いあひだ現地に置けないので、どんどん入れ替はる。その相当数が死ぬわけです。学生は勝つはずがない戦争と思つてゐる。その勝つはずのない戦争に徴兵で取られるなんて、そんな馬鹿なことはないと思ふから反戦になる。学校騒動がたくさん起きる。ヒッピー化する。反戦は反体制に通じます

から国の秩序は乱れる。フリー・セックスを始めとしていはゆる旧道徳は地を払ふといふことになる。こんなアメリカではなかった、俺達の国はどうしたのか、と彼等は思ふわけです。

戦後十五年間ぐらゐはアメリカが頑張つてゐたから、スターリンのソ連によって世界が共産化されることを免がれた。朝鮮半島も半分が韓国として残り、小さいながらも台湾が残り、ドイツも半分助かった。世界の共産化を防いだのがアメリカなら、世界の経済復興をやってくれたのもアメリカでした。ヨーロッパはマーシャル・プランで始まる経済復興によつて、共産化を免れた。戦後、私は為替管理委員会の仕事で占領軍と常に接触があつたから、自分の目で見てゐるわけだが、彼らは実に快活で自信を持って嬉しさにやつてゐた。日本占領は七年ですが、その倍の十五年ぐらゐの間は同じ調子であつた。しかしそのあとだんだんおかしくなる。それに止どめを刺したのが、いくら兵力を投入しても勝てないベトナム戦争だつた。そして国はすこく乱れて、思想的にも荒廃していく。「こんなはずではなかった」とそのころから思ひ始めるわけです。そこでここが大事な点ですが、アメリカがまるで駄目な国ならそれでおしまひでせう。しかしアメリカの中に何か根性が残つてゐるなら、「こんなはずではなかった」と思ふところから、何かが出て来るはずでせう。私は出つつあると見てゐます。

そこへニクソンのウォーター・ゲート事件が追ひ打ちをかけた。ニクソンの悪さは盗聴したのが悪いといふよりも、それを隠すやり方がひどくて、自分の部下を次ぎ次ぎ首切りにする惨

たらしきにあつた。とても日本人には出来ない。さういふ大統領を戴いて得意になって世界に号令してゐたといふ事實に、アメリカは恥ぢ入つたのです。「顔向けが出来ない」といふ心境になる。これが追ひ打ちです。かういふ心の中の煩悶の進行が八年も続き、追ひ打ちもあつたことから、今度ベトナムから引き揚げる時には、心の用意が相当程度出来てゐたものと思ふ。一種の精神革命です。さういふことが進行したと思つてゐる私から見れば、最後にベトナムから引き揚げたことはアメリカの苦しみの最後の一コマにすぎない。むしろそれでほつとしたといふところでせうね。

事件といふものは、右のやうに見ることが必要だと私はお勧めしてゐるのです。世の中を眺めようとする場合、新聞やテレビに出てゐるやうなことは上っ面なのです。上っ面の日本国では、田中さんが退場して三木さんが跳び出して来たりする。それももちろん大事なことです。その下にある目には見えないところで、本当に大事な事件は進行してゐると私は思つてゐます。上の方を「表層の日本」と言ふなら、下の方は「深層の日本」と言ふわけです。世の中は凡て層を重ねた構造になつてゐる。つまり「重層構造」ですが、その表層の中にも、ごく上っ面の層とさうでない層とがある。だから人と話をする時は、「ちよつと待てよ、あの人はどの層を見て話をしてゐるのかな。自分も同じ層のことを話さなければ駄目だな」と、かういふことになつて来るわけです。たとへば福田恆存さんが「日本は駄目だ」と言ふのは、日本のどの層

を見て言っているのかそれが問題なのです。この目には見えない下の方の深いところは、残念ながら私には目が届かない。ひと皮目、ふた皮目ぐらゐなら、目が届くやうな感じがするが、うぬぼれかな。私がいま言っているのは、目に見えないところで起っているアメリカの精神革命が大事ですよ、といふことです。

重層構造がどんなものかといふことは自分自身をよく観察されると気付かれるはずですが、目に見える自分は得意だったり失意だったりする。だがその他に自分を苦しめたり得意にさせたりする源みたくないものがあることに気が付きませんか。それを心理学では深層意識と言ふのでせうが、まあそれと同じやうなことです。儒教的な道徳では「己れに克つ」といふことが非常に大事です。己れに勝つとは誰が勝つのですか。己れがひとつなら勝つやつはゐないわけだ。だが深い方の己れが浅薄な方の己れに勝つといふことでせう。いまのアメリカはさういふことを説明する絶好の例です。私はアメリカの深層における意識の変化がどのくらゐ深いところまでいっているかは知らないが、いままでのアメリカでないアメリカが現はれて来るところに来てゐるだらうと思ふ。それに一種のキッカケを与へたのがベトナム敗退だから、私はアメリカはこれで変わるだらうと見てゐるわけです。

そのやうに見てゐるせるか、果然アメリカは変り始めた。それは韓国に対するアメリカの態度に明瞭にあらはれてゐる。もしも金日成が、アメリカは韓国を守ると言つて来たがベトナム

のやうに約束を守らないかも知れないと考へると、いまがチャンスだと思つて跳び込んで来る、ということが起り得る。もちろん朴正熙大統領もさう思つて非常な危機意識に立つて言論の自由なんてものは当分はお預けだといふ政治をやつてゐる。日本の新聞は相変らずさういふ韓国を非難してゐるが、危いと思ふのが当然でせう。アメリカもさう思ふからでせう、ベトナムが終つた翌月の五月早々、今度もし金日成がいきなり韓国に武力進駐したら、直ちに平壤を爆撃すると国防長官をして言はしめた。日本はいつも喧嘩っぽくやると戦争になるからまあ穏便にといふ態度ですが、いままでのアメリカもややさうであつたが、今度はいきなりさう言つておいてさらに追ひ打ちをかけた。その平壤をたたく場合には核兵器を使ふかも知れない、核兵器を使はないとは言ひませんよと言つた。この歯切れの良さがアメリカがいままでと變つた、變つたらしいぞと私をして思はせる兆候のひとつです。その時また、アメリカは、これは自分がベトナムから学んだ教訓だと言つた。ベトナム戦争は、敵の拠点のハノイはたかかないで、ただ入つて来る兵隊を追ひ払ふといふ戦争だつた。だから何年やつても駄目だつたのです。入つて来るのをやめないとお前の拠点をたたくぞと言つておいて、約束通りやめたら、たかかないで済むわけで、何も悲惨なことは起りしはしない。やめないとなたくぞといふのは正義の行為ですね。ところがいまの国際関係はすべて話し合ひとか条約とかで決めようといふ考へですから、一体何が国際間の正義かといふことがわからなくなつてしまふ、それがまづい

で、アメリカはやがて何が正義かといふことを言ふやうなアメリカになるだらうと思ひます。さうなるならば一九六七年、ベトナムに最大兵力を注ぎ込んだ以降の彼らの煩悶の結果、ある程度の精神革命が出来たのだと言つてさしつかへないと思ひます。

私はこのことは現在の世界で超重要なことだと思ひます。日本人から見るとアメリカ人はいくら深刻なことを言つても、非常に上っ面に見える。ところが日本人は何か深刻に考へるのが大好きだから、人が何かやるとまだそんなことでは浅薄だといふやうなことを言ひたくなる。だが——深淺の程度は別として——アメリカに何かが起つたのは事実です。アメリカは自分の周辺が第一の友達であるといふことをベトナムで知つた。自分の力には限度がある、これからは力相応のことしかしない、といふ決心をした。友達とは助け合ふが、友達でない国とは助け合はない。素晴らしいですね。その友達とは、カナダ・メキシコ・カリブ海諸国で、南米は友達ではない。以前のアメリカは中南米全部をひとつの仲間と見て、それを従へて国連を支配して来たわけですから大違ひだ。第二のグループがヨーロッパの同盟諸国、第三のグループが日本と韓国と台湾です。韓国に対しては五月から最も友達らしく振舞つてゐる。韓国と台湾は間違ひなくアメリカの友達ですが、日本との間にも、いままで安保条約があるのかないのかわからなかつたが、これからは、有事の際に日本は何をやる、飛行機はどうするといふやうな分担を本格的に論議しようといふことになつて来たわけです。

△アメリカ経済学の問題点▽

アメリカでは昨年暮の失業増大に驚いて、今年一月からいままでの「インフレ抑制」に重点をおいてゐたのを変更して「失業対策もしくは景気上昇のための政策」に重点をおくことにした。現在失業者が九〇〇万近くになつてゐる。率で言つて八・五％とは大変なものです。だが、実のところ私は経済問題に関してはアメリカを信用してゐない。これまで述べたやうに、精神革命をやつたらしいから国内の法的秩序は回復し、気分的に大いに甦つてゐる。しかし経済はどうか。数字で見ると限りではアメリカ経済も良くなつたと言へなくはない。それでは八五〇万余の失業者がどんどん減るかと言ふと、さうではない。失業を減らすつもりのことをつつてゐるが効果はあまりあがらない。そのうちにもしまたインフレになればインフレ抑制をやる、そこで八五〇万が八〇〇万になつた。さらに七八〇万ぐらゐには減るかも知れないが、また抑制をやつたら今度は九〇〇万に跳び上がる。アメリカはいわゆるスタグフレーションで、つまり失業増大といふ現象とインフレとが共存してゐる。アメリカ人はこの両者を同時に治療する案を未だ発見出来ないでゐる。これでも大丈夫だといふ自信ある声は聞けない。では一体なぜアメリカは精神革命みたいなことやつてゐながら、スタグフレーションの処理が出来ないのか。それは経済学が病氣だからでせう。といふのは、経済学が自然科学に押されて人間社

会のことを研究する学問でありながら物質や無生物の世界を研究する態度でとり組んでゐるからです。鉱物や植物は心といふものでつながつてゐないから、別々に取扱つても差支ない。従つて自然科学は分業的なのです。また実験によつて実証を得ようとしたり、実物を手に入れようとしたりすることが示してゐるやうに、すべて実証的に考える。ところがその自然科学があまり偉いものだから、全学問がそれに押されてゐる。人間社会を学ぶべき社会科学が自然科学的になつて、実証がなければものが言へないことになつた。つまり直観を排撃してゐるのです。そして分業的だから「俺は金融は知つてゐるが貿易は知らん」とか「経済学者だから政治のことは知らん」とか平気で言ふ。これが病氣なので、これが直るまではバリツとした意見は出て来ないと私は思つてゐます。アメリカのまねをしてゐる日本の経済学ももちろん病氣ですが、ただ日本人は借りものの経済学にあまり信用を置いてゐない。日本人は実感で動く。だからインフレが止まったり不況が大したことではなかつたりする。アメリカは理屈で動くから、まづその理屈を直さなければならぬ。それにはまだ時間がかかることではせう。

私は今日もずいぶんいろいろな「判断」をお話して来ました。お前はどこからさういふ判断を得るのだ、どこに証拠があるのだ、どこに実証があるのだ、とよく人に聞かれる。私はその時、これらは全て直観だ、俺の判断は総合的直観といふべきもので、天から降つて来るのだと答へる。実は、これはかうだと思ふ直観的判断を、実証で確める作業、それが学問なのです。

進化論を思ひつくとか、アインシュタインが相対性原理を発見するとか、自然科学でもさうでせう。ニュートンがりんごの落ちるのを見て、これはおかしい、何かさうさせるものがなければならぬと思つたから、それを確めて、全ての物体は相互に引き合つてゐるといふ万有引力を発見した。直観をどうやって確めるかといふところに学問の必要があるわけで、確める時間がなかつたら直観で行きませう。その一方、いい直観を得るにはどうすればいいかを研究しませう。それにはあんまり学問をしないことをお勧めする。自分の魂を信頼して真正面からぶつかれば直観力は出て来る。それで得たものを、人に説明したり、自分で確めたり、どうもさう思ふけれども本当かなと思つたら、学問することです。その他の学問は要らない。プロフェッサーになるために学問をするなんて言ふのでは、直観力はどこかに行つてしまふ。そういうことを考へて、いまの経済学は病氣だと言ふのです。しかしその病氣が直るのは、日本が一番早いだらうと思ふ。それに世界はやがて驚くだらうと思ふのです。

△独裁へ急転回したインド▽

後進国は総じて激動の事態を迎へてをり、そのなかで一番重要なことは後進国が二つに分かれたことです。二十ぐらゐの石油の出る国は馬鹿に金持ちになつた。その反対に多くの後進国では、油は高くなつたし、世界はインフレで自分の作るものよりも買ふものが高いといふこと

で、非常な経済困難に陥つてゐる。油の出ない後進国は惨憺たるものださうですが、金持になつた後進国の方も、伝統が崩れて国が乱れる、といったことで大変なことになるでせう。

ガンジー首相の率ゐるインドが独裁体制に急変したことは、激動の事態を迎へた後進国の中の、その適例です。彼女は選挙の時に不正をしたといふので、裁判は有罪になつた。いまは上級審に控訴してゐるのだが、いきなりクーデターみたいなきことをやって反対党をふん縛つてしまつた。女性だから徹底してゐるのかな。ものすごい勢いで独裁になつてしまつた。ガンジーはネールの娘です。ネールはイギリスで勉強をした教養の高い社会主義的な、またデモクラシー謳歌の人でした。デモクラシーをやつてゐるからインドは立派だと思はれてゐた。ところがそのネールの娘の時代になつて、それをひっくり返へしたのです。これは非常な驚きです。インドといふ国は実に大事な国だ。人口も多くいわゆる文明の発祥地のひとつです。われわれが頼つてゐる仏教的文明は支那といふもので濾過されてはゐるが、もとはインドの産物です。アメリカは深く考へるのが不得手だ、浅薄だと言つたが、われわれ日本人は仏教的試練を経てゐるから深く考へたのです。大変な影響を受けた。ところがインドで、仏教的であつたのが終つたのは一、〇〇〇年ぐらゐ前ですか。それからは仏教はなくなりヒンズー教になつてしまふ。仏教から見れば一種の墮落です。迷信的なものに落ちた。つまり昔のバラモン教が仏教を経て、ヒンズー教に化けたものが、今のインドの宗教です。ヒンズー教から見れば「仏教は俺の一派

だ」と言ふ。そこに蒙古人が入って来てムガル帝国が出来て、全く異質のイスラム教になる。それで何百年も惨憺たる目に会ふ。そのあとにイギリスが入って来る。イギリス支配が何百年か続く。それが日本の大東亜戦争のお蔭で、インドは独立するわけです。その時にマハトマ・ガンジーといふ偉い人がゐて、インド流のやり方でとうとうイギリス人を追ひ出して、現在のインドが始まるわけです。だからインドは、思想的にも揉みにもまれたところで、世界で一番苦しんで来た民族でせう。インドには身分的なカーストがありますが、その他に職業のカーストが何千とある。およそデモクラティックではない。職業選択の自由がない。ところが中根千枝といふ女性の学者が、このカーストを見て、これが最も生産性の高い能率的な制度だといふことを言つてをられるさうです。あの過去を背負つてゐるインドは、二千数百年の昔に生れたカーストで何とか秩序を保つてゐる。それをはずしたらインドは目茶目茶になる、カーストのおかげで助かつてゐるとおっしゃつてゐるさうです。ちょっと驚きましたが、本当でせう。

△ソ連は何を意図してゐるか▽

先に述べたやうにベトナム以来のアメリカの考へ方の変化によつて、インドはアメリカの友達ではないから、何が起つても放っておかれることになった。そこにソ連が猛烈な力を出して

きてゐるから、ソ連はインドを支配下におくかも知れない。北ベトナムに対しても一月から大幅な武器援助をした。それがベトナム問題が意外にも早く結末がついた理由ださうですが、その時にお前たちが勝ったらカムラン湾をよこせといふ約束をしてゐたといふ話です。ダナン港もソ連は手に入れるつもりらしい。ソ連は何を考へてゐるのだらう。ところが日本の新聞は、
「ソ連は依然として世界革命を狙つてゐる」と書くのが嫌なもんだから、さう書くところを憎まなければならなくなるし、人を憎まなければならぬといふ事実日本人は目を覆ひたがるものだから、中ソ対立に引つけてソ連は中国包囲陣を作つてゐると書く。だが私はさうは思はない。ソ連から見たら中国は地続きだから武力的には何ら問題にならない。毛沢東は誰かに手を持ち上げてもらはないと握手が出来ないといふ噂だが、おそらく本当でせう。少なくとも三年後には必ず本当になると思ふ。ですから毛沢東で持つてゐる中国といふのは永くはない。その時に台湾流の中国に生れ変はるかもしれないし、さうでなければ北京に親ソ政権が出来て、一朝目がさめたら共産圏はまた一枚岩の団結になつてゐたといふことになるかも知れない。そのあとは世界共産革命と続くわけですが、ソ連はそれを考へてゐるでせう。その時に役に立つのがインド洋でありカムラン湾なのです。それが彼らの世界革命の意図でせう。愚かにもソ連はその意図をまだ持つてゐるでせう。ソ連の意志は今のところ十分には明らかになつてゐないので、ともあれ今後の世界の大問題だと思ひます。

△情報統制で自滅へ進む北鮮と中共▽

中共と北鮮は、行きづまりの道を歩きつつあると見ていい。なぜかと言へば国民にニュースを全く与へないからです。この間、北京で人民大会が何年かぶりに開かれたが、夜耿耿と電気がついてゐたから何かをやつてゐるか知れないと言ふんです。濟んでしまつて、発表の用意が出来て、初めて国民に知らされる。日本ではこんなことはない。佐藤元総理が倒れた、慈恵医大病院に入られた、といふやうに、ニュースは刻々伝へられる。それに対して毛沢東の健康がどうであり周恩来はなぜいつから病院に入つてゐるといふやうなことが、国民にどれだけ知らされてゐるか。日本では新聞やテレビなどがふんだんにニュースを流してゐる。従つて日本全国が一つの基盤でものを考へることが可能です。ところが可哀相に中国では、日刊紙は『人民日報』と『光明日報』、それに『解放軍報』といふ軍の機関紙の三つしかない。ニュースは統制されたニュースしか流されない。国民は全然情報なし。党であらうと大学であらうと、ちょっと変なことを言つたらすぐ下放だ。農村に追ひやられてしまふわけだが、ポツンと一人どこか遠いところに配属されたら、逃げるにも逃げる先がわからない。一生そこで奴隷のやうに働く他はない。こういふわけで考へる自由が全くない、考へようにも、考へる材料が与へられてゐない。非常な野蛮状態に転落してゐる。さらに毛沢東は偉い人はみな殺してしまつたから、

人材はゐないといふのが現状です。

北鮮は中共に輪をかけてゐる。金日成ほど自分を神格化した人は珍らしい。雨が降れば「今日は金日成のお蔭で雨が降った」といふことになるらしい。北鮮の人間を、二、〇〇〇人でもいいから、自由に韓国内を歩かせて、自分の目で韓国を見せたら、いままで聞かされて来たことは全部、飛んでもない嘘だったといふことになるから、金日成政権は潰れてしまふ。朴大統領が赤十字会談を呼びかけ、その次に南北統一のための話し合ひをしようとしたのは、そのためだった。いつ成功するのか。私は北鮮も韓国と一緒に国連に入るといいと思ふ。日本は北鮮を承認したらいい、日本と交流したら、自然と韓国を見ることになる。だからお互ひにある程度自由を認めた交流をしませう、それを認めるならあなたを承認しませうといふことで、日本は国交を結びたいと言へばいい。しかしそんなことを言ったら、北鮮は拒絶するでせう。だが、北鮮といふ国は、さういふ殻に籠こもつてゐたら一体どうなるか。結局は自滅する他はない。金日成も人間ですから、いづれ死にます。自分だけを神様にしてしまつたら、それで終りになるに決つてゐる。毛沢東もさうだが北鮮はもっとひどいと思ひます。

自分を神格化することとニュースを与へないこととは裏表をなしてゐるのです。ニュースを与へないで統治しようとしたら、自分を神様にする他はない。馬鹿なことをやったもんだ。人間はある道に入り込むとどこまでも馬鹿になるものですね。ともかく世の中には「まさか」と

思ふことが豊富にあるから、目を皿のやうにして世界をご覧になれば退屈することは絶対になりません。

日本の動きは世界の驚きである

△インフレの終想▽

さて以上のやうな世界の中で、日本は初めに触れたやうな経過で今日まで進んで来た。その中には世界が驚く筈のものが含まれてゐる。田中内閣はたいした法律上の手続きもなくサツと身を引いた。その後には全く規則に乗らない、自民党の党則にも憲法にもない、わけのわからないことで三木さんが出て来た。このやうに理屈にこだはらない日本は、何かしら世界からは変な国だと見られてゐる。その変な国が存外うまくいってゐるのを見れば、それが世界の驚きに変わるわけです。日本人は、日本の不思議なことを、みんな悪いことのやうに思ひ込んでゐる。日本人には理屈が通らない、日本人はいつも妙な妥協でごまかしてゐるとか言つてゐるが、その日本が世界一いいところへある日突然現れたら何と説明しますか。私は世界一いいところへボンといきさうだと思ふ。

日本が世界を驚かす第一は、経済がうまくいってゐるといふことです。インフレはすでに止

まった。物価の継続的上昇がなくなるのをインフレが終つたと言ふ。多くの人は「物価はまだ下らないではないか」と私に文句を言ふが、上がったところで止まつてゐる事実を認めて、これでインフレは終つたと思つて欲しいのです。物価を下げたいならばベース・ダウンをやればいいが、それをやれば物価は下がるが恐慌になつてしまふので余計に始末が悪い。物価が上がつたのは残念です。だが誰が悪かつたと言ふよりも経済学が病氣なんだから、と知つてサッサとあきらめることです。ところが現代の日本には全てを他人のせゐにしてわが心を慰めるといふ卑劣なる根性が充満してゐる。自民党が悪いとか大企業が悪いとか、いろんなことを言ふ。悪いと思ふものには悪いと言つていいが、あんまり言はない方がいいと思ふ。悪い悪いと言つても、自分でそれを直し得るわけではないので、そんなことよりも要するに自分は駄目なんだと思つて勉強した方が洒落てゐる。また悪人探しをするやうな心理状態に左右されてゐる限り、どんなにいいことがあつても、いいと認めることが出来ないでせう。これは憐れむべき心境です。

昭和四十八年の夏ごろには、すでに本格的なインフレだった。八月には消費者物価指数で一二%、概ね一〇%が危険なラインで、そのラインを越えてゐた。物価は上がる一方だとみんなが観念したら、誰も彼もお金は一刻も早く使はうとするでせう。企業家は、出来るだけ多く借金をして、大いに設備を拡大しようと考へる。利口なやつは借金してでもものを買つておかう

とする。かうなつたらインフレには非常な勢いがつく。狂乱物価と言つたときには、十二月・一月・二月の三ヶ月、毎月前月に比べて三・四%と上昇した。前月比だから一年で三六%以上になる。福田蔵相の総需要抑制政策で物価は落着きはじめてと人は言ふが、実は、石油危機によつて収つたのです。これが日本の特別なところだ。石油危機は外部で起こつたのだから自分のせみではない。政府がもう少し利口ならあんなに上がらなくて済んだのだが、政府があわてたからバンバン上昇した。その結果、人々は政府はいよいよ信用できない、頼れないと感じた。そこで「これは恐い」と日本国民は思ふやうになつた。そこで何が始つたかと言ふと、何でもなるべく節約する、紙一枚でも節約するといふケケチ主義が生れ、勿体ないといふ言葉が復活した。紙一枚の節約で自分の家計が助かるとは誰も思はないだらうが、ともかく世を挙げてそのやうな気分になつた。だからインフレは止まつた。総需要抑制政策によつて、すでにインフレが止まるべく「必要不可欠な条件」は成就してゐた。しかし真にインフレを止めたものは、意外にも、狂乱物価をつくり出した石油危機であつたのです。石油危機がなかつたら止まらなかつた。その上田中総理が辞めた。あの人には常にインフレを発散してゐるやうなところがある。お金を無限に持つてゐて、あの人に頼むと何でも出来るといふこと、あるひは列島改造論のやうなものを出すこと、すべてインフレを煽るものですが、そういう気分が止まつた。石油危機と言ひ、田中退陣の契機になつた『文芸春秋』といひ、それに関する外人記者会

見と言ひ、まさに天佑と言ふべきでせう。

みんなが紙一枚でも、勿体ないから無駄には使はないといふ気分になった以上、インフレは止まらないはずがない。その気分が崩れるまで絶対に物価は上がらない。私は二月ごろからその話をしてゐたが、誰も聞かなかつた。しかしいま八月九日、不況の話をする人はゐてもインフレの話をする人はゐない。ただこれから公共料金等いままで政府の力の及ぶところで出来るだけ抑へて来たものを引き上げるでせう。それで少々の物価は上がる。しかしそれはインフレではなく過去の誤れる政策の訂正であり残務整理なのです。

ところでこのインフレの止まりやうは、政府の手を全く経てゐないでせう。本当の決め手となつたものは、総需要抑制政策ではなくて石油危機だつた。それに勿体ないといふ言葉の復活で対処した日本人の行動なのです。誰が言ふともなくさうなつた。再び挙国一致であつた。日本国民の知的レベルも均一ですが、何はさておき、お隣りさんが気になるのが日本人です。農家は隣りのやり方を見て仕事をするといふのは、例のペンダサンの『日本人とユダヤ人』にも出て来る話ですが、日本人は気が弱く、個性がなく、情ないやうに見えるが、素晴らしい面がその中にある。この物価の止まり方などがそのあらはれです。政府の政策はものを言はない。いくら総需要抑制をやつても、田中さんがゐたら駄目。田中さんの退場ぶりがいかにも日本らしい穏やかなものだつた。あれだけ悪いことをしても、辞めるとなつたら悪口を言はない。は

がゆいやうだが、これが日本人の国民性です。普通の国では恨みと恨みが反撃しあふが、日本人に限ってはパンと切つてしまふことができる。不思議ですね。物価は米価を上げるとか何とかであと二、三%は上がるでせうが、その時点からは真つ平になると思ふ。世界的に見れば奇跡です。それはなぜだといふことに眼が開けば、それが驚きなのです。

△前代未聞の不況と国民性▽

不況は深刻だけれども社会的には格別悲惨な事はない。日本の不況はなぜ起つたか。一年間に生産物の量が実質で一〇%づつも殖えるといふことが、十四年も続いた。十四年間に実質で年に一〇%づつの成長をしてきたといふ驚くべき高度成長でした。それが石油危機で、もう資源はさうは使へないといふことで、ポンと止められた。普通ならここで恐慌になつて当り前。ところが不思議にも恐慌にはならなかつた。高度成長の間は物価も上がつてゐた。池田内閣時代はひどく、佐藤内閣時代はいくらかよく、田中内閣になつたらまた猛然と上がり出した。業界は物価は上がるを見込んで計画を進めてゐた。ところが気がついて見たら、物価はもう上がらない、高く売りたいが、買つてくれないから価格は上げられないといふことになつてしまつた。これが大不況の原因です。いままでは作れ、作れで、いくら作つても余つたら外国へ輸出すればいい、石油は安いし原材料は金さへあればいくらでも買へる。電力もいくらで

も起こせるといふ状態でした。大きくやればコスト・ダウンすることは「規模の経済」に於ける、スケールメリットといふものですが、コスト・ダウンするから競争に勝つ、といふことで、世界の舞台で相手の産業を潰しながら進んで来たのが日本です。そこで相手からの反撥もあつたし、インフレも起つたから、もう止まらざるを得なかつた。さらに公害問題は耐へられなくなつたし、生産の適地もなくなつて来た。労働力も涸渇しつゝあつた。だからこの「規模の経済」の路線は、やめるべきところに來てゐたのだが、自覚してやめるにはまだまだ時間がかかる。ところがありがたいことに、ピシヤリと石油危機が止めてくれたのです。天佑です。

「規模の経済」を地で行つてゐた日本経済が、急にその原理ではもう駄目だ、これからは量を増やしてはいけない、同じ量でもっと儲けるほかない、といふことになつたのです。しかし理屈ではその通りでも、では同じ量でもっと儲けるにはどうしたらいいか、となるとそれがわからないからみんなが困つてゐる。かういふ路線が遮断されたといふ原因による不況、これは前代未聞のことなのです。

不況の時には、政府が金を出して刺激的な政策をとればいいのだが、歳入欠陥で政府には金がない。これまでは経済がどんどん大きくなってゐたから、「自然増収」といふものを満喫してきたが、もうさうはいかない。そこで赤字国債の発行が考へられる。私は赤字国債論者ですが、下手に発行すると害がある。だから私は、不況は急には直らない、しかし時間が経つたら

自然に忘れるだらう、さう覚悟せよと主張してゐるのです。いまの不況は苦しくてたまらないといふやうなものではない。失業が九十万人といふことだが、日本のどこを見ても、失業者がウロウロしてゐるからに陰惨だといふ光景にはお目にかかれないうせう。結構いい暮しをしてゐる。人並につらさが戻つてきた、浮かれてはゐられない、といふことになつただけだ。日本の失業は外国の標準から見ればゼロです。前代未聞の不況に陥りながら、なぜさういふ穏やかな調子で済んでゐるのだらうか。それは世界独特のことをやつてゐるからです。すなはち大企業は過剰労働を抱へてゐるから首を切らない。新聞に大減産をするといふ記事があるから、人員はどうするのかと思つて読んでいくと、人員は配置転換すると書いてある。依然として雇つてゐるわけです。時間外勤務とか臨時雇ひとかはなくなつた。だから減収にはならうが、首を切らないから大したことはない。その代り過剰労働を抱へ、仕事がないのに給料を払つてゐるのだから赤字になる。いまは黒字の企業は寥々たるものです。ではその赤字の企業はなぜ持ちこたへてゐるかといふと、銀行が金を貸すからです。外国では万事理屈でやつて行くから、赤字のところを金を貸す馬鹿な銀行はゐない。フォルクスワーゲンは二万五〇〇〇人の首を切つたといふが、ドイツの不況が日本より深刻だといふことではない。ドイツだつたら過剰労働を抱へて給料を払ふ社長は失格です。ところが日本ではお互ひさまだとか何とか理屈に合はないことを言ひながら元通りでやつてゐる。当人にもよくわからず説明も出来な

い。困つてゐると言ひながらそれをやつてゐる。それが日本では大失業が出ず、陰惨な状態にならない要因なのです。だから、外人さんが目が醒めてゐるなら、この日本の状態を全く不思議だと言つて驚いてくれていい。

ではかういふ日本の現状の陰に一体何があるかといふと、日本の国民性があるわけです。そこにはまた、天佑の連続だ、といふこともある。フォード大統領が来日したタイミングなんて実に素晴らしい。フォードが来るといふことで、田中退陣が先に延びた。田中金脈でギョアギョア言つてゐたのが、フォード来日のための政治休戦で静まり、その後で代つたから、悪口を言ひ合ふといふことが減つた。さらに特筆すべきことは宮中で天皇陛下が宴を張られた。テレビを通して日本国民が初めて宮中の様子を拝見することが出来た。陛下は実に長いお言葉をお読みになりましたが、まじめで誠実そのものでやつてをられた。何のけ、れんもないのだが、フォード大統領と比べて、格が違ふとみんなが思った。狂乱物価はどうなるのか、金脈で総理が退陣するらしいが、あと日本はどうなるのか。そんな時に日本らしさが浮び上がった。言葉では言はないが、日本はそれに従つて動いてゐるといふことになつた。ああいふふう^に新しい宮殿をテレビ放送できるやうに作つた人は先見の明のある偉い人ですね。世の中の動きはさういふ妙なところにあるわけなんで、経済学者が数字ばかり挙げて不況がどうなるかなんて言つてゐるところにありはしない。

彼らの気のつかないところで事は進行してゐることを、いまここで知って欲しい。日本国は現実にそれをやつてゐるのです。日本のマスコミは日本の悪いところを論^{あけつ}ふのがご趣味のやうだから、いいところは出てこないが、逐次いいところは展開してゐる。田中内閣の更迭、あるひはインフレの終熄と、続いて起つた大不況に日本が耐へてゐるといふ、その姿を見ただけで十分だと思ふのです。これらの経過の中に世界が驚くはずのものが含まれてゐるのだが、残念ながら人々はまだ気がついてゐない。日本人すら気づかないのだから仕方がないが、なぜ日本はそのやうに経過したのか。それは大和民族のユニークな性格によるといふのが私の解釈です。

△政治改革の可能性▽

これからの日本はやうやく永年の懸案である政治改



（木内先生をかこんで）

革の道に進むことになるでせう。スラスラといくかどうか。私は五一%ぐらゐるの可能性で本當の政治改革ができると見てゐるが、そこでは日本のユニークな性格が一層鮮明になると思ふ。いまの日本で欲しいものは、日本らしい政治です。議會制民主主義は、英米独仏ともみんな駄目です。たとへばアメリカの議會制民主主義はニクソンを生んだ。日本の議會制民主主義も駄目だ。ではどうしたらいいか。別に議會制民主主義をやめなくてもいいが、大きな改良を持ち込むことがこれからの仕事でせう。私はその改良案を福田副総理を頭に描きながら書いてゐます。それは次のやうなことです。すなはち三木さんに代つて総理に選ばれた者は、すぐに解散して民意を問ふといふやり方はやめた方がいい。解散はするが、その前に自分の政治姿勢と當面の重要課題十ヶ条、それをどう解決するかの大綱をテレビあるひは書きもので國民に説明する。この説明には四ヶ月はかかるだらう。世論調査方式で國民がわかつたかどうかを調べながら行くには、四ヶ月はどうしてもいる。ある程度の理解が進んだところで「みなさんはかういふ政治をして欲しいですか」と言つて聞くのが総選挙です。これまでは新総理が誕生すると、その人は何をどう考へてゐるか、全然言はせないで、信任するかどうかを國民に問ふて来た。外交や内政の重要課題とその解決の方途を明らかにしないで信任するも何もないではないか。一度の施政方針演説ぐらゐで國民にわかるはずがない。やはり四ヶ月はかかるでせう。さらにもうひとつ大事なのは新総理の言ふことを信用するかどうかを聞くだけでなく、他の各

政党も同じやうに、いまの日本、いまの世界を何と見て何が重要だと考へてゐるかを明らかにする。そうした上でそれらを並べて、その中のどれを選ぶかが総選挙です。野党連合でくるのならそれでもいいが要するに新総理は、大体半年ぐらゐ先に選挙をしませう、説明は明日からしますと言へばいい。これは総理ひとりの決心で出来ることです。かうなると日本の議会制民主主義は俄然として変はる。これまで代議士は地方の選挙民に阿らうと思つて弁論をやつて来たが、こんどは新総理の代弁をすれば済む。橋を架けるとか、鉄道を敷くといふやうな地方の利益に迎合することを言ふ余地はない。従つて自然、いままでのやうな金権政治ではなくなると思ひます。さういふことが五一%の可能性でパツと実現するであらうものが日本国である。私は思つてゐるのですが、これが今後日本が世界のために用意してゐるサブライズなのです。この他にも日本は世界のためにいろいろとサブライズを用意してゐるはずだから、いづれ近いうちに逐次展開していくでせう。公害の解消とか人口の地方分散とかいろいろあります。

その他に日本が世界を驚かすべきであらうものは経済学です。日本の経済学も病氣になつてゐるんだが、日本人は学問に頼らずに直観で動いて来たから害は少なかつた。その直観でうまくいった事実を分析すれば新しい学問が成立つと思ふ。なぜかうなるのだらうといふことがわかれば、日本には極めて容易に新しいタイプの経済学が誕生するのです。これが世界を驚かすだらうと思ふのです。その時にアメリカがまだインフレと不況に手を焼いてゐたら、それは学

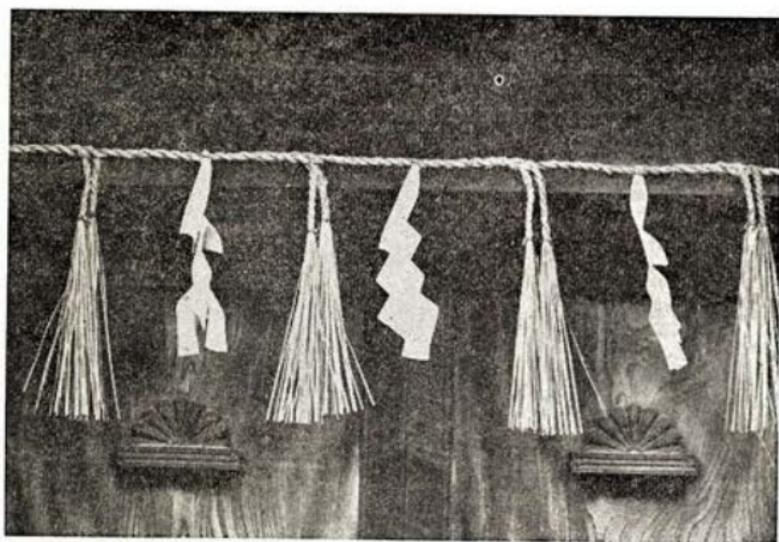
問が違ってゐるからだ」と静かに教へてやればいい。威張る必要も人を押し除ける必要も全然ないので。世界の秩序には、安全保障や文化交流の面もあるが、主に経済秩序です。その経済秩序において、決して人を押し除けない、人のコストで自分がよくなるうとしないで、みんながそれぞれ最高の能力を発揮できるといふやうな世界秩序の思想が、日本から自然に出て来る運命にあると私は思つてゐます。それはG A T TやI M F体制を超えるはずです。

これだけ出揃つたら無論世界は驚くでせうが、いまの時点で驚いて欲しい。どうも彼らの感受性が、直観力がそれほど鋭くない。日本はまだまだ駄目だと思つてゐるんでせう。インフレすら止まつてゐないと思つてゐるのですから。しかしもし私が言ったやうになつてゆけばほんとうに世界は目を見張る、そんなことになるだらうと思ふのです。

現代の病根

——見えざるタブーについて——

文芸評論家 福田恆存



言葉の乱れ
タブーの意味
現代のタブー
タブーに近づく方法
―質疑応答―

言葉の乱れ

本日は「現代の病根——見えざるタブーについて——」といふ題でお話し申し上げたいと思つてをりますが、最初にタブーといふのは何であるかについてお話しして、それからそのタブーに対して我々はどういふふうに対処すべきかをお話ししてみたいと思ひます。元來、タブーといふ言葉は、普通「禁忌」と訳してをります。禁忌忌む、あるひは忌まはしいものを禁ずるといふ意味ですが、禁忌忌むといふのが正しい意味だと思ひます。最初どういふわけでさういふ訳ができたかはわかりませんが、元來日本語では禁忌といふ言葉は使はれてゐません。普通喋るときにはタブーと言つてをりますが、タブーといふのは一体何なのかわからずにタブー、タブーと言つてゐるのが大部分だと思ひます。

話は少しタブーの問題からそれますが、今日では言葉がわからないままに平気で使はれてゐることが非常に多い。私はあらゆる機会に言葉といふものをいちいち自分で意識し、吟味して使はなくてはいけないといふことを言つてきましたが、そのことをタブーの意味を申しあげる前に少しばかりお話ししておきます。

例へば「民主主義」といふ言葉ですが、これにはいろんな広い解釈があります。しかし、それに

は自づと限界があつて、これはあくまで政治制度に対して言つてゐるのであり、殊に今日では議會制民主主義といふ形について言つてゐるわけです。ところがこれを主権在民といふ意味で言ひだしたら、これはもうをかきな話で、一人一人が主権を持つてゐるといふことになる、主権といふのは統治権、支配権でありますから、治める人間は一億人だけれども、治められる人間は一体どこにゐるのかといふことになつてしまふ。デモクラシーの、デモは「人民」で、クラシーは「政治」ですから、これを人民の政治といふことで主権在民といふふうにならずして考へたからかうなつたので、ここにも言葉が曖昧になつて行く根源があるわけです。さらに民主主義といふのは話し合ひだといふことになつてゐる。ところが私の考へでいふと議會制民主主義といふのは、いくら話し合ひをやつても通じない場合に決をとつて多数のものの意見をとるといふことであつて、お互ひに通じないときにいつまでも話し合つてゐたら議會は空転してしまひます。だから決をとるので、ところが日本ではこんな時には必ず野党側が審議拒否といふ手段を使ふ。そこで仕様がなから与党が単独採決をやりますと、これはけしからん、少数者の意見を尊重しろと新聞は言ふ。だが少数者の意見は尊重するけれども、尊重した上で多数側に軍配があがるのが民主主義の原理であります。従つて野党側が審議拒否をといふのは、国民が彼らに委託した審議権を拒否したといふことです。従つて野党側が審議拒否をしたわけです。ですから当然非難は彼らに向けられるべきなのですが、それには向けられない。そして民



主義は話し合ひだといふ解釈だけがまかり通ってしまふと、どうにもならなくなってくるわけです。このやうに民主主義といふ言葉自体が曖昧に、あるひは勝手に使はれてゐるといふのが今日の日本の現状です。

「平和」といふ言葉もさうであります。これはあくまで政治概念であつて、この言葉の定義は、世界的にも最も権威のあるOED（オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリ）をお引きになればわかりますが、これは戦争のない状態、あるひは交戦してゐた二国もしくは数か国が戦争を止めたことを意味する、あるひは平和条約、戦争の最後に結ばれる平和条約を意味するといふことはでてをりますが、道徳的な意味で、人が相和するといふ意味では絶対に使はれてをりません。ところが日本では、この政治概念にすぎない平和がいまでは道徳概念のやうに使はれ出してき

てしまつてゐる。みんなさういふふうに使つてゐる。今お話しした民主主義や平和に限らず、抽象的な言葉を使ふときにはよほど言葉を吟味しないと両者の間で使つてゐる意味に違ひがあるといふことがわからない。そこでタブーであります、この言葉もみんな使つてゐるのですが、この言葉を考へるにはまずタブーといふのはどういふ意味なのか、その定義を考へておかなければならないと思ひます。

タブーの意味

タブーといふのは元來ポリネシア語でありまして、タブーは *tabu* ですが「タ」といふのは英語で言へばマーク、あいつをマークしろとかいふマークです。「ブー」といふのはエクスイーディンググリーといふこと、特別にといふ意味です。特別に注意しなければならぬもの、特別に気をつけなくてはならないものといふのがタブーの元來の意味であります。タブーには固有のタブー、あるいは自然に発生したタブーと、人為的なタブーの二種類に大別できますが、いずれの場合にも使はれるのは、軽々しく近づけないものといふことで、うっかり近づくと超自然の罰があたる。さういふものがタブーなのです。つまり軽々しく近づけない超自然的なものといふふうに定義したらいいと思ひます。

このタブーには一般の人間は近づけない。しかし、ある方法を会得してそれに近づける人間があるわけです。それは原始社会や未開社会、今日の日本でもある地方へ行けば残ってゐますが、たとへば恐山おそれやまの巫子みことかいふものがさうです。さういふ人たちは、一般の人に禁じられてゐるものにも超自然の怒りに触れずに近づき、その神なり超自然の心を知らうといふ役割を演ずるわけです。このやうに、それに近づくと罰があたるといふのはあくまで自然発生的なタブーであります。一方人為的なタブーとは王様とか酋長、あるひは聖職者、さういふ人たちが一般人に課したタブーをいふのです。その人たちが一つの拘束の戒めともいふべきものとか、ある時間内はかういふことをしてはならないとかいふタブーが課せられるわけです。さういふタブーといふのは、王様とか酋長とかその共同体のボスだけが持つてゐるのです。さらにこのタブーから派生してくることですが、その王様なら王様の着たもの、王様の食べ残したものの、これがタブーになるのです。さういふものは神聖化されて、それをいただくことのできる資格は王様が決めて、功績のあったものにそれを与へるのです。これはタブーの派生的なものです。今度は人民たちにタブーを課する人にもまたタブーといふものがある。たとへば王様は一人森の中に住んでゐなければならぬとか、起きてゐるときでも眠るときでも玉座から離れてはいけぬとか、また女性に触れることができないとか、さういふタブーがあるのです。

もしそのタブーを犯すと、たとへば部落の人間が漁に出てゐると嵐がおこつて船が沈んでしまふやうに考へられてゐる。だから王様はそのタブーを破らないやうに氣をつける。部族のためにもさういふタブーを自分で守らなければならぬといふことになつてゐる。同様に部下の者も、たとへば未開社会で最初にできた木の実、王様より先に食べてはいけない、それが一種のタブーになつてゐるわけです。このやうなものは部族なりあるひはもっと大きな共同体なりのポストに課せられたタブーですが、もう一つ多いのは女性に課せられたタブーです。

女性といふものは特別視される。女性であるが故に永遠にそのタブーから抜け出せないといふ場合もありますし、たとへば、妊娠中の女性には近づけない、夫といへども近づけないといふタブーがある。さらに生理時期の女性には近づけないといふタブーもある。しかしかういふのは、ただ単なる迷信として一蹴できないのです。もつとも、蔽格でありすぎるといふ場合はありますが、やはり科学的な根拠があつたり道徳的な根拠があつたりするのです。やはり妊娠中の女性とか、生理期の女性には近づかないほうがいいのであつて、これは科学的にもさういへるだらうと思ふのです。それが少し度をはざると、未開社会では女性は生理のときに隔離される。しかしこれも必ずしも度をはざれずともいへない。いくらタブーを課しても夫婦の間でそのタブーを破るかもしれない。怪しいものだといふことで隔離する。隔離しておけば、それに近づけば見つかつてしまふわけですから、隔離することもやっぱり必要性があるわけです。

ただその期間内に女性が使った器だとか何だとか、さういふものはけがららしいものとして焼却されるといふことになる、これは科学的にも道徳的にも根拠はあまりないといへます。それからもう一つ女性に課されたタブーに、親戚の中の男性を見てはいけないといふのがある。これは道徳的な一つの必要性からきた、ある意味で合理的なこととせう。なぜなら今日のやうにかう広くもなく、男女のつきあひも自由ではない未開社会では、近親相姦といふものが起きる。その危険を防ぐためにお嫁さんは亭主の父親の顔を見ないやうにする。これはやっぱり必然性といふものがあるのです。いづれにせよ、このタブーを破ると、自分自身及び自分が属する共同体に何か非常に害があるといふことが、タブーをみんなが恐れた理由なのです。

現代のタブー

それでは、今日さういふ意味でタブーとは何かと言ふことが問題になってきます。現代は非常に自由の世界である。言論の自由があり、ポルノまでかまはないといふことになってゐる。しかし、これほど自由な現代でありながら、タブー、それも見えざるタブーといふものがあるのではないかと私は思つてゐるのです。原始社会においてははっきりタブーを打ち出します。だから、そこにあるのは見えざるタブーではなく、はっきり目に見えてゐるタブーであります。

今日はタブーを全部捨てた、あるいはタブーはいけないといふ。これは自由世界あるひは自由主義といふものの建前であります。だから見えるタブーはないわけです。何を言ってもいいし、何をしてもいいといふ形になってゐる。せいぜい人の迷惑にならない程度にといふことが注としてついてゐる位です。したがって、現代は何をしてもいい、何を言ってもいいはずなのですが、その実、未開社会よりかへって今日の方がタブーは多くなつてゐると私は思ひます。

最近パレスチナ・ゲリラの人質事件が起きました。犯人達はマレーシアのクアラルンプールの領事をはじめ数十人を人質にして、逮捕されてゐる日本の赤軍七人を釈放しろ、そして彼らを飛行機で連れてきて、あとは自分たちの指定するところへ連れて行けといふ要求を出した。私はそのとき「またか」と思つて腹が立つて、すぐにサンケイ新聞に書いたのですが、それはまだ日本政府が日本赤軍を釈放する決断を出さない前でした。そのとき私は、「どうせ日本政府は釈放するに決つてゐる、しかし、断固としてさういふことはやるな」といふことを書いたのです。そのとき私が考へたことは、たとへば浅間山荘のときにもさうだったのですが、なんでも人質ごとと一緒に殺してしまはないかといふことでした。かういふ時には人命尊重といふのが必ず出てくる。しかし人命尊重といふことについて私は非常に疑問に思つてをりまして、そのことを短い紙面で意を尽せませんでした。人命尊重といふのは今日のタ

ブーです。「人命なんかかまはない」とひと言いつたら大変なことになる。さっきの民主主義も平和もタブーであります。しかし、世の中に絶対的なものはあり得ないのでですから、私たちにはあらゆるものに対して疑問を提出する権限はあるはずですよ。だからたとへば、民主主義といふのはいいところもあるが、かういふ欠点があるじゃないかと言つてもかまはないわけです。それから言論の自由についても野放図にやつてはいけなひではないかと注意を与へる自由はあるはずですよ。さうしないと言論の自由は成り立たないのであつて、言論の自由といふものがある以上、「言論の自由を否定する言論の自由」も許さなければならぬわけですよ。ところが言論の自由といふともうすべてが自由であるかのやうに思つて、このやうな言論は押さへられてしまつて誰もそのことに気がつかない。つまりそこには目に見えないタブーがある。だがそのことがわからなくなつてゐる。だから諸君は、いまの世の中で目に見えないタブーといふのを見つけるのに、虎視眈々としてゐてよろしいのです。いまの人命尊重についても、一度は「なぜ人命は尊いのか」と極端に考へたほうがいいと思ひます。人命尊重といふのはなぜいいのか、なぜ人を殺してはいけないのかと一応考へたほうがいいと思ふのです。

今の世の中では人命尊重といふことから、殺人が一番悪い犯罪になつてゐますが、私は人質犯罪は、殺人以上に凶悪な犯罪であると思ふのです。つまり人の弱みにつけこんで、人質をとつてお前がいふことを聞かなければこいつを殺すぞといふ、これくらい悪い犯罪はない。もし

かれらの要求をいれて人質の命を助けるために、明らかに犯罪者として逮捕してゐる人間を釈放するといふことになれば、国家、政府の権力がかれらよりも弱いといふことを立証することになるのです。これができればどんな犯罪でもできる。かうして日本の国家全体を否定するやうなことを要求しても、人質を持ってさへるればできるのだといふ觀念を人々に植ゑつけてしまふ。これは実に大きな問題だと思ふのです。五十人の命を助けるために、一億人の人間を危険に陥入れる可能性を与へる。そんな場合には、一億人に比べれば五十人なんかたかがしれてゐるのだから殺してしまへばいい、といふのが私の考へ方です。これは非常に冷酷に聞こえるかもしれませんが、決してさうではないと私は思ふのです。もっともヨーロッパならこれをやりさうですが、この頃では自由世界も非常に弱くなつてまゐりまして、さうはやれないやうです。この数年の内の唯一の例外は西独におけるオリンピック選手です。あのとき、西独は人質にされたオリンピック選手たちにかまはずにアラブ・ゲリラを射殺する行爲に出たわけです。イスラエルがやっぱり小学生を相手に同じやうなことをやりました。では小学生やオリンピックの選手ならかまはないが、相手が大使とか領事だとかいふと恐がつてしまふといふことは、流行の言葉を使ふとこんな差別は許されなはずです。人命といふなら、小学生の命もオリンピック選手の命も人命なのであつて、大使や領事だけが特別の人命を持つてゐるわけではない。しかも大使や領事ともなれば国家間のいろいろな問題を考へる責任と自覚を持たなければなら

ないわけで、自分の身を犠牲にしてもかまはないくらい、の自覚を持たなければならぬ。私がさういふことを書けばみんな冷酷だと思ふかもしれないが、じゃあ読者諸君はどうか、と言って私はその新聞に次のやうな意味のことを書いたのです。みんなテレビや何かで見てゐるだらうが、岡場所の女が悪人に捕まへられて短刀を突きつけられてゐる。それを高橋英樹みたいなのが救はうとすると、悪人が、お前がもし俺に向つて切りつけてくればこの女を殺すぞといふときには、大抵その女は黄色い声をはりあげて、私なんか死んでいいからやうてちゃうだといふのです。その点岡場所の女のほうが現代の政治家よりもはるかに自分の命を捨てる勇氣を持つてゐる。だから、見てゐるお客は感動、といふと大げさですが、少なくともその女性に好意を持つたらうといふふうに書いたのです。するとその日に、ある新聞社から電話がかかってくる、「いままでさういふことを考へてゐた人もあるけれども、あんな乱暴なことを書いたのはあんた一人だ、だからひとつ意見を聞きたい」といつてきました。私はそんなことを書いて別に自分の勇氣を自慢するわけではないのですが、さういふことを言ふのがタブーになつてゐるのですね。先ほどの人命尊重といふことですが、人命が尊いといふのなら、一体何故に人命が尊いのかといふことを十分に納得させなければならぬ。人命が尊いといふのは、人間が、さっきの岡場所の女のやうに「私を殺していいから」といふふうに自己犠牲の精神を發揮する動物だからでせう。人間は豚を食つたり肉を食つたりしてゐますが、人間がほかの動物より

尊いといふのは、人間が他人のためにあるひは共同体のために自己を犠牲にするといふ精神を持ち得る動物だからです。ところが、さういふ場合にさういふことができないのなら、それは人命とみなす必要はないので、それは豚命あるいは牛命とみなしてもよろしい。だからそれは殺してもよろしいといふのが私の考へ方なのです。

しかし、さういふことが言へない、言ひにくいといふのが現代の風潮です。さきほどの民主主義もさうなのですが、「民主主義なんか糞くらへ」といったっていいのです。しかし、さう言ふと「糞くらへとは何ごとだ」と言ふ人が必ずある。どっちのほうが正しいかといふことで言論の自由といふものが成り立つわけですが、民主主義といふことになるのはもう絶対にやっつけてはいけないといふタブーになってゐる。すなはち、ここには言論の自由はないわけでありませう。それからもう一つ例をお話します。さきほどの原稿を書く数日前ですが、広島の大衆の新聞部からインタービューがあつて、八月六日の原爆記念日について意見を聞きたいと言つてきた。それで私は、「馬鹿もいい加減にしろ」といったのです。原爆記念日などといふのは負けの象徴であつて日本人にとっては不名誉なことなのだ。あの当時日本でも原爆をつくらうとしてゐたが、日本人の知能あるひは経済力とかいったものがアメリカよりも劣つてゐて、要するにアメリカの方が先につくつてしまつた。それで原爆を落されたといふことは、日本に於て特権ではなくて屈辱なのであつて、恥づべきことはあんまり大げさにしないほうがよろし

い。ましてそれを記念日にするのではない。記念日にするのならひそかに自分の心の中で、「これからやつつけてやらう」といふことで記念日にするのならいいが、さうじゃなくて「広島から世界に平和を」といふやうな思ひあがった気持は一体何か、原爆を落とされるやうな人間に原爆を止めさせる力がありますか、そんなことは決してありえないと私はその学生にいつたのです。「あれは商売でやってゐるのだから、そんなものは相手にする必要はない、私は平和記念日とか平和とかいふものに興味をもつてゐない。もっと大事なことはたくさんある。第一平和といふのは一体何だ、平和になったらどうなったのだ、平和といふのは戦争がないといふことにすぎないのだ、それよりも大事なことは愛とか信頼とかいふものの回復ではないか、それは戦争とか平和とかいふことと全然次元が違ふもので、戦争のときにも平和のときにもその問題は依然として存在する。むしろ戦争のときにかへって自己犠牲とか愛とか信頼とかいふものが強く発揮されることがある。だからといって、私は戦争のほうが平和よりいいとは言はない。しかし、平和といふこと自体には何の価値もない」といふやうなことを言ふと、その学生はびっくりして、「そんなことはいままで誰も言はなかった」といふ。つまりそんなことを言ふのはタブーになってゐるからであります。

さういふタブーを探し出すともうきりがないと書いてもいいのですが、とにかくいま新聞や学校の教科書に出てゐることは全部タブーだと思つたらいい。さきほど申し上げたやうに、

何々をしてはいけない、何々をしろといふふうな教へなり風潮なりが出て来た場合には必ず疑つてかかつてみたらいいと思ひます。

私は京都産業大学で月に一回教へてゐますが、あるとき学生に、おどしをかけようと思つて侵略戦争といふのはいいのだと言つた。そしていけないと思ふ人は手をあげてみるといふと、何人かバラバラ手をあげました。そこでなぜいけないのかと聞くとよく説明はできないんです。つまり、なぜ侵略してはいけないのか、なぜ人を殺してはいけないのかといふことをはつきりと論理的に答へられる人はいないのです。たとへばドストエフスキーの小説に「罪と罰」といふのがあります。あの中でラスコリニコフはなぜ人を殺してはいけないのかといふ問題にぶつかるわけです。ただラスコリニコフがそのときひとつ弱かつたのは、金貸しの老婆を殺してしまつたことです。つまり、彼はせっかく自分につきつけた疑問を、世の中のために何の役にも立ってゐない、それどころかむしろ害をなしてゐるやうな人間をなぜ殺してはいけないかといふ問題にすりかへてしまつたのです。あの時代にはナポレオニズムといふのがヨーロッパを風靡してゐまして、後進国ロシアにもその頃やうやくそれがはひつてきた。英雄主義、英雄崇拜です。そのナポレオンは、戦争のときに敵ばかりでなく味方も殺した。つまり湖に氷がはりつめてゐて、その上を味方の軍隊が進んで行く。ところが敵軍が向ふからくるとそこに大砲をうち込む、さうすると敵も死ぬが味方も死ぬ、しかし差し引きすると敵の死者のほうが多

い、さういふことでも平気でやったのです。しかも彼は英雄としてあがめ奉られてゐる。彼は平和のときには政治家として立派な業績を残してゐる。ところが、ラスコリニコフに言はせれば、人間には二種類あって、自分のやりたいことをやる、あるひはやれる人間と、常に法律とか道徳とかの前に小さくなって何もできない人間とがある。後者はこれを蚤だといふ。だから人間はナポレオンと蚤の二種類に分かれるのであって、道徳とか宗教とかいふのは、みんな嘘っぱちで、それはただ弱者を押しさへる、つまり蚤を押しさへるためのものにすぎないといふふうには彼は考へたわけです。それが当つてゐるか否かは別問題です。さういふふうにはラスコリニコフは自分に疑問を提出して、俺はナポレオンなのか蚤なのかといふ実験を自分に課したわけです。そして実験の材料として金貸しの老婆をえらんだ。本当ならばラスコリニコフとしては、金貸しの老婆でなくて、もっと善良な人を探して来なくてはいけなかつたわけです。ところが彼は、世の中に害しか与へてゐない人間だと殺してもいいのだといふ気持をおこした。だがそれではナポレオンではないのです。金貸しの老婆を選んだといふことは、もうナポレオンでない証拠なのです。そのときはラスコリニコフはそれに気づかなかつた。そこで敗北がすでに始まつてゐるのだけれどもラスコリニコフは気づかなかつた。そこで敗北がまず事ポルフィリーにだんだん問ひつめられていきます。しかも一方で、純粹無垢なソーニヤといふ少女にめぐりあひます。彼女は飲んだくれの親父をはじめその家族の生活を維持するために

自分は身を売ってゐるのですが、非常に信仰が深く、神様はそれをお許し下さるだらう、あるひは罰せられても仕方がないといふふうに考へてゐる純粋な女性なのです。それでラスコリニコフは彼女に自分の思想を話すのです。どうしてあんなやつを殺して悪いのかといふと、ソーニヤはとんでもないことだ、あなたは恐ろしいことを考へてゐる、人間の思ひあがりもはなはだしいと言つて自分を勧める。そして、四つ辻に行つて大地に接吻して、神、人類に詫び、その足で警察に行つて自首しろといふ。最後にラスコリニコフはさうするのです。そしてシペリヤ送りになり、ソーニヤは一緒についていろいろな面倒をみて、その間にラスコリニコフは改悛するといふのが「罪と罰」のあらすぢであります。

このやうにラスコリニコフはなぜ人を殺してはいけないのかと考へたわけですが、さういふ意味で言へば、私たちはなぜ侵略戦争がいけないのかと考へてもいいわけです。戦争といふのはみんな侵略戦争ではないかといふことを言つてもかまはないはずですが、ただやり方が悪かつたとか、勝つ力がないのにやつたとかいふことはあるかもしれないが、といつても私はこの大東亜戦争や日華事変を肯定してゐるのではないのです。とにかく肯定するにしろ否定するにしろ、戦争にはある一つの空気があつて、戦前には歓呼の声に送られてといふふうには騒いでゐたのに、戦後は侵略戦争はもういけない、日本は間違つたといふやうな空気にパツと染まつてしまつて、人々はそれに対して一つも疑ひを抱かない。すなはち戦前にも戦後にもタブーはある

のに、誰一人それに対して「なぜだ」といって開き直ることをしない。さらに戦前と戦後の違ひは、戦後のタブーは見えないといふことです。隠れみのを着たタブーである、忍者タブーであります。端的にいへばタブーであるといふ顔をしてゐないのです。だからそれはあたかも真理であり正義であるかのやうな顔をしてゐる。

私はいろんな評論を書いてゐますが、それはタブーをぶち壊すためにやってゐるだけの話です。政治家及び政治学者といふ人たちはみんな業界の約束がありまして、うっかりタブーを破ると業界からつまはじきされて食へなくなつてしまふ。しかし私は野次馬で外部の人間だから一番やりやすいといふだけのことにはすぎない。だからタブーをやつつける。学生諸君なんていふのは殊に立場上拘束がないのですから、もっとタブー破りをやつたらいいと思ひます。しかし注意しなければいけないのは、ただタブーはぶち壊してしまへばいいのだといふことではないといふことです。これには方法がある。タブーに近づくには慎重にしなければならぬのです。そこで次にこの点に関して、私の理解してゐる限りで孔子のことについてお話ししたいと思います。

タブーに近づく方法

孔子はご承知のやうに賢人、哲人ですが、同時にただ単に道徳を説いただけではなく

て、国は道徳をもつて治めなくてはならぬといふ意味で政治に近づいた人です。だから方々の王侯、君主に近づいて人の道を説き、政治の道を説いたわけです。その孔子はどういふ家柄かといふと禮の家柄です。禮の家柄といふのは、たとへば中臣鎌足が神祇伯で日本の神祇の家柄であるのと似たやうな役割なのです。この禮といふのは抽象的に解釈してはいけないのであつて、ここに諸橋さんの「大漢和辞典」にそれがどのやうに出てゐるか調べてまゐりましたので大体のところを申しあげます。まず禮とは「履み行ふべき法」とあり、それからそれをなほ細かく注釈して、「人と交り、世と接し、鬼神につかへて、理にかなひ、生をとげるために守るべき儀法」とあり、更にそれを説明して、「外形を修めて内心を正す」のがその特色とあります。第二の意味として、「威儀。坐作進退の一つ一つの定め」といふのがあります。それから五に「儀式。敬意を表する式」、六には「供へ物」神への供へ物といふのがあります。八に「貴賤上下の別」、九に「国家の法則」といふのがあります。一体この禮といふ字はどうしてできてるかといふと、神、しめす扁です、ね、神事を表はす「示す」と「豊」とが合したもので、「豊」は神前に供へる器の総名です。「豆」も器で、豆とその上部の象形の部分との合字が「豊」です。だから禮といふのは人に真心を尽すといふやうな抽象的なことではなくてもっと具体的な姿が示されてゐるわけで、孔子が禮の家柄であるといふことは、その儀式、作法など具体的なことを全部知つてゐる、その専門家だといふことなのです。

たとへば日照りが続くと、皇帝なり王様なりが、現在北京には清朝の天壇といふのが残つてをりますが、天壇に行つて雨が降るやうに祈るわけです。それは、日照りがこんなに続くのは天が何か人間に警告を發してゐるのではないか、あるひは人間が何か悪いことをしたのでないかと、天の心を聞かうとするわけです。そして許しを乞ふて雨を降らしてもらふやうにする。そのときにそこにお供へをしますが、その供へ物を入れる器は、酒を入れるものとか、穀物を入れるものとかいろいろあつて、それをどこへどういふ順序に並べるかといふことを知つてゐなければいけないのです。もう一つは、その場合に皇帝なら皇帝を中心にして、どういふ順序でみんなが並ぶか、そしてその式次第、どういふふうに進めてどうやっていくかといふこと、さういふことの専門が孔子の家柄なのです。だから禮といふのは、お前は無作法だとか禮儀がないなどといふ、そんな単純なものではなく、国家の法制といふやうなものにもつながつてくるのです。それから孔子はみづから神を語らずと申しますが、孔子は鬼神を信じてゐなかつたわけではない、むしろそれを信じた上で鬼神といふものは語るべきものではないといふので語らなかつた。だから論語には、鬼神についての言葉といふのはないのです。禮の大家であるといふことは鬼神といふものを前提としなければ出てこないものであつて、だから禮の第一の意味に「人と交り、世と接し、鬼神につかへて、理にかなひ、生をとげるために守るべき儀式」といふのがあるわけです。すなはち、鬼神を前提として、人の窺ひ知れないもの、人間の心で

は窺ひ知れない超絶者といふものの存在をはっきり意識して、そしてその心を窺ってタブーを解いてもらふといふのが、禮の最も重要な仕事なのです。それはタブーに近づく方法なのです。現代においてもタブーは存在してゐるので、禮の問題とてらしあはせてそれに近づく方法といふものを考へなければいけないのです。

天ばかりでなく実は人といふものもやはり窺ひしれないものです。だからそれに近づくにはやっぱり禮が必要なのです。いかに相手を信頼してゐても、その人がどんな気持を持つてゐるか、自分の行動に対して相手はどういふ気持ちになつてゐるかを考へ、自分はその人全体を理解しつくしたといふふうに思ひあがつてはならないといふこと、これが前提になければいけないのです。それは天意と同じなのです。これは私がよくひく例で、オスカー・ワイルドの作品の中にある話ですが、ある若い婦人がウィンダムイヤ夫人といふ貴婦人の催したパーティーで、声をはづませながら「私たちは理解し合つたので婚約しました」と言ふと、ウィンダムイヤ夫人が「あらとんでもない、理解といふのは結婚の最大の障害よ」と言つたので、その若い婦人は啞然としてしまつたといふのです。オスカー・ワイルドは、さういふウィットの名人ですが、これはウィットにしても非常に真実をうがつてゐると思ふ。といふのは、よく理解したといふけれども、それは自分が理解したやうに相手を理解してゐるだけなのです。オスカー・ワイルドの言はうとしたことはどういふことかと言へば、お互ひに理解したと言つて相手を自分の理

解力の中に閉ぢこめてしまふことの危険です。そのやうな理解のしかたをしてゐるから、相手が自分の理解してゐる以外の行動をしようとそれを裏切りだと思ふのです。それはただ自分が相手を十分理解してゐなかつただけなのですが、それを「理解、理解」といって、相手を自分の理解力の圈内に閉ぢこめてしまふことは実は、相手に対する非常な無礼であり、抑制なのです。だからオスカー・ワイルドの言つたことは、必ずしも単なる冗談や機知ではないのです。他人といふものは理解し難いものである、みんなが自分のわかつてゐないものを持つてゐるのだといふことを承知してゐなければいけないのです。さういふ他人に近づくためにはやっぱり礼儀がいる。さらに言葉の上では敬語がいるのです。敬語といへば、それが使へないのがインテリの証拠だと思つてゐる人間も多いし、若い男性では敬語を使ふことは若さの沽券にかかはると思つてゐる人もあるやうですが、敬語といふのも、やはり未知なるものに接近するための一つの技術なのです。よく日本語を論ずる人たちは日本は敬語が多すぎるといつて、それはタテ社会で上下の差別がきびしかったからだといふけれども、そんなことはないのであつて、それは親疎の關係も充分表はすのです。だからときには、身分の上の者が下の者に敬語を使ふことがあります。それは相手を自分の理解力でもつてすっかりわかつたといふふうになめきつてゐないといふことです。これが敬語といふものなのです。

それからもう一つ申しあげたいのは、タブーに近づく方法とは、何も堅苦しい礼儀のみでは

ないのであって、ウィットとかヒューモアとかいふものもタブーを解く手段なのです。この点に關して言へば、日本人は、少なくとも明治以後の日本人はそれが足りなすぎるのではないかと思ひます。全部が正義派になつてしまつてゐる。自分がみんな正しいのだといふふうに、正義の士、憂国の士になつてゐて、ヒューモアが一つもない。私はさういふ堅苦しい憂へ方といふのは、かへつて逆効果になりはしないかといふ危懼を抱くのです。と同時にさういふのをやつつける人間にもヒューモアがない。これは現代の日本人の欠陥だと思ひます。つまり笑ひは不真面目なものであって、眉を吊りあげなければ真理は語れないといふやうになつてゐるが、それが一体いいことなのかは、大いに疑問があります。ヒューモアといふのは、元來は粘液質とか多血質とかいふやうな人間を体液によつて四つに分けたものから出て来たのです。エリザベス女王時代にベン・ジョンソンが、コメディオ・ヒューモアズといふものを書いてゐますが、これは「氣質喜劇」といふことなのです。ヒューモアといふのはこの場合「氣質」なのです。それはなぜかといふと、いま言ひましたやうに多血質とか粘液質とかいふのは一つの氣質なのであって、それはどうしようもない。本來の人間の性格としての氣質、たとへば非常に神経質だとかあるひは凶々しいとかいふ氣質、さういふ性格や氣質から生ずる喜劇を書いてゐるのです。元來さういふ氣質を意味したヒューモアといふものは、結局は自分の場合も他人の場合もなかなか思ふにまかせない、どうにもならないもので、それを客観視するところからヒ

ユーモアが出て来るのです。所詮人間といふのはどうにもならないものだといふ諦め、それを暖かく見てゐる気持、そこからヒューモアが出て来るのです。イギリスのディッケンズは非常な貧民階級を書いてゐますが、さういふ場合にも資本家をむごく、あるひ許せないやうな形では決して書いてゐないし、さういふ人間の中にも暖かい同情を注いでゐる。それから貧民の中の弱点も書いてゐます。だからさういふ人間が貧しい中にも一種の楽しみを見つけて生きて行く姿も書かれてゐる。さういふところからヒューモアが出て来るのです。諸君は若い世代としてヒューモアの大切さといふことに目覚め、まじめな学問とか真理の追求と同時に人間性としてのヒューモアといふものを大事にしてください。それは現代のタブーに近づく有効な手段であり、技術であると私は思ふのです。

《質 疑 応 答》

（問）現代のタブーを見えなくしてゐる原因はどこにあるのでせうか。

（答）それは直接的には敗戦といふことがあって、その波にのった人達が一つの風潮をつくりあげてしまったといふことがあります。もとを質せば先進国が二つできたことにあると思ひます。先進国に追いつくといふ進歩主義は明治以来ありましたが、その場合考へてゐた先進国

といふのは欧米諸国のことでした。それがロシア革命以後には先進国が二つできてしまったんです。ソ連といふ共産主義の国ができてしまった。そしてマルクス主義によれば、資本主義社会は内部矛盾といふものから社会主義社会、共産主義社会に移行するといふことが定理になって、それがみんなの頭の中にしみこんでゐるわけです。共産主義者でなくてもさういふふうに思ひこんでゐる。たとへば「権力」といふと必ず悪い意味に使はれてゐるが、外国だったらパワーのない政府といふのはだめだといふことになってゐる。ところが日本では、政府は権力を持つてはいけない、権力を行使してはいけないといふやうな風潮がある。さういふのは結局マルクス主義が、目に見えないタブーとして浸透してゐるからです。おそらくみなさんの中にはマルクス主義者は非常に少いだらうと思ひますが、さういふ人たちでも、権力といふ言葉のつかひ方はをか



(左から 木内、福田講師、小田村理事長)

しい、それはマルクス主義からきてゐるのですがそのことがおわかりにならない。権力といふものは悪しきものといふ考へ方とか、政府と国家を混同するとかすべてさうなつてゐるんで、これは戦後いつのまにか徐々にさういふふうになつてきた。そのもとを質すと先進国が二つできて、いづれは資本主義国は社会主義国あるひは共産主義国になるとすれば、結局共産主義びいきにならざるをえない。だから人々が北朝鮮の独裁には平気でゐて、非常に狭い巾ではあるけれども、民主主義体制をとつてゐる朴政権を悪くいひ、批判するといふのは、みんなさういふ考へから出てゐるのです。相手がこわいからとか、軽蔑してゐるからとかいふことではなくて、共産主義国だからひいき目でみるのです。勿論すべてがこれだけで解けるわけではありませんが、それがかなり大きな理由になつてゐるといふふうに思ひます。

(問) ヒューモアとは一体どういふものなのか、もう少し話しをうかがひたいと思ひます。
(答) 大変むづかしい問題ですが、たとへば日本語で「許す」といふ言葉があります。これは「ゆるくす」といふことの「く」が音便で「ゆるうす」になつて、「ゆるす」になつたんです。それからそれと反対の言葉で狭い、「せまし」といふ言葉があります。この言葉は、相手と自分との間柄を狭くするといふことから、敵を攻めるといふことにもなるし、相手に迫るといふ言葉にもなり、それから責任を責めるといふふうにもなります。そこで私の言ふヒューモ

アといふのは、論じてゐる対象、あるひは戦つてゐる相手との間の距離を広くする、ゆるくするといふことなんです。それが許すことになるわけです。それは、何でもいい加減に「寛容と調和」でゆくのだなどといふ意味ではなくて、距離をおくといふことです。自分に対しても他人に対しても、それから論じてゐる対象に対してもいつでも距離をもって眺める。たとへば夏目漱石は、自然主義の連中から余裕派といはれて軽蔑されましたが、漱石の小説観からいへば、人生や社会、それから政治もやはり距離をおいて眺めなければならぬ。漱石にいはせれば、自然主義の人間はそれを真剣勝負で自ら体験してゐなければ文学が書けないといふことになる。かういふ考へ方は、プロレタリア文学にも通じるので、自分が坑夫や人夫、あるひはプロレタリアートの生活をしなければプロ文学は書けないといふふうになつてしまふ。しかし、これは誤りで、やはり漱石のやうに距離をもつて対象を眺めるといふ考へ方が正しいのだと思ひます。みんなが苦しんでゐることもそばから見れば喜劇になるといふことがあります。だからすべてがさうだとは言ひませんが、それが私はヒューモアのもとだと思ひます。だから自分が賢明であり、まじめであり、そしてある線に向かつて努力するのはいいけれども、それを眺めてゐる自分といふものはキリキリ舞ひしない、つまり距離をもつといふことは実に大事なことなんです。それは、人間と人間との付合ひの潤滑油の役割をするのです。



青年研究発表

学問のあり方について思ふこと

大阪大学大学院博士課程 東中野 修



カット・正行公使用 馬鞍

ただ今御紹介いただきました東中野でございます。私は大学に入学した年に初めてこの合宿教室に参加いたしました。その後一緒に学んでいきながらも自分にはものに感じる力がないのではないかと思つてゐた学生時代でしたが、ただ、大学三年生の時、この合宿教室で、元侍従次長の木下道雄先生が今上陛下が国民に接せられるときの御心についてお話し下さったとき、心が昂ぶり眼頭があつくなつて止まらなくなつてしまつたことがあります。もっともこのやうな体験が人生や学問のあり方とどう連つてゐるのか、当時はわかりませんでした。が、今私は、このやうに心が揺り動かされるといふ事が自らの生き方を見定めてゆくことになるし、それが学問の出発点であると思つてゐます。

私がこのやうに気付き始めるきっかけは、夜久正雄先生、山田輝彦先生のお書きになられた『短歌のすすめ』によつて与へられました。この本を手にしましたのは大学を卒業した春の頃で、その頃はこれから一生をかけて追究して悔いしないものは何か、人生にとって最も大事な事は何か、と真剣に考へ始めてゐた時でした。その頃この書物を手にした私は、『短歌のすすめ』を開いて、そこに出て来る短歌を声に出して読むではそれを味はふ、といふ毎日が続きました。中でも「大東亜戦争の戦没学徒の歌」といふ処に収められてゐる、友を恋ふる歌、国の運命を雄々しく担つてゆかうとする雄叫びの歌、これらの歌に私は心をゆさぶられました。歌を読んで私は、歌を詠まれた方のお気持ちに自分も生きようと願ひ始めました。歌を声に出し

て読み、歌に心がゆさぶられますと、自分もまた歌に詠まれてある通りに生きてみようとす
意志と、力が湧いて来るのです。かうして私は『短歌のすすめ』によって、人の真実の思ひに
感応して生きてゆかう、そこにしか真の生きる喜びはない、といふことを学んだ次第でありま
す。

『短歌のすすめ』の末尾には「天皇と天皇の御歌」といふ一章があり、明治天皇、大正天
皇、今上天皇の御歌が一部収録されてゐますが、ここでその中の今上陛下が終戦御決定のさい
の御気持をお詠みになられた御歌を、紹介させていただきたいと思ひます。その御歌は皆さん
がお手元にお持ちの『日本への回帰(第十集)』にも出てゐますので、二八二頁を開いていただ
きたいと思ひます。連作三首の御歌ですが、いづれも陛下が終戦直後にお詠みになられたもの
と伺つてゐます。それでは二度拝唱してみます。

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかにならるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

「爆撃」とは空襲のことであり、なかでも広島、長崎に投下された原爆のことでありませう。

「爆撃にたふれゆく民」とは、爆撃によって家を焼かれ、親兄弟をなくし、さうして倒れてゆ
く幾多の国民のこととせう。特に陛下がここで「たふれし民」ではなくて、「たふれゆく民」



とお詠みになられてゐることに心を留めていただきたいと思ひます。「たふれし民」であれば、離れた処からご覧になってをられるといふ感じがするでせう。しかし、陛下は「たふれゆく民」とお詠みになってをられます。そこから私には、陛下は今、目の前で倒れてゆく国民、そしてこれからも倒れてゆく幾多の国民のことを、わがことのやうにお苦しみになってをられる、戦火の真只中に立たれて国民のことをわがことのやうにお思ひになってをられる、と偲ばれて来るのであります。御自分のすぐ横で国民が倒れてゆく、それを陛下はご覧になってゐて、身を切られ胸をひき裂かれるお思ひでいらっしゃるのです。事実、昭和二十年三月、東京が焼野原になってしまった時に、陛下は焼け跡の御視察をなさっていらっしゃいます。いつ何時空襲があるかも知れないといふ時に、陛下は空襲から御身をかくす場所とてない焼野原を、お回りになられた

のです。すでに陛下は、御自分の身はどうなってもよい、といふ御一念に生きていらつしゃつたと偲ばれます。国民を救ふことができるのであれば御自分の身はどうならうともかまはない、といふ御決心であられた。そのやうな御気持ち、陛下は一首目の最後に、「いくさとめけり身はいかならむとも」とお詠みになってをられるのです。戦争が終結し、国民がこれ以上爆撃にたふれてゆくことがなくなるのであれば、御自分の身などはどうなってもよいと陛下は仰言られてゐるのです。

昭和二十年八月、時の内閣が大東亞戦争の終結をめぐって閣論一致せず、陛下の御裁断を仰ぎました時に、陛下が終戦の御決定を下されましたことは、よく知られてゐる事であります。しかし私には、陛下が終戦の御決定をなされたといふ風に、簡単に片づけてしまつてはならないやうに思へるのです。敗戦国の元首に、何が待つてゐるか、陛下はご存知であられた事でせう。それでも陛下は、自分の身はどうならうと戦争を止めて国民を救はなくてはならないとの強い御決意で、終戦の御決定を下されたのでせう。さう思ふとこの三首の御歌は御辞世の御覚悟でお詠みになつたのではないかと偲ばれて参ります。一首目の最後の「身はいかならむとも」といふ御言葉が、大変な字余りとなつてゐますのは、陛下のやみ難い御気持の、切迫した御表白であられたからでせう。さらにその御気持ちは一首目の御歌には止まり切れず、二首目の御歌にその儘あふれ出てゐます。二首目の冒頭に、陛下は「身はいかになるとも」とお詠み

になられてゐますが、そこまで陛下が御決意なさっていらっしやるのも、「たふれゆく民」のことを、国民ひとりひとりのことを、真にお思ひになつてをられるからでせう。特に「ただ」といふ御言葉に心を留めていただきたいと思ひます。「たふれゆく民」の「民」といふのも、決して私共とかけ離れた存在ではありません。それは私共の両親であり、戦ひが続けばなほも倒れて行つたと思はれる私共の兄弟でもあります。戦ひが終つてゐなかつたら、私の父母はなくなつてゐたかも知れません。私たちの大半は今日のいまがなかつたこととせう。そして今日の日本もなかつたこととせう。陛下に戦ひを止めていただいたお蔭で、私共の父母は救はれたのです。

敗戦からまもない頃、陛下は、「あの戦争のさなかに和平を言ひ出したら大変な内乱になつたらう」と当時の侍従長藤田尚徳氏に語られたさうであります。

今日では歴史に接する場合、現在から過去を見るといふだけのことになつてしまつて、現在の基準で過去を裁くことが大つぴらに行はれてゐますが、逆に過去の方から教へて貰はうといふ気持ちで謙虚に過去を思ひ出してみることがいかに必要であるかを痛感いたします。昭和二十年八月の頃もそんな世の有り様だったのでせう。人々は和平を望んでも、なかなか口にするとは出来ないでをりました。しかし、戦争は陛下に止めていただいたのです。「いくさとめけり」と、陛下は連作三首の御歌のいづれにもお詠みになられてゐます。陛下が自分の身はどう

ならうと戦争は止めると強く御決心なされたその理由は、一首目と二首目では、「民を思ひて」といふ処にありました。しかし三首目では、陛下の御決心の抛り処となつてゐるものが一首目、二首目とは違つてをります。三首目を拝唱してみますと、「いばら道」とは非常に苦難の多い道のことですが、死を選ぶ方がよほど楽だと思はれるほどの「いばら道」を、これから歩むことにならうともそれでも戦ひをとめるのだ。それはただ「国がらをただ守らん」が為である、と陛下はお詠みになつてをられます。言葉をかへて申しますと、戦ひを止めなければ国がらを守ることが出来ない、といふことでせう。

私は、陛下にとつて「国がら」を守るといふことは国民の幸福繁栄をひたすらに願はれることと同じだつたと拝してゐます。陛下は民のことのみを、真にお思ひになつていらつした。だからこそ、「いばら道」を進みゆかうとも戦ひを止める、と仰言つてゐるのでせう。このやうに、陛下の三首の御歌を拝しますと、つねに陛下が国民の幸をどれほど願ひ給ふか、想像を絶するものがあります。かうして昭和二十年八月、国民の心は陛下の御心に統べられて、終戦を受けとめ、国の再建の為に黙々と努め始めたと思へるのです。真に心を尽す事、その道をつねに率先して歩んで来られた御方が、天皇陛下であられた、と偲ばれます。

大学を卒業後、私は大学院に残り、ドイツの歴史思想家フリードリッヒ・マイネッケの書いたものを読んでまゐりました。明治維新の前に生まれ日米安保条約締結の後になくなつたマイ

ネッケは、世界最古の歴史学雑誌『ヒストリーリッシェ・ツァイトシュクリフト』の編集長を四十年近く勤め、長くベルリン大学の教授でもありましたし、文字通りドイツの史学界に重きを為した方であります。第二次大戦後は、ベルリン大学がソ連軍の支配するところとなり学問の自由を奪はれると、その多くの方は西ベルリンにのがれてベルリン自由大学を新設しますが、そのときマイネッケは初代総長に迎へられてゐます。晩年そのマイネッケが出しました論文集、『歴史に対する感性と歴史の意味』といふ本を見てみますと、次のやうなことが述べられてゐます。

「もしも友の独得の良さが分かりたいと願ふなら、感性と心とともに働かせなくてはなりません。いやお互いの全心全霊が感応しあはなくてはならないのです。そして歴史に接する場合でも、これと同じ事が言へるのであります。」

私共には何かの瞬間に、この人はいい人だと思へて来ることがあります。そして相手と心を通ひ始めると、相手が本当に良く見えて来るものです。「感性と心を働かす」といふ事も、歴史上の先人の喜びが自分の喜びとして、悲しみが自分の悲しみとして伝はって来るまで、心を砕くといふことでせう。

先程元侍従次長の木下道雄先生の御話しを伺ひました時に、涙があふれ出て来たと思ひましたが、そのやうな心の動きをマイネッケは「全心全霊の感応」と呼んでゐるのだと思ふので

す。音叉が他の音叉に共鳴させられるやうに、人の言葉にたたへられてゐる眞実の思ひにこちらが心打たれる。さうでなければ、相手がわかり始めたといふことにはならないといふ事でせう。特に人間を対象とする学問である限り、この事が「学問の原理」であると、マイネツケは言つてゐます。そしてそれはまた、レーベンスプリンツィプ——「いのちの原理」だとも言つてをります。それは、人の心の眞実に心打たれる処に、人生にとって最も大事なものが見えて来るからであります。

ところが、現在の大学の学問は、むしろ人の心の眞実に感応するといふことを、極力排除してゐるやうに思はれます。大学の講義のほとんどが、私共の心に迫つて来るものを欠いてゐるのはそのせいではないでせうか。講義で語られてゐる事のはほとんどは、単なる知識であつて私共の心をゆり動かし、生きる力となるものではない。これを学問ではないとは申しませんが、しかし本當の学問は自らの人生を、いかに眞剣に生きようとするかといふことと不可分の関係にあるはずです。「いのちある者」が「いのちある者」に感応する事なくしては、眞実の学問が成り立つはずはないと思ふのです。ところが人々はさうは考へない。心と心のふれあひといふやうなことは学問の世界から排除しようとするのです。例へば歴代の天皇方は数多くの御歌をお詠みになつてをられますが、その御歌にしましても、御歌を味はふ事は学問にはならないとする考へが、一般的なのです。

人々は、天皇といふ御方について或るイメージなり考へ方を、かたくなに持つてゐますが、天皇御自身の御言葉の味ははうとはしてゐません。だが果してそれでいいのでせうか、学問とは、どのやうな考へ方や理論をもつかといふ処にあるのではなく、どのやうなところもちで生きるかを、定めてゆくことでせう。そのためには大学での学問は理論の整備にとどまらなくてはいけないので、「全心全霊の感応」が学問の中心に据ゑられなければいけないと思ふのです。私は今上陛下の御歌に、御心に、生きる拠り処を求めてゐますが、その事は現在の学問に欠けてゐる最も大切なことであると思つてをります。最後にもう一度、今上陛下の連作三首の御歌を拝唱して、締めくくりと致します。

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて
国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

ご清聴どうも有難うございました。

教壇に立って思ふこと

鹿児島県高尾野小学校教諭

内山 なな子



カット・正行公使用 鑑

只今、御紹介いただきました内山でございます。現在、鹿児島県で小学校の教師をしてをりますが、昨年、学窓を巣立ったばかりで、経験も浅い私ですので、日ごろ感じてをりますことを述べてみたいと思ひます。

心の優しい、生き生きとものごとを感じる子どもを育てたい。これは、子どもを育てる任にあたるものすべての願ひと言ってもよいのではないでせうか。又、直接、子供と接する立場にはなくても、愛情の深い、心の優しい子どもに育てて欲しいものだと思はれた経験をお持ちの方も多いことと思ひます。

教師となりましてから、一年と四ヶ月の私も、授業や学校行事に追われる毎日ですが、さういふ願ひを持ちつつ過ごして参りました。

「生き生きとものごとを感じる。」このことの大切さを、私が感じるやうになつたのは、やはり、先輩方の熱心なおすすめを受けて参加させていただいたこの合宿教室が機縁になつたと思ひます。

大学一年の時の合宿教室で、国民文化研究会の理事であられた夜久正雄先生の書かれました文章を輪読いたしました。その中に、文芸評論家の小林秀雄先生の「美を求め心」の文章が引用してありました。それまで、さういふことばに接したことのない私には、とても新鮮な驚きでした。その文章は、次のやうなものです。

「美しいと思ふことは、物の美しい姿を感じることです。美を求める心とは、物の美しい姿を求めることです。……中略……」

さういふ姿を感じる能力は誰にでも備はり、さういふ姿を求める心は誰にでもあるのです。ただ、この能力が、私たちにとって、どんなに貴重な能力であるか、又、この能力は、養ひ育てようとしなければ衰弱して了ふことを、知ってゐる人は、少いのです。」
といふお言葉でした。

そのころ、自分には感じる力がないのではないかと淋しい思ひをしていた私には、この「美しい姿を感じる能力は誰にでも備はつてゐるのです。」と言はれる小林先生のおことばが、私自身に向けられてゐるやうで、何か自信めいた気持ち湧いて来てうれしかったことを覚えてゐます。そして、「この能力は養ひ育てようとしなければ衰弱してしまふ……」とおっしゃつてをられるのを読んで、養ひ育てようといふ姿勢を持たば、感じる力を伸ばすことができるんだ、これからでも養つてみようと思ひました。

しかし、自分がいくら感じたいと思つても、心から感じ取れるものではありません。私はその切実な感じ方を、心からの感動を試してみたいものだと何回思ったことせう。

そのやうなあせりに似た気持ちをいだきながらすごしていましたが、たしか三年の時だつたと思ひます。このままではいけないと思つてすごしてをりました時に、偶然、書店で小林秀雄



先生の御著書の中に、「美を求める心」の文章を見つ
ける機会を得、早速、買ひ求めて読んでみました。

その中で、小林先生は、「何も考へずに、沢山見た
り聴いたりする事が第一だ。」と書いてをられました。
また「見ることも聴くことも、考へることと同じ
やうに、難かしい、努力を要する仕事なのです。」と
もありました。ああ、これだと思ひました。急に目の
前が開かれたやうな気持ちになつて、それから、で
きるだけ、虚心に自分の廻りのものを見るやうにしま
した。空、木々、草花、夕陽など初め自然物が中心で
した。感じなければいけないといふのではなく、ただ
見ようといふことを何回も自分に言ひきかせました。
しかしただ見るといふことは何と難しいことなのでせ
う。

かうして、私自身、感じることのむづかしさを、そ
してその喜びをほのかに知ることができるようになつ

たころ、早くも卒業を迎へ希望してゐた小学校の教職につく日が来ました。

教職生活は思つてゐた以上に忙しい日々でした。教職歴二十年以上の先生も、新任の私も同じやうにクラスを任かされますので、自分が未熟だからといって、オロオロしてゐる暇はありません。できるだけのことをやるしかありませんでした。

初めて、二年生の四十一名を任されました、毎日を子供たちと過していくうちに、子供たちのうちつけない心に触れて、目の覚める思ひのしたことも度々でした。

花が咲くと、真っ先に飛んで来て教へてくれたり、花の茎が折れてゐると何回もまっすぐにたててやつたり、巣から落ちて死んでゐる雀のひなを見つけて来て、お墓を作つてやつたり、ヒマワリの茎の高さを自分と比べる子供たちなど様々です。

二年生は、教材の上でも、草花を観察する機会が多いので、そのやうな時にとにかく、子供達によく見てもらはうと思ひました。小さな芽や、葉のやわらかさなど私も自分で気付いたことを話しながら見ていきますと、それぞれに子供達は自分の発見をさもうれしさに教へに来てくれます。

理科の野外スケッチの時のことです。腹ばひになつて何を一心に描いてゐるのかしらとのぞいてみますと、地面から五センチ位の小さな細いボケの木を大きな画用紙いっぱい描いてゐました。日ごろは、あばれんぼうの男の子だけに、こんなにも小さな木を一心になつて描いて

る姿を見て、私は思はずその子をだきしめたくなつたことでした。

子どもたちとの生活の中で、やはり、教師にとって何よりうれしいのは、太陽に向かつて伸びていくひまわりのやうに、のびのびと育つてゆく子供の心に接する時だと思ひます。それでは、ここで、ある子供の日記を紹介してみます。目を追ふにつれて、子供の心が回りのものに向けられていく様子がおわかりいただけれると思ひます。

「六月七日

きょうは遊ばなかつた。」

これは、この子が一番初めに書いた日の日記です。

「六月十七日

雨が降っています。ひまわりが咲きました、はずかしそうに北側を向いてさいています。

七月十八日

夕日を受けておしろい花が咲いています。赤いのも黄色いのもあります。おしろい花に風がふいてきておしろい花はうれしそうにさいています。」

いかがでせう。みなさんはどう思はれますか。幼稚なたどしい表現かもしれませんが、本当に花になりきつたやうな、やわらかな心の動きが読みとれるのではないでせうか。

この子が二学期になると、だんだん心が周囲の人に向いて行くのがわかります。例へば、

「九月二十六日

ともかちゃんと、となりの赤ちゃんの所に遊びに行ったら、そこの赤ちゃんがなくようにわらいました。

十月四日

ともかちゃんと遊んでいて、おばあさんが通って、あたしにもおばあさんがいたらいいと思います。

十月十四日

わたしは、帰ってからすぐでてるぼうずを作っておいのりをしました。」

これは、遠足の前の日のものです。この日クラスで、てるてるぼうずを作り、皆でお祈りをしました。この子は、それでもまだ心配だったのですね。かわいらしい手のひらを合はせてお祈りしてゐる姿を思ひうかべると、胸がジーンと熱くなって来たことでした。このお祈りが届いてか、当日は楽しい遠足ができました。

もう一つ、この子の日記を御紹介しませう。

「十一月七日

団地のそばに、コスモスの花がさいて、まっかつかのコスモスの花がすごくきれいでした。あたしもコスモスの花のようにきれいになりたいと思いました。」

コスモスのやうにきれいになりたいといふ、この子の気持ちが伝はって来ませんか。
この日記は、

「美しいと思ふことは、物の美しい姿を感じることです。美を求める心とは、物の美しい姿を求めることです。」

と言はれる小林先生の御言葉そのものだと思ひます。又、小林先生は、

「優しい感情を持つとは物事をよく感ずる心を持つてゐる人ではありませんか。」
ともおっしゃつてゐます。それは私自身の願ひでもあります、優しい心を持つこと、そのためにも、ものごとに対してしみじみと感ずる心を持つことはとても大切なことだと思ひます。

このやうな子供達との生活を通して、扉をたたきさへすれば開いてくれるやうなやはらかな心を備へてゐる子供が多いことに驚かされました。うらやましきさへ覚えるのですが、かういふ柔らかな心が人と接する時、本を読む時、詩や和歌を味はふ時、とても大切だなあと思ひます。

これから、この子供達も、大人になって行きます。このやうな心持ちで歴史上の人物や詩、和歌、古典などに心をはせ、これまでに生きてこられた人々の心に、そして今生きてをられる人々の心に思ひをいたすことのできるやうな人間になつてくれたらと思ひます。

ところで、私達の職場でも、やはり心ない言葉のやりとりがあつて、悲しい想ひをすること

がないわけではありません。卒業式を前にした職員会議で、国歌は天皇の世をたたへたものであるから歌はせるべきでないとか、卒業式は子供たちを祝ふ式だから国旗を掲げる必要はないなどと感情的に論議されます。又、自分達の主張を通すために、ストライキに参加され、その先生のクラスの子供達は、淋しさうに自習をしてゐるのが実情です。

子供達のためには言はれますが、素直な子供達の心はなほざりにされてゐるやうに思へてなりません。期待に満ちた子供達の目を見てゐると、素直な心を、美しいもの、高貴なものを求める子供たちの心をのばして行くことが私の第一のつとめのやうな気がしてきます。

今年、五年生の担任で、二年生とは成長の時期も違ひ、子供達との接し方も多少変はつて来てをりますが、やはり、この願ひは変はりません。私自身、子供達の心や周囲の方々のおことばや、自然に接して感じるやはらかな心を養ひつつ、これからも子供達と接して行きたいと思ひます。

最後に、私の好きな詩を一つ御紹介して、私のつたない話を終はることにいたします。これは、私が心の沈んだ時など、折り折りに愛唱してゐる詩ですが、数学者であられる、岡潔先生の御著書の中にあつたもので、岡先生が、御幼少のころとつてをられた少年雑誌の扉にあつたものださうです。残念なことに、作者も題名もわかりませんが、読んでみたいと思ひます。

小川の水はぬるみたり、日は晴れ空はうすみどり

つぐみやひわやうぐいすや、さやかに遊ぶやよひひつ弥生月
萌えよ萌えよ春の草、生ひよ生ひよ野辺の草
新し夢をはぐくみて、春の命をのばせかし

御清聴ありがとうございました。

天皇陛下の御心にふれて

九州大学歯学部助手

吉田 哲太郎



カット・正行公墓地 樟木

ただ今御紹介にあずかりました吉田哲太郎です。私は、大学二年生の時、初めてこの合宿教室に参加致しました。そして、その合宿教室は、私にとって一生忘れる事のできない感銘の深いものになったのであります。と申しますのは、私は、その時、今上天皇について、生まれて初めて生き生きと心に残る御話をお聴きしたからです。御話をして下さいましたのは、今上天皇が未だ皇太子であられた大正十二年から昭和二十一年まで、陛下のお側に仕へてをられた木下道雄といふ方でした。木下道雄先生は、その時、八十二歳といふ大変な御高齡であられたのですが、その御話をされる御態度には、何とかして今上天皇のありのままの御姿を私たち若い日本の青年に伝えたい。そして伝えていくのが自分の使命だといふ思ひが溢れるやうに感じられました。先生のその真剣なまなざしと、真摯な態度は、今でも私の心にあざやかに残っています。木下先生がお話しなされた今上天皇の御話とは、国民がどういふ気持で陛下に接し、それに対して陛下がどの様な御気持で応へてをられたかといふことを、具体的な事実で示していただいた御話でありました。

天皇と申しますと、皆さん方の中には、何となく実感が湧かない、親しめないといふ風にお感じになってをられる方もきつと多いかと思ひます。この様に申してをります私も、木下先生の御話をお聴きするまでは、やはり天皇と申しますと、何か国民とはかけ離れた遠くにをられる特別な方だといふイメージがあつたのであります。私の場合、たまたま木下先生の御話をお

聴きする機縁に触れて、それまでのイメージとは全く違った、もっと身近に親しみをもって感じられる天皇陛下の御存在といふものを知るきっかけを得たのであります。

それでは、私が心を動かされた今上天皇についての御話を、当時の合宿教室記録から引用して皆さんに御紹介したいと思ひます。これから御紹介する御話は、木下先生の御話をそっくりそのまま引用したものでありますので、どうかその点は御了承の上お聞き下さい。

それは、昭和六年の事であります。熊本地方で陸軍の特別大演習が行なはれ、陛下は、その演習を視察するために、熊本までおいでになり、海路、船で鹿児島より太平洋を横須賀までお帰りになりました。日没と同時に、御召艦が、御召艦と申しますのは、陛下がお乗りになった軍艦のことです。その御召艦が鹿児島湾を南下して行く途中、夕食の時刻にかかりましたが、その夕食の最中、木下先生は、昔、陛下がまだ皇太子であられたときに、同じ様に、御召艦長門に乗られて、樺太に行かれた時のことをふと思ひ出されたさうであります。それは、樺太のすぐ近くのカイバ島といふ島に行かれたときのことです。そのカイバ島には、日本から漁師達が漁に来てをり、その漁師達が小舟に乗って陛下の御召艦まで御挨拶にやってきましたのであります。その時は、風もあり、波も高く、小舟でもまれる様にして御挨拶にやって来たさうであります。日の丸を舳先に立てて、口々に何かを叫んでゐるが、とにかく風もあり、波も高いので何を言っているのかよくわかりません。しかし、みんな、陛下の御召艦に御挨拶



に来ることができたといふことで感激して、嬉し泣きに泣いてゐる事だけはよくわかったさうであります。木下先生は、その時の事を食事中に思ひ出されて、ひよっとしたらこの波静かな鹿児島湾にも、その様にして船に乗って見送りの挨拶に来てゐる人がゐるかも知れない。もし、さうだとすれば、今は夕食時で、甲板には誰もゐない筈だから申し訳ない事になるとお感じになつて、夕食をさつと済まされるや、甲板に上がつて行かれたさうであります。木下先生はその時の有様を次の様に述べてをられます。

「後甲板は夜は電燈がたった一つついてゐるだけで、まことに薄暗い所でありましたが、誰もゐないとはばかり思つてゐたところが、右舷の所に誰か一人後向きに立ってゐる姿が見える。近づいてよく見ると豈に凶らんや、陛下がたったお一人で、望遠鏡から手を離して、何ものかに挙手の御挨拶をしておいでになつた

のであります。私は、「これは船が下に來てゐるな」と思つて、私も右舷の所に駆け寄つて下を覗いて見ましたが、船らしいものは一向に見えない。『はてな、何か望遠鏡で御覽になつたのかな』と思つて、傍の望遠鏡に目を当てて見たのでありますけれども、明るい所から急に暗い所へ出ますと目が慣れてをりませんので、なかなか見えません。じつと我慢して目を当ててをりましたら、そのうちにだんだんと鹿児島半島の山々のアウトラインが見え出しました。そのうちに陸の色と海の色との區別がつく様になり、海岸線一帶に何か赤い紐の様なものは何十キロとなく続いてゐるのが目にとまりました。『はてな、何だらうか』と思つて見てをりましたら、今度はその赤い紐の少し上の小高い所に何百メートルおきかに点々とかがり火が見えて來たのであります。私は、その時わかつたのであります、鹿児島半島の沿岸に住む人々が、『今頃は陛下の御船が自分たちの村の沖合いを通過する時刻だ。』と思ひ、老いも若きも、ちようちゃんか、たいまつを持って海岸に立ち並び、また、若者たちは山々に登つてかがり火を焚いて、遙かに陛下をお見送りしてゐたのであります。陛下は、その有様を望遠鏡で発見なさいまして、たつた御一人、誰もをらぬ暗い甲板の上から手を挙げてそのあかりに対して御挨拶をしておいでになつた。その御うしろ姿を私が偶然発見した次第であつたのであります。私は本當に『これが日本の姿だな。』と思ひました。」

その様に述べてをられるのであります。先生はそのあとすぐに、見送りをしてゐる人に、「陛

下は、あなた方の見送りに対して御挨拶をなさつてをられますよ」といふことを、何とかして知らせてやりたい。知らせる工夫はないものかと考へられて、御召艦の探照灯をつけて合図されることを思ひ付かれたさうであります。御召艦の探照灯は、直ちに全部つけられて、左は大隅半島から右は薩摩半島まで、海岸線一帯を照らします。見送りに出てゐた人々は、陛下の御乗りになった御召艦から、探照灯の光がひかり始めたので、陛下に自分たちの見送りがわかつて頂けたといふことを知つて、その光の中で手を取り合つて喜んだといふ事でもあります。

私は、この御話をお聴きしてゐる間に、自然と眼頭が熱くなつて参りました。陛下は、木下先生と同じ様に、昔のカイバ島の出来事を思ひ出してをられたのかも知れませんが、とにかく見送りに出てゐる国民の事を思はれて、甲板に出てゆかれたのだと思ひます。そして望遠鏡で遙か鹿児島湾の沿岸に、人々の心のこもつた見送りの灯を御覧になつた時、それに対して挙手の礼で御挨拶を送られたのであります。

人が見てゐるからするとか、人が見てゐないからしないとか、さういふこととは全く違つて、例へ、人が見てゐようとするまいと、そして御自分の御姿が見送りをしてゐる人々に見えるなくても、見送りをしてゐる人々の気持ちをかけがへのない尊いものとして、それに対して精一杯に応へ様となされたのであります。その陛下の謙虚でひたむきな御姿に、私は心を動かされたのであります。

この御話をお聴きした時に、私の心に浮んだ陛下の御姿は、それまでに私が心の中で思ひ描いてをりました陛下の御姿とは全く異なつてをりました。私は、その時、陛下の本當の御姿を見た様な気がしたのであります。そして、陛下と國民との間に、この様に美しい心のふれ合いがあったといふ事を知つて驚くと同時に、本當に素晴らしい事だなあと思つたのであります。木下先生のこの御話は、私にとつて、それまでの固定した陛下の見方を完全に打ち砕いて、陛下のありのままの御姿に直接ふれる事により、より身近に親しみをもつて感じられる天皇陛下の御存在といふものを考へてゆく大きなきっかけとなつたのであります。

合宿後、その御話の感動を先輩に話しますと、先輩は陛下の御氣持を本當に偲んでゆくには、陛下の御詠みになつた御歌にふれてゆく事が一番良い事だと教へて下さつたのであります。私が、陛下の御詠みになつた御歌に真劍にふれてゆこうと決心したのは、それからであります。御歌に実際にふれて参りますと、陛下がどれ程國民に対して心を開かれてをり、國民とのふれ合いをどれ程大きな喜びとしてをられるかといふ事がよくわかつて参りました。陛下に、昭和三十二年に御詠みになつた「ともしび」といふ詞書きの付いた御歌がございます。その御歌を拝唱させて頂きます。

ともしび

港まつり光りかがやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる

陛下の御詠みになった御歌にふれて、いつも感じる事は、決して難しいわかりにくい様な言葉は一つも使つてをられないといふ事です。誰にでもわかる易しい平易な言葉で、ありのままの御氣持を飾らずに率直に表現されてをられます。この御歌は陛下が、どこかの港まつりを御覧に行かれた時に御経験になった御氣持を詠まれた御歌です。やはり、どこにも難しい言葉は一つも使つてをられません、陛下のお喜びになつてをられる御氣持が、本当によく伝はつて参ります。国民は、陛下がお越しになる事を知つて、船といふ船に灯をつけて、心をこめて陛下のお越しを迎へたのであります。「天皇陛下万歳！」といふ声がどこからか聞えて来る様であります。さういふ国民の歡迎に、陛下も自らともしびを手にして、お応へになります。「こたへてわれもともしびをふる」といふ御表現の「われも」といふ言葉は、陛下の国民に対する思ひが思はず、口をついて出てくる程に、強くあらはれた言葉であると思ひます。御自分でともしびを振つて、人々の出迎へに應へることが嬉しくて仕方がないといった陛下の溢れる様な思ひがこの御歌には^{にじ}滲み出てる様に思ひます。

私たちは、一人一人、ものの考へ方も感じ方も、人生経験も違ひます。その様にお互ひに違ふもの同志が一緒に生きて行つてゐるのが、この人の世のありのままの姿だと思ふ時に、陛下の国民と苦楽を共にする生き方と申しますか、国民の楽しみを自らの楽しみとし、苦しみを苦しみとし、国民と一緒に生きて行かうとなさつてをられる生き方は、私にとって、限りなく尊

く有り難いものであります。私は、職場において、人と一緒に心を通はせて仕事をやって行くのが本当に難しいなあといふ事を痛感する事がよくあります。時には、もう一緒にはやってゆけないと思ふこともありす。そして、自分さへ良ければといふ気持ちにとらはれて、自分の殻に閉ぢ込もり、非常に苦しくなつた時、私の心を開いて、一人一人、違ふもの同志でも、心を通はせて一緒に生きてゆける、広やかな世界があるといふ事を、私に示して下さるのは、陛下のこだわりのないすなほな大らかな生き方なのであります。みんなが一緒に生きてゆく事のできる生き方を、陛下は身を以つて示してをられるのであります。その様な、陛下の生き方にふれる事により、一人一人が自分のこだわりから離れて、共に手をとって生きてゆけるといふことを知つた時、私は、自分がその様な陛下のをられる日本といふ国に生まれ、そして生きてゆく事ができるといふ事を本当にありがたいと思はざるを得ないのであります。

陛下が、御歳七十歳になられた時に、御詠みになつた御歌がございます。その御歌を拝唱させて頂きます。

七十歳になりて

ななそちを迎へたりけるこの朝も祈るはただに国のたひらぎ

よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそち

陛下は、七十歳を迎へられた御年になられても、ただひたすらに国の平安をお祈りなされて

をられます。それは七十四歳になられた今日においてもお変りはないと思ひます。陛下にとつて、国とは、御自分を含めて、国民と共に生きてゆく国であります。この短歌を通して偲ばれます様に、陛下の国の平安を願はれる御氣持が非常に強いといふ事は、それだけ、陛下の国民と共に生きてゆくことなされる御氣持が強いといふ事の証あかしに他なりません。その御氣持の直接の表現が、二首目の御歌であらうとお偲びするのであります。

私は、私たちが、私たちのこの美しい日本の国を、本当に立派に良くしてゆかうと願ふ時に、それを実現してゆく本当の力といふものは、この陛下の御氣持に應へてゆかうとするところから生まれて来る事を信じてをります。

最後にもう一度、この御歌を拝唱して、私の発表を終わりたいと思ひます。

七十歳になりて

ななそちを迎へたりけるこの朝も祈るはただに国のたひらぎ

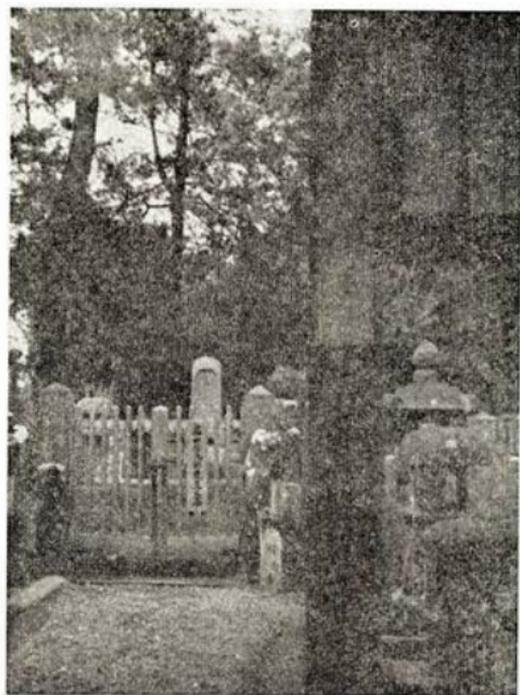
よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそち

どうも御静聴ありがとうございました。

「合宿教室」のあらまし

西南学院大学法学部四年

西山八郎



「合宿教室」までの一年のあゆみ

講義・講話

班別輪読・班別討論及び和歌創作

青年研究発表

慰霊祭

カット・春季合宿の際参詣した

高山彦九郎先生御墓

(福岡県久留米市・遍照院)

「合宿教室」までの一年のあゆみ

一 昨年霧島における第十九回合宿教室から昨年の阿蘇における第二十回合宿教室に至る一年は、内外ともに波乱に満ちた一年であった。田中内閣が数々の失態を演じて退陣した後、略々昭和五十年の幕開けとともに作動を始めた三木内閣も、やがて種々の難題に直面したまま其の弱体を露呈するに至った。この政府の為体に伴ひ、国家の不統一は益々顕著となり、各界の乱脈ぶりはもとより、国民の間における唯物的風潮と利己的傾向は愈々助長されるかの如くである。

世界のリーダーシップを自認してゐたアメリカは、ウォーターゲート事件による醜聞も消えやらぬ中に、終にヴェトナムからの完全撤退を余儀なくされ、共産陣営の勢力は、東南アジアを席卷して一気に朝鮮半島まで押寄せたかの様であった。あれ程姦しく叫ばれた「デタント」も畢竟空語でしかなかったのである。そして又、世界をひっかき廻した日本赤軍による一連の不祥事件や文世光事件は、近来必ずしも良くはなかった日本人の国際的評価を更に貶おとしめる事となつた。

この様に祖国日本は、内に外に多くの難題を抱へつつ、ただならぬ様相を示してゐるのであ

るが、さうであればある程、国民文化再建の努力が、有志の国民の間で、前にもまして積み重ねられねばならぬと痛感されるのであり、今こそ立国の精神を呼び覚ます事が正に急務であるといはなければならぬ。戦後も今や新しい時期を迎へつつあり、戦争を知らない世代が社会の中堅を担ふべき時代が到来してゐる。さればこそ、次代の指導層を育成すべき大学の場においては、尚更正しい国家認識と、それに基く健全な学問が培はれねばならぬのであり、その学風改革は、我々学生に課せられた時代の務めである。その為には、志を同じくする者達が、自らの志操と知見を磨き合ふ場を我々の周辺に形成し、祖国の命脈を支へるあらゆる手だてを、自らの力で見出して行かねばならないであらう。

この決意のもとに、我々は既に、心ある先輩の切り拓いてきた道を相続しつつ相互に研鑽を積んで来たのであるが、本年夏、阿蘇において第二十回の合宿教室を開催するに至った。ここではそのあらましを述べる前に、合宿に至る一年間の、学生を中心とした活動の概況を記しておきたい。

○

我々の目指す学問は、祖国の命運と直結した学問である。それは、常に動いてやまない現実世界から遊離する事を戒め、厳しい精神の自立を要求するのである。各大学において、我々は、月に数回の例会を営んでゐるのであるが、それらは全て、自己との対決を迫られる修練の

場であり、自らの全てを傾けて言葉を交はし合ふ此の集ひは、近来とみに空虚さを増して来た大学の中に在って愈々貴重であるといはなければならぬ。われわれは自らの全てを託す言葉の修練を短歌創作とその相互批評の中に求め、先達の残した言葉の一つ一つを正確に辿る古典輪読といふ学問形式を通して、「祖国―人生―学問」といふ一連の命題を担ひ乍ら、学問と取組んで来たが、昭和四十九年の秋には、後の表に記してある様に、各地区で小規模の合宿が催され、その成果は、年末迄に、「学びの道」（東京）、「大信海」（福岡）、「笠岡合宿記録」（中国）、「北進・九州の地熱」（熊本）、「薩摩兵児」（鹿児島）等の記録となって相互に交信されてきたのである。

なほ、この年は、大阪に新たな学びの場が確立し、福岡の西南学院大学の諸友が、「正大寮」（東京）、「葦牙寮」（福岡）、「時習義塾」（熊本）、「薩南学舎」（鹿児島）に続いて、同宿研鑽の場、「大観塾」を設立し、また、女子学生による活動も、九州大学、福岡教育大学、熊本大学、鹿児島大学を中心に活発化して来た事を特記しておきたい。

（地方合宿）

主催寮	年月日	場所	参加大学
正大寮	S・1949年 9月14日～16日	朝日麦酒葉山寮	東大・東工大・東外大・早大 国学院大・亜大・中央大

福岡教育大学 教育問題研究会	10月6日～8日	福岡研修センター	福教大
鹿児島信和会	11月13日～15日	山川町「森と湖の里」	鹿大・鹿経大・熊大
中国地区O・B	11月23日～24日	笠岡市 青年の家	島根大・岡山大・広島大・ 大阪大・九大
東京工業大学歴生会	11月22日～24日	東工大 大貫臨海宿舎	東工大
福岡信和会	11月21日～24日	太宰府 戒壇院	九大・西南大・福大・福教大
熊本信和会	11月22日～24日	瀬高町 青年の家	熊本大・熊商大・鹿大
熊本・鹿児島地区 女子信和会	12月14日～16日	熊本市 少年の家	熊本大・鹿大(女子学生)
中央大学信和会	12月21日～22日	渋谷 青少年研修会館	中央大
福岡地区信和会	S ⁵⁰ 年 1月4日～7日	福岡市 桂林荘	九大・西南大・福大・山口大
亜細亜大学 日本文化研究会	2月21日～22日	亜大セミナーハウス	亜大
西南学院大学信和会	2月28日～3月1日	福岡市 ピオネ荘	西南大・九大・福大
東京大学信和会	3月1日～3月1日	伊豆 磯村産業保養所	東大

九州地区女子信和会	3月8日～10日	山川町「森と湖の里」	鹿大・熊大・福教大 (女子学生)
福岡教育大学 教育問題研究会	3月29日～31日	福岡 研修センター	福教大
鹿児島経済大学 政治経済研究会	4月10日～12日	加治木町 加治木荘	鹿経大・鹿大
佐世保 日本文化研究会	6月28日～29日	鹿子前町 国民宿舎	長大・熊大

かうして、各地で研鑽を続け乍ら、我々は、天皇御在位五十年をお祝いするといふすばらしい年を迎へたのであるが、この新しい年は、然し、決して安穩ではなかった。益々思想的混乱の度を深め、それによって対外的にも大きな危機を孕む祖国の姿を前にして、我々は、自らの学問が愈々切実なるべきを思ひ、三月の下旬には、各地区の友らが御互ひの胸の内を確かめ合ふべく、久留米の地に参集して全国的な合宿を営むに至った。合宿では、参加者全員が自らの所信を問題提起書といふ形で披瀝し合ひ、夫々少人数の班に分かれて日夜徹底した討論が繰り返された。一人一人が言葉を交へるといふ事は、一人一人が新に自らの心を定め整へて行くといふ事であった。合宿の内容については説明を省くが概略は次表の通りである。

なほ、この合宿参加者の内訳は次の通りであった。

〔東日本〕 東大2・東工大4・亜大3・東外大・中央大・国学院大・慶大各1

〔西日本〕

九大8・熊大12・鹿大9・西南大5・鹿経大3・広大・岡大各2・阪大・島根大
 ・山口大各1

計 五十七名

国民文化研究会 二十二名

総計 七十九名

3月29日(土) (第3日)	3月30日(日) (第4日)
(起 床) 朝 の 集 ひ 朝 食	(起 床) 朝 の 集 ひ 朝 食
講義「聖徳太子について」志賀先輩	全体決意発表 講話(坂東先輩) 講話(前田先輩) 感想文執筆
班別輪読 (聖徳太子)	
昼 食	
班別輪読 (同上)	
講話(小柳先生)	閉 会 式 (解 散)
散策・高山彦九郎墓参 (短歌創作)	
夕 食 入 浴	
班別和歌 相互批評	
夜の集ひ	
(就 床)	

「合宿教室」のあらまし（西山）

		3月27日(木) (第1日)	3月28日(金) (第2日)
		春季「久留米合宿」日程表	7:00
8:00			朝の集ひ 朝食
9:00			体験発表(岸本先輩)
10:00			班別討論 (問題提起書を中心に)
11:00			
12:00			昼食
1:00			全体討論
2:00	(集合)		
3:00	開会式		
4:00	全体所感発表		講義「自分の生き方を考へる」片岡先輩
5:00			
6:00	夕食 入浴		夕食 入浴
7:00			講義「天皇御訪米について」小野先輩
8:00	班別討論		班別討論
9:00	(問題提起書を中心に)		
10:00	(就床)	(就床)	

四月に入るや、我々は、早速、新入生を対象とした活動に入った。学内における古典の輪読会や小合宿が催され、五月から六月にかけては、後の表に記す如く、熊本地区を皮切りに次々と講演会が開かれた。政治的意図を持った講演会しか見受けられなくなった大学において、祖国、人生、及び学問の諸問題を真向から突付け、自らの人生態度の中に根本から問ひ返さしめる様なこれらの講演会は、多くの学友に少なからぬ感銘を与へた様である。また、これらの講演会と併行して、各地区では、様々の形で夏の合宿の説明会が開かれ、この後、我々は、まことに地道なマン・ツー・マンの方式で多くの学友に接し、夏の合宿の勧誘を兼ねて、夫々の所信を訴へかけて行ったのである。この時期は、我々にとって、日頃の研鑽の全てが問はれる厳しい試練のときであったが、同時に、多くの新しい友にめぐり会ふ嬉しく楽しい時期でもあった。

(講演会)

主催	年月日	場所	講師・演題
熊本大学信和会	S・1750年 5月17日	熊大教養部 C-13	山口宗之先生(九大教授) 「明治維新と青年」

「合宿教室」のあらまし (西山)

鹿児島経済研究大学 政治経済研究会	5月23日	鹿経大 19番教室	川井修治先生(鹿大教授)「日本の現状と大学生としての使命」平岡植吉先生(元鹿大教授)「日本国民としてのつとめ」
鹿児島大学信和会 教育問題研究会	6月7日	鹿大教養部 101	川井修治先生(鹿大教授)「大学生としての使命」
西南学院大学信和会	6月18日	西南大2号館 202	岡田武彦先生(西南大教授)「学問と思想」
九州大学信和会	6月21日	九大教養部 103	山田輝彦先生(福教大教授)「現代の人間観」
福岡教育大学教育問題研究会・霜月会	6月21日	福教大特一番教室	山口宗之先生(九大教授)「明治維新の人間像」

○

かうした数々の研鑽の積み重ねの上に、夏休みに入り、第二十回合宿教室開催のときは目前に迫ったのである。

(この項、熊本大学工学部四年 折田豊生 記)

第二十回「学生青年合宿教室」は、九州・熊本県・阿蘇に於いて、昭和五十年八月七日から十一日までの四泊五日間の日程で開催された。会場は阿蘇国立公園・ホテル「阿蘇の司」。外輪の山脈を遙かに見渡し、真近には新緑の中岳を控へる爽涼たる山麓の一角にあった。

合宿に先立って、八月四日より三日間、今回の合宿勧誘活動で中心となつて勧誘に当たつてきた各地の学生と国民文化研究会の若手会員約五十名が集つて「事前合宿」及び合宿会場の整備が行なはれた。

「事前合宿」は、全国から多数の学生・社会人を迎へて開催される「合宿教室」をより充実したものにするために、合宿中、学生班の運営に当たる班長・副班長（主に学生）が合宿に臨む相互の気持ちを確かめ合ひ、合宿に向かふ姿勢を整へる場として設けられたものである。「事前合宿」では、三回に亘る黒上正一郎先生著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読、四人の学生による所感発表、更に国民文化研究会の会員による講義が行なはれ、遠くにある友とひさしぶりに再会できた喜びと打ち解けた雰囲気の中にも、二日後に迫つた「合宿教室」に向けて全参加者の気持ちは次第に整へられ、たかめられていった。

合宿開催の前日、各作業ごとに数人ずつが分担して会場の整備に当たつた。横断幕の取り付け、ポール立て、会場表示板の設置、班別一覽表の作成、名札・リボン作り等の作業は着々と進み、夕方にはほぼ完了し、後は熊本市内の学校から貸りて来る椅子の運搬、朝の集ひに使ふ

広場の草刈等を残すばかりとなった。折しも降りはじめた雨の中を全員で残された作業にとりかかり、間もなくほぼ全ての作業を完了した。

いよいよ明日、全国各地から友が集って来る。「もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世に立つ力なるべき」と大書された明治天皇の御製の幟が降り頻る雨の中、字も滲ませず広場に立ってゐた。全ての準備を終へ、天候の回復を願ひながら、あとは友の参集を待つのみであった。

参加者の内訳は次の通りである。

(学生班 六十六大学) (洋数字は参加学生数)

東大	8	阪大	4	九大	19	東工大	2	東教大	1	一橋大	1
岡山大	1	広島大	5	鳥取大	1	熊大	27	山形大	1	東京商船大	1
東京学芸大	1	信州大	2	富山大	3	大阪外大	2	大阪芸大	1	島根大	2
山口大	6	福岡教育大	12	大分大	4	佐賀大	2	鹿児島大	29	防衛大	5
九大医療短大	1	長崎県国際経大	2	早大	15	慶大	5	立大	1		
上智大	1	学習院大	4	中央大	8	国学院大	6	専修大	2	青山学院大	1
日本大	2	亜細亜大	39	拓大	1	駒沢大	1	国士館大	1		
工学院大	1	東京農大	1	多摩美大	1	日本女大	3	東京女大	1	千葉敬愛短	1

8月9日(土) (第3日)	8月10日(日) (第4日)	8月11日(月) (第5日)
(起朝)の集(床)ひ食 朝 朝 朝	(起朝)の集(床)ひ食 朝 朝 朝	(起朝)の集(床)ひ食 朝 朝 朝
(講義) 「最近の日本の動きは 世界の驚きである」 木内信胤先生 (質疑応答)	(講話) 島田好衛先生	片岡健合宿運営委員長 所感発表
	(講義)「今上天皇のお 歌について一和歌と 学問」 夜久正雄先生	全体意見発表 「合宿をかへりみて」 小田村寅二郎先生
班別討論	班別輪読	感想文執筆 第2回和歌創作 班別懇談
昼食	昼食	閉会式 (昼食)
(講義)「和歌創作について」 前田秀一郎先生	記念撮影	(解 散)
阿蘇登山 (和歌創作)	(講義)「現代の病根— 見えざるタブーにつ いて」 福田恆存先生 (質疑応答)	
	班別討論	
夕入散(和歌提出) 食浴歩	夕入散 食浴歩	
講話 (太田・長内・朝永)	「和歌全体批評」 山田輝彦先生	
慰霊祭	和歌相互批評 (班別)	
班別懇談	夜の集ひ	
(就 床)	(就 床)	

「合宿教室」のあらまし (西山)

第二十回「合宿教室」日程表	8月7日(木) (第1日)		8月8日(金) (第2日)	
	6:30		(起 朝 朝	(床 の 集 ひ 食
	8:00		(講義)	
	9:00		「いま日本の青年がおもひ をいたすべきこと」 小田村寅二郎先生	
	10:00			
	11:00		班 別 討 論	
	12:00		昼 食	
	1:00	(集 合)	(講義)「学問一いのちに 至る道」	
	2:00	開 会 式	小柳陽太郎先生	
	3:00	班別自己紹介	班 別 輪 読	
4:00	「日本への回帰」輪読	青年研究発表 (東中野・内山・吉田)		
5:00				
6:00	夕 食 入 浴 散 歩	夕 食 入 浴 散 歩	夕 食 入 浴 散 歩	
7:00	(講義)「戦後思想の克服 のために」	(講義)「若き日の吉田松陰」		
8:00	山田輝彦先生	志賀建一郎先生		
9:00	班 別 討 論	班 別 輪 読		
10:00	(就 床)	(就 床)		

フェリス女学院2、 京都産業大2、 同志社大2、 皇学館大6、 賢明女学院短大1、
岡山商大 5、 武庫川女大 1、 岡山理大 1、 尾道短大 1、 広島修道大 1、
安田女短大1、

福岡大 7、 西南学院大19、 福岡工大 2、 九州産業大1、 東和大 5、
福岡女大 2、 久留米大 2、 鹿児島経大6、 尚綱大 1

(千葉県麗沢高校卒 1)

計 三〇七名(うち女子 五十六名)

(社会人・教員班)

会社員、 小・中・高教員、 大学講師、 家事手伝ひなど 計二十六名

(招聘講師) 二名 (大学教官有志協議会) 二名 (国民文化研究会) 七十一名

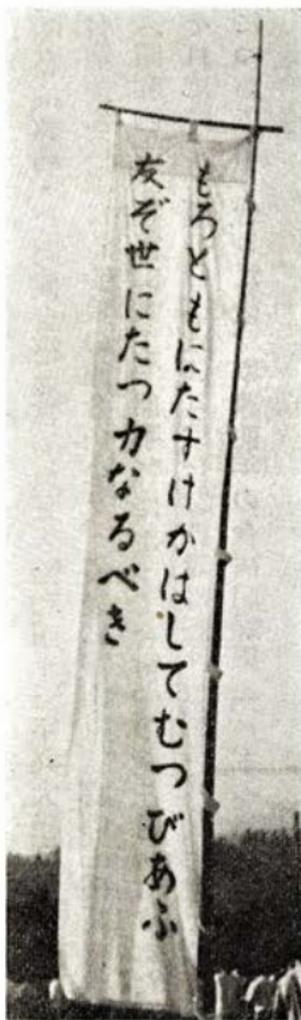
(見学参加者) 十二名 (事務局) 十五名

総合計 四三五名

この合宿では、アンケート用紙をもとに七名乃至九名位で一班を構成し、学生班には主に学生の班長一名、社会人班には国文研の会員が助言者として割り当てられた。また、昨年に引き続き今年も、四、五班を一単位とするブロック制が取り入れられ、班相互の連繋が図られた。

八月七日、昨日来の雨も上がり、雲の切れ間から緑の山肌が見えて来た。昼前頃から重さう

なカバンを手にした友が続々と会場に到着した。午後二時から参加者一同、大講義室に集合して開会式が行なはれた。国学院大学文学部四年の石井孝一君による力強い開会宣言の後、全員で国歌を斉唱し、「戦時平時を問はず祖国日本の為尊い生命いのちを捧げられたすべての祖先の御霊みたま」に対し一分間の黙禱を捧げた。続いて、主催者を代表して国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が、旅の疲れをねき労らはれつつ「この合宿では、大学の違ひや年齢の差など私達の間にある一切の差を乗り越え、知識や理論に振り回されることなく、自分の思ひを率直に述べ合ひ、その中から一人でも多くの友を見つけて貰ひたい」と挨拶された。続いて、参加学生を代表して、地元熊本大学の教育学部四年南田武法君が現在の大学での生活を振り返りながら「自分が感じた事、思っている事を率直に述べ合ひ、学問、人生、そして祖国が僕らの生き方にごう関はってゐるか真剣に取り組んでいかうではありま



せんか」と訴へた。

この後、熊本県立南関高校教諭・片岡健合宿運営委員長（昭和四十三年九大経済学部卒）から合宿主旨説明並びに合宿運営に当たる委員の紹介があり、最後に富山県立富山工業高校教諭・岸本弘合宿指揮班長（昭和四十三年富山工大工学部卒）によって合宿中の諸注意がなされた。かうして、開会式とそれに続く一連の行事は終り、全参加者は各々班室に入り、自己紹介及び合宿参加の動機などについて語り合った後、早速前年の合宿記録集「日本への回帰・第十集」の輪読に入った。

講義・講話

（以下、合宿期間中の講義・講話について概略を記すが、講義については詳しくは本書中に掲載されてゐる講義記録をお読み戴きたいと思ふ）

夜の日程に入り、福岡教育大学教授・山田輝彦先生が、「戦後思想」の克服のために」と題して合宿最初の講義をされた。

先生は、先づ明治の思想家福沢諭吉が、在来の日本文化に、新たに西欧の文明を取り入れる際、相違する価値観の間に挟まれて苦しみながらも、日本が欧州の国々に劣らぬ国に成るやう

にとの願ひを以て、それを「生身で受けとめ」ていったのに比べて、「戦後の多くの知識人達は、戦前に持つてゐた考へ方をいとも簡単に捨ててしまひ、自己のイデオロギーの正当性を示す為に日本人が古来から培つて来た大切なものまで否定するといふ傲慢な態度に出たのです」と戦後に於ける思想形成のあり方を厳しく批判された。

次いで、現代の日本の思想を弱体化してゐる要因として、(一)人民・主権・領土といふ外的な組織としてではなく、自己の有限な生命をつないでいく、内なる国家、ともいふべき永久の生命としての国家の脱落、(二)生きた人間を学ぶところに喜びがあるはずの歴史を、唯物史観によつて社会構造史として捉へる事によつてその中に生きた人間の姿を見ることができなくなつたといふ歴史の徹底的な歪曲、(三)人間は一人で生まれそしていつしか死んでしまふこの「死」といふ人生の事実の回避の三点を挙げられて、人間の感情を除外した戦後思想の特異性を指摘された。

最後に、先生はアドルフ・ポルトマンの「人間はどこまで動物か」さらに「大和物語」「方丈記」等を引用されながら、「私達は自己本位の考へ方からなかなか離れ難いものだが、さういふ自分から離れて全体のために生命を投げ出す能力を人間はもつてゐる」と述べられ、古典の人間像に見られるやうな素朴な「人間的性情」を回復しようと訴へられた。

合宿第二日目は、小田村寅二郎先生の講義に始まった。先生は「いま日本青年が思ひをいた

すべきこと」と題して、科学・技術一辺倒の現代の学問ではどうしても解明できない、真の人間性に目覚める学問が急務であると訴へられた。

冒頭、先生はクアラルンプールでの日本赤軍による人質事件に触れられ、「暴力はいけないと誰もが言ふ。しかし、暴力はただ結果として現はれたにすぎず、それよりも、暴力を生み出す殺伐とした精神こそ問題とすべきであり、学ぶべきものと学ぶべからざるものを見極める力をつけて欲しい」と訴へられた。次に、先生は前年の合宿教室での小林秀雄先生の講義を振り返りながら、科学、万能の現代の学問の誤りを指摘され、「僕らはお互ひが一人の人間として、この人間なるものを今一度見直すことから出発しようではないか。自分の周辺にゐる人々はもとより、森羅万象ごとくをつむむ大自然を、さらには全ての先人、そしてやがて生れ来るであらう子孫たちを、思ひ浮かべて欲しい。日本人とは今この国土に生きてゐる人達だけではないのです。たった一人の人間として生きてゐるのではなく、他との繋りによって生かされてゐる自分に気付いて欲しい。人間は周囲と自己とを見比べて、自分より高いものを目指しながら生きてゐるのです」と説かれた。

更に、先生は吉田松陰の「死シテ而後已ム」といふ言葉をあげられ、「死しても悔いのないほどの人生の目標を定め、遅しく生きてゆくのではないか。真の人間たるに必要な学問がなほざりにされてゐる現在、僕ら自身が本当の学問に取り組むことが何より大事なことです」と述

べられ講義を終へられた。

午後から、引き続き行なはれる班別輪読に先立って、福岡県立修猷館高校教諭・小柳陽太郎先生が「学問―いのちに至る道―」と題して輪読導入講義をされた。

先生は、書物を読むとは言葉を通してそれを著した人の気持ちに触れて行き、やがて自分が生きてゐる証を得るに至る喜びの道であると述べられ、先づ聖徳太子の「憲法十七条」の第一条を引用されて、「『…然れども上和ぎ、下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ…』の中の『諧』は音楽のハーモニーの様なもので、一つ一つの音が全体として一つになって美しい音色を出すといふことです。合宿に譬へますと、一人ひとりの言葉には個性があるが、それが一つとなつて合宿生活を営む中で、一人ではたうてい経験できない素晴らしい体験をするといふことなのです」と合宿教室での生活に即して読んでゆかれた。続けて、聖徳太子の研究に生涯を捧げられた黒上正一郎先生、桑原暁一先生の御二方を紹介され、「名も無い方ではあったが、私達が道の師として仰いでゐる方です。両先生の文章は太子と共に生きてきて始めて生まれた美しい文章です。遠き昔の人も、その人を仰ぎ慕ってゆけば、今迄わからなかった色々な事がわかつてくるのです」と偲んでゆかれ、古典に取り組む姿勢の本質を説かれた。

最後に小林秀雄先生の「考へるヒント」から文章を引用されて、「江戸時代の学問は、読み

が深いか浅いかによって決ったのです。昔の人と一緒になって生きてゐるところに学問があったのです。それは現代でこそ狭くなつてしまつたが、昔から先人が踏み行なつてきた広やかな道です。さういふ道を私達も歩いて行きたいものです」と述べられた。

夜には福岡県立三池高校教諭・志賀建一郎先生（昭和四十八年九大文学部卒）が、「若き日の吉田松陰」と題して、我々は一体どの様な学問を続けて行けばよいのかといふことについて講義された。

先づ、松陰が西国に遊学した折書き記した「西遊日記」の中の「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは触に従ひて発し、感に遇ひて動く。発動の機は周遊の益なり」を引用されて、学問をするには潑刺たる心をもとであることを説かれた。そして、松陰が様々の史跡を訪ねたり、多くの学者を尋ねたり、家族や親友と交はったりする中から、そこ



で触れ得た機によって自らの力を湧き立たせ、生き生きとした学問を身につけていった有様を話してゆかれた。更に、松陰の学問が決して簡単に成就されたのではなく、「実に様々の迷ひを抱きつつ、而も真剣に迷ってそれらを断ち切る一言を心身を磨ぎ澄まして待つてゐた結果なのです」と述べられ、松陰にとつて、学問をすることが正しく己れ自身の生き方を探究し、開展させてゆくものであったことを示されたのである。

最後に先生は、この合宿教室での経験を「発動の機」としてこれからも大いに勉強を続けていかうと訴へられた。

八月九日、合宿も中盤の第三日目に入り、合宿参加者全員の意気も投合して盛り上がりを見せてきた。この日は先づ朝八時から、招聘講師としてお出で戴いた世界経済調査会理事長の木内信胤先生が登壇された。先生には第五回目の合宿教室以来十六回連続して御出講戴いてゐる。「最近の日本の動きは世界の驚きである」と題して、先生はこの一年間の国内、国外に於ける状勢の推移について主要なでき事を取り上げられながら話してゆかれた。その中で先づ、事実を見る学問である経済学が、その出発点となるべき「直観」を排除したために病んでしまつたと述べられ、ではどうすればその「直観力」が身につくのかといふことについて、知識に振り回されるのではなくて、自己をじっくり観察するところから自づとできてくると説かれた。更に、政治、経済、外交の各面で極めて大きく転変していったこの一年間の世界の動きの中

で、日本が進んだ過程は正に世界の驚きであると指摘され、昭和四十八年暮の石油危機に始つたインフレが、「物を大切にする心」を日本人皆が思ひ起こして「それを全国どことなく、誰となく実行」することによって、いつの間にか終熄した事実を挙げて説明してゆかれた。

最後に、この様な外界の「物」と自分とをひとつに考へるといふ大和民族のユニークな性格がこれからの新しい時代に生きてくると力強く訴へられた。

第三日目の夜、海上自衛隊勤務の太田文雄氏の発表（後述）に続いて、電源開発株式会社の長内俊平先生が、「若き友らへ語りかける言葉」と題するお話をされた。

先生は「君達はよく勉強するが、みんな頭だけで受けとめてゐるのではないですか。本当にわかるといふことは、しみじみと感ずることなんです。そんなわかり方をする、それから生活態度が変わって行くんですよ。さういふわかり方をしなければ駄目です」と力を込めて言はれ、四月二十九日の天長節に、それ迄は自分だけで天皇様を思ってをればよいと考へてゐたが、今年は近所の家々に全然日章旗が立ってゐないのを見て「とてもさびしかった。この日から自分だけが天皇様を思つてゐるだけではだめだとしみじみ感じた」と切実な体験を話された。

更に、学生時代のことを思ひ起こされながら、若い時に我を忘れて打ち込むことがないと本当に駄目な人間になると言はれ「生命を燃焼させなさい。そして、心の囁きを聞いたらすぐに行動しなさい。それは恋愛でも何でもいゝ。熱烈な恋愛ができない者は眞の愛国者にはなれま

せんよ」と訴へられた。生命の息吹きを感じさせない抽象的な観念の裡うちに若き命を費すことから脱却し、揺れ動く己が心のまにまに身を勞し心を尽す姿に真の人間の姿を見出されたのである。学生一人一人の顔をしっかりと見詰めながら語りかけてゆかれる先生の御言葉は、先生の心の底からの叫びであった。

第四日目の朝、住宅金融公庫参与の島田好衛先生が登壇され、「私の見て来た中国」と題してお話をされた。先生はこの七月に住宅事情視察のため訪中され帰国されたばかりである。

先生は、先づ現在の中国の国内の様子に触れられ、戦後すぐの中国が、過去百年の外国の支配から脱して国内が旭日昇天の意気に燃えてゐたのに比べて、活気がなかったと述べられ、「偉大なる共産党万才」とか『毛主席万才』と大書された立て看板が町の到る所に見受けられた。夜になると街灯が少ないため、商店街でさへ日本の様には明るくなく、街中がとても暗い。また、食糧事情が悪いため、工場などで働いてゐる人は元気がなく、やっと働いてゐるといふ風である」と中国の生の姿を、二週間の中国視察で見聞されたことを織り込みながら話してゆかれた。

次に、今後中国がどうなっていくのかといふことについて「『中国は、今世紀末にはヨーロッパの先進国の前列に並ぶんだ』と言つてゐるが、学校制度が充実してゐないため人材が少なく、とてもさう簡単にはできないのではないか。その上、中国は今後とも二十回でも三十回で

も革命をやつて目指す共產主義國家を樹立すると言つてゐるが、果して人間の本質を根本的に變へることができるだらうか」と現在中國が試みようとしてゐることが根本において重大な過ちを犯してゐることを指摘された。

最後に先生は「茫漠たる中國に比べ、この緑の日本は本当に我々の祖先が生き且つ死んだ國である。我々が護つていかなければならない國である」と述べられお話を終へられた。

続いて、亜細亞大學教授・夜久正雄先生が登壇された。先生は、「今上天皇のお歌について——和歌と學問」と題し、ものを学び自らの生き方を問ひ正してゆくべき學問の道と和歌との関連を論じられた後、今上天皇のお歌を紹介された。

先生は、歌は目に見えぬ人の心の姿を言葉によつて表はすものであり、「無限の世界から言葉拾つてくるといふことは、とりもなほさず無限の世界に入つてゆくことである」と述べられ、無限に広がりゆく心を育むことこそ學問の根本でなければならぬと言はれ、その中心に和歌があると述べられた。更に、班別輪讀で讀んだ黒上正一郎先生著「聖德太子の信仰思想と日本文化創業」からその一節を引用されて、聖德太子の歩まれた道を、その志を明らかにしつつ辿つてゆく中で、自分もさう生きてゆかうとするところに本當の聖德太子研究があると述べられ、人生そのものを対象とする學問研究は、單に概念理論の研究に止らず「研究者自身が自分の体験をかへりみながら心の中に氣づかさされ、開かれた信念と告白とを内容とすべきもので

ある」と説かれた。

そして御歴代の天皇方が古来からこの道を踏み行なはれてゐる事実を指摘され、明治天皇、今上天皇の御製を紹介され、一首一首を細やかに天皇の御心を偲ばれつつよんでゆかれた。さらに先生は、天皇制を論じるときに、ルイ十四世と天皇様をあたかも同じやうにうけとり、概念的に理解しても決して天皇の御存在の眞の姿を知ることとはできないと言はれ「お歌をよみ味はふことによって、天皇と国民の繋りを実現し、その繋りこそが国の基であることを確信してほしい」と訴へられた。

最後に、昨年フォード大統領が訪日された折、帰国の途に着かれる大統領をお送りされた時の今上陛下の

米国大統領の初の訪日

大統領は冬晴のあしたに立ちましぬむつみかはせしいく日にちを経て

といふ御歌を紹介されて「このお歌は朴直といふか素朴といふか、万葉以前の歌のやうで、まごころそのままです。このお歌のお心をお偲びして欲しいと思ひます」と述べられ講義を終へられた。

夜久先生の御講義の後昼食をすませて記念撮影のため全員広場に集まった。この時長内先生が、昨日お話された折演壇の上に一参加者の手よって添へられてゐたゆふすげの花を持ってこ

「ゆふすげの花」を説明される長内先生



られ、ささやかなことだけでもその温かい心遣ひに感謝したいと言はれた。野の花が演壇の上にあったことに気付かなかった人もゐたが、ぎっしり詰まったスケジュールが今日迄順調に進んでこられたのも、参加者の協力もさることながら、このやうにホテルの従業員の方々や事務局の方々をはじめ多くの人々の見えない所での心遣ひと努力があったからだといふことを今さらのやうに思った。

間もなく文芸評論家の**福田恆存先生**が到着された。先生と一緒に全員で記念撮影をした後大講義室に戻り、待ち望んでゐた**福田先生**の御講義を拝聴した。演題は「現代の病根―見えざるタブーについて」であった。

先生は「民主主義」や「平和」などの言葉が人それぞれで都合のよいやうに使はれてゐる、と現在言葉が非常に混乱してゐることを指摘された後、原始社会あるひは未開社会に於いて或る言葉や行為に触れることを「タブー」として禁じる慣習があるやうに、現代社会においても

同様の現象が見られると言はれた。ここで先生はクアラルンプールでの人質事件に触れられ「現代人は人命尊重といふ言葉を疑ふべからざる価値のあるものと考へ、それがあたかも真理であり、正義であるかのやうに考へてゐるが、そこに現代におけるタブーがある」と言はれ、人命が尊いなら、何故尊いかを問ひなほすことなく安易な観念ですべての事を処理しようとする現代の風潮を厳しく批判された。そして「人間が尊いのは自己の生命を犠牲にしてまでも、一つのことには献身できる」が故であると教示された。更に「言論の自由」「合理主義」などの言葉をあげられ、現在はこれらの言葉がすべて否定し疑ふことができないタブーとなつてをり、さらにそれらがタブーであるとの意識されにくいために一層拘束力を強くしてゐると指摘された。

日常屢々使はれるこれらの言葉が「見えざるタブー」となつて我々がものを見たり、考へたりしてゆく上で、いかに大きく判断を歪めて了つてゐるかといふ御指摘には目を覚まされる思ひがした。

最後に先生はタブーを破る一つの方法としてヒューモアがあると言はれ、これは「堅苦しさをとく潤滑油のやうなものであり、対象から一歩離れて余裕をもつてものを見ることによつて初めて発揮される」ものであり、この様に対象から距離をもつて「客観的に見ることの中にこそ、知らず知らずのうちに我われが信じこんでゐるタブーを見抜く秘訣がある」と述べられ御

講義を終へられた。

班別輪読・班別討論及び和歌創作

既に述べたやうに本合宿においては、七、九名からなる班を基本として相互の研鑽がなされたが、その一つとして〈班別輪読〉があった。テキストは、第一日は「日本への回帰・第十集」、二日目からは黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」であった。黒上先生の御本は聖徳太子の御事業を、その悲痛深刻の人生体験を偲ばれつつ説き明かされたものである。

最初に皆で声に出して読み、そのあと一文ずつそこに込められた著者の思ひに迫りつつじっくり読み味はってゆく。難解だと感じながらも、力を合はせて読み進むうちに、一人で読んだら見過ごしさうな言葉に深い意味が込められてゐることに気付かされた時、その言葉の重みをつくづく感じるのである。書物を読むことは我々が日常行なふことであるが、それが自分の生き方を問ひ正してゆく確かな経験となることはなかなか少ない。我らは輪読によって聖徳太子の人生の一端に触れ得たと共に、書物を読み味はふとはどのやうな事なのか、改めて考へさせられたのである。

各先生の講義のあと一乃至二時間〈班別討論〉の時間が設けられ、講義の中で先生が一番言はれたかったことは何か、そしてどういふ所に自分は一番心を動かされたかに論点を絞って討論が進められた。初めのうちは初対面同士といふこともあつてか発言も少なく、また先生の言葉を借りてきて勝手に解釈し、上調子な議論に陥ることも屢々であつた。しかし、さうした中で、自分の思つてゐることを自分自身の言葉で一生懸命に訴へる友の姿を見た時本当に心を動かされ、友の一言一言が強く響いてくるのであつた。そして、友の話を聞き自分の思ひを正確に友に伝へることの難しさを改めて痛感させられたのである。班別討論は回を重ねる毎に熱気を帯びていった。時に反発しあひ、また共鳴しあひながら、参加者相互の交流は次第に深められていった。

班別輪読・班別討論と共にこの合宿で相互の研鑽のもう一つの柱となつたのは〈和歌創作〉である。創作に先立ち、九州大学医学部大学院生・医師の**前田秀一郎先生**（昭和四十八年九大医学部卒）によつて和歌創作導入講義がなされた。

先生は、学生時代始めて和歌に触れられた時の経験から話を始められ、最初は歌をよんでも友達が言ふほどには心を動かされなかつたが、自分で歌をつくり、友らと互ひに批評し合ふことによつて「自らの内心を省みるやうになり、歌を詠んだ人の心と通ひ合ふことができるやうになつた」とその時の感動を話された。

ついで、大東亜戦争においてオーストラリアのシドニー湾内で壮絶な戦死を遂げられた松尾敬宇中佐の御母堂であられる松尾まつ枝刀自のお歌を紹介され「歌とは、人の心と心の間に架けられた見えざる橋であり、孤独な生をつなぎとめる絆です」と述べられた。松尾中佐の歌、松尾まつ枝刀自の歌は、ほとんどの参加者がこの講義で初めて知ったのであるが、子が親を慕ひ、親が子を思ふ温かい心に深く心を打たれたのであった。

最後に先生は和歌をつくる上での基本的な事がらについて説明され「感じたままをありのままに詠むやうお互ひに努力しませう」と励まされた。

講義の後参加者全員は七台のバスに分乗していよいよ和歌創作を兼ねて阿蘇中岳の登山に出かけた。三十分もするとバスはもう山の中腹まで登り、遠くにカルデラの平野に点在する家々が見えた。草を食む牛や馬の群れを見ながら山の斜面にそって曲りくねりながらのびてゆく山道を走り、やがて中岳のすぐ近くの休憩所に到着、徒歩で噴火口まで登った。大きく開いた火山からは白い噴煙が湧きあがり、雄大な阿蘇の景観の中で合宿の疲れもしばし忘れる思ひであった。中岳をおり、途中草千里に寄り休憩して帰路についた。皆の作った歌は諸先生方、事務局の方々の徹夜の作業で翌朝刷り上がり全員に配付された。

第四日目の夜、第一日目に登壇された山田輝彦先生が、この歌稿を手を再び登壇され、中から十数首を選び、作者が詠まんとしたところかどこにあるかに留意して一首一首の歌を批評、

添削されていった。かうして作者の気持を正確に表はしてゐない言葉や、意味を間違つて把へて使つてゐる言葉が少しづつ直されてゆくと、それまではぎこちなかった歌もすっきりとして生き生きした歌になった。先生の批評はユーモアに溢れ、講義室は度々爆笑の渦が湧き、なかなか雰囲気の中にも、一人の歌に全員が注目し、作者の気持ちを推しはかりながら心を寄せて行くといふ経験は、日頃の大学生活では感じることのできない貴重なものであった。

この後、それぞれ班室に戻り、班員一人一人の歌を全員でよみ味はひながら相互批評を行った。

青年研究発表

第二日目の夕方、学生時代にこの合宿に参加し、以後後輩の学生と共に相互の研鑽指導に当たつて来られた国民文化研究会の若い会員による〈研究発表〉が行なはれた。

最初に大阪大学大学院生の東中野修さんが、卒業後「短歌のすすめ」（国文研叢書12）を讀み、その中にある陛下のお歌に強く心を動かされたときのことを話され「陛下の御歌を拝誦することを学問ではないとして片付けてしまふことはとんでもない間違ひです。学問をするといふことは本当に物事に感動することであり、生命あるものが生命あるものに感応することが

その根底になくはならない」とドイツの歴史学者マイネッケの言葉を引用しながら述べられた。

続いて登壇された鹿児島県立高尾野小学校教諭の内山なな子さんは、大学一年生のときこの合宿に参加し、生き生きとものに感じることの大切さを感じ「それからはできるだけ虚心に自分の廻りのものを見るやうにしました。かうして、感じることの難しさと、喜びをほのかに知るやうになりました」と述べられ「子供達と毎日を過ごしていくうちに、子供達のうちつけな心に触れてハッとさせられたことが度々ありました。扉をたたけばすぐ開くやうな心のやはらかな子供達を伸び伸びと育ててゆくことが私の第一の務めであると思つてゐます」と日頃の教師としての生活を振り返りながら話してゆかれた。

最後に、九州大学歯学部附属病院勤務の吉田哲太郎さんが登壇され学生時代にこの合宿に参加し、侍従次長の木下道雄先生の御話によつて「今上陛下と国民との間にたとへやうもなく美しい心のふれ合ひがあつたことを初めて知りました」とその感動を語られた。そして、陛下の御歌に触れられて「このやうに陛下の生き方に接し、一人ひとりがこだはりを離れて共に手を取り合つて生きてゆけるといふことを知つた時、私は日本の国に生まれたことを本當に有難いことだと思ひました。この美しい日本を本當に立派な良い国にしてゆかうと願ふ時に、それを實現してゆく力は、この陛下の御気持ちに依へてゆくところから生まれてくるものと信じま

す」と力強く訴へられた。

(以上三名の先輩の発表について、詳しくは本書中に掲載されてゐる青年研究発表記録をお読み戴きたいと思ふ)

第三日目の夜、急遽日程を変更して海上自衛隊勤務の太田文雄さんに登壇して戴いた。

太田さんは、米留学中多くの米軍人に接し、ことあるごとに「あなた方は一体アメリカの何を守るのか」と問ふてみると、若い水兵などはさうではないけれども、年輩の軍曹や士官になると「われわれの生活様式」とか「米國憲法の精神」とかいふ明快な答が戻ってきた。しかし、日本では、守るべきものは国土・国民・主権だといふやうに教へられてゐる。だがこのやうな曖昧な概念を我々は生命をかけて守れるだらうか。どこの国にでもあるやうな法的概念ではなく、国民精神の中核的な精神がなければ生命をかけて守らうとする気概が生まれてこないのではないかと言はれ、海外で生活して気付かされた日本文化の特質について話された。則ち、西欧流のものの考へ方が「白か黒か、あるいは善か悪かといふふうにより二者択一式的である」のに対し我國のそれは「完全なものを敢へて求めようとしない、あいまいさ」をもつてゐる「しかしこの『あいまいさ』の中に、複雑な人間生活を科学的な論理によって割り切つて考へようとする西洋流のものの考へ方に欠落してゐる『人間性』を見出すと言はれた。にも拘らず、戦後三十年が経つた今日においても未だに西洋文明を模倣し、無条件に受け入れてゐる国内の現



壇上の太田文雄先輩

く、ただ外国文化を模倣してゐたのではやがて他国の隷属国になつてしまふ。国が滅ぶのは外敵から侵略されて滅びるといふよりも、国内が乱れて滅ぶ場合が多い」ときびしくと指摘された。

最後に「日本人としての主体性を回復し、真に誠の情操と知力と意志とを回復することが日本の真の独立を確保し、ひいては国を守ることに繋るのではないか」と力強く訴へられた。

状を批判され「外国人が日本の文化や伝統などに敬意を払ひ、高く評価してゐるのに、当の日本人がこのすばらしさを発見できず、見直さうともしないやうなことでいいのか。アメリカにはリンカーンの『人民の人民による人民のための政治』といふ言葉に示されるアメリカン・デモクラシーなる精神があるが、日本にもこれに勝るとも劣らぬ崇高な精神が聖徳太子や古事記、五箇条の御誓文の中にある」と言はれ、「独立した批判精神もな

慰霊祭

合宿第三日目の夜慰霊祭が執り行はれた。最初に国文研の朝永清之先生より慰霊祭についての説明があり、そのあと全員広場に整列した。ホテルの方の御好意により全ての部屋の灯が消され、闇の中に虫の音だけがこちよく聞こえてくる。既に設置されてゐた祭壇の両側に篝火が焚かれ、長内俊平先生がお祓ひに代へて、故三井甲之先生の御歌

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

を心を込めて二度高らかに朗詠された。続いて「戦時平時を問はず日本の国を守るために尊い生命を捧げられた全ての祖先の御霊」をお呼びする為一分間の黙禱が捧げられた。祭壇には海の幸、山の幸が供へられ、国文研副理事長・宝辺正久先生によって御製が拝誦される。国民を思はれる天皇陛下の深きみ心をそのままに表現されたるみ歌の澄みわたるやうな調べは、無数の先人たちの悲しき思ひをきつと安め慰めたことであらう。次に小田村寅二郎先生が合宿参加者を代表して祭文を奏上され、全員で「海ゆかば」の歌をうたつて祖先の御霊をお送りしたのであった。

次に慰霊祭において拝誦された御製ならびに祭文を記し我らが学びの道の稟しほりとしたい。

明治天皇御製

湊川懷古

あた波をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ

披書思昔

のこしおく書よみをしみればいにしへの人の声をもきくこゝちして

誠

ことのはにあまる誠はおのづから人のおもわにあらはれにけり

をりにふれたる

国のためうせにし人を思ふがなくれゆく秋の空をながめて

神祇

国民くにたみのうへやすかれと思ふにもいのるは神のまもりなりけり

月前薄

はるくくと風のゆくへの見ゆるかなすゝきが原の秋の夜の月

今上天皇御製

折にふれて

海の外の陸くわに小島にのこる民の上安かれとただいのるなり

七十歳になりて

ななそちを迎へたりけるこの朝も祈るはただに国のたひらぎ

よろこびもかなししみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそち

祭文

昭和五十年八月九日土曜日夜八時、いま、われらくぬちのをちこちゆ集ひて、ここに第二十回学生青年「合宿教室」といふ、学びの道にいそしむ者ら四百二十二名は、しきしまのやまと島根みんなみの、南にそびゆる九州・阿蘇山の麓、日暮れてユフスゲの花開くといふ大きなカルデラのはとり、「阿蘇の司」なる、いで湯の宿舎の庭に集ひ相寄り、ここを、今宵のみたまつりのにはと定めまつりて謹み畏み、み魂よばひまつれるみ祖はらからのみたまのみ前に参加者一同に代り小田村寅二郎謹み畏み敬ひて申さく、

遠たきいにしへより、言の葉の幸さきはひ来にしこのやまとしまねに、語り継ぎ言ひ継ぎにける言こと霊だまの、幸はふこの国に生きたまひて、このみ国のいのち、祖国日本のいのちのとこしへならん

ことを祈りたまひて、神あがりあがりましぬる亡きみ祖^をたちのみたま、また、明治の御代よりこのかた、いくたの外国^{とくに}との国の交はりを深め、ときには、やむなき祖国防護の日清・日露の両戦役、第一次世界大戦、大東亜戦争など、もろもろの戦ひに雄々しくも出でまし、かなしくも護国の鬼となりたまひし、亡きいくさびと・同胞のみたま、また、在りましし日にわれらが得難き友たりし友らをはじめ、みくにをまもりさかゆかしめんと、その生涯を捧げましし数知れぬ、みたまのみまへに、ささやかなれども、海の幸・山の幸・くさぐさの品をそなへまつり、み霊^{なご}和めのみ祭りを仕へまつらんとす。

ここに謹みて告げまつらくは、この美はしきやまとしまねを、とことにはに栄えゆかしめむと祈るわれらは、たまきはるいのちをこめて汝^{いまし}みことたちのみ心を偲び、汝^{いまし}みことたちの遺したまひし、みいのちのこもれる数々のみ言葉を学び、そを、われらがこころに生き生きと甦^{よみが}へらせつつ、さまざまに乱れてある現^{うつ}し代のまがごとを、誤^{あやま}ることなく、見分け見分けつつ進みゆかむと誓ひまつる。

今よりのちは、われらは、学び舎にあるものは、その学び舎に学びの道の正道^{まさみち}をおほし立て、教へにはにあるものは、その教へにはに教への道の正道を呼び起し、おのおのものつとめにはにあるものは、そのつとめにはに、まごころの往きかふ道を拓きゆかなむと、かくともどもに誓ひあひつつ、このしきしまのやまとのくにを、いやつぎつぎに伝へゆかなむ

ことよしを、いましみことたちきこしめしたまへ。

天がけりますいましみことたちのみ霊よ。

み民われらもろともにまめやかにわがすめらみことの大御心を偲びまつり、やまとことばの雄々しく美しくゆき交ふさだめを心に印し、みくにのいよよさかく道^{しる}を切り拓かんをみちびきたまへ守らせたまへと、謹み敬ひ畏みて申す。

○ ○

第五日目。合宿教室も愈々最終日を迎へた。指揮班からの朝の放送に目を覚まし、洗面をすませて全員急いで広場に集合。国旗掲揚のあと朝のすがすがしい空気を胸いっぱいにしてラジオ体操を行った。思へばこの四日間、一日一日が緊張の連続であった。しかし、皆の顔にはその疲れよりも残された数時間を精一杯力を尽してゆかうとの気迫が表はれてゐた。

第五日目の日程は片岡健合宿運営委員長の所感発表



御製を拝誦される宝辺先生

に始った。片岡さんは「一つの団栗の実が大きな樫の木になる力を持つてゐるのです。この合宿で感じとったことを自分の心の中だけにしまっておくのではなく、今後の生活に積極的に生かしていつて戴きたい」と訴へられた。

次の「全体意見発表」では各参加者がつきつきに挙手して登壇し、潑刺とした口調でその思ひを発表した。

鹿児島大学 篠田哲秀

壇上にのぼりし友はひたすらにあつき思ひを語り続ける

ひたすらに己が思ひを語りゆく友のみ声のかすれがちなる

このあと、**小田村寅二郎先生**が登壇され「合宿をかへりみて」と題してお話をされた。先生は講義や班別討論・班別輪読とともにこの合宿の大きな柱をなした和歌創作について「苦心して歌を作り、それを多勢の友達にみてもらひ自分では気付かないでゐたことを教へてもらったといふことは、それらの人たちの力を貸りて自分の心が磨かれ、より立派なものに成長していくといふすばらしい経験をしたといふことです。そして、更には万葉集をよめば万葉時代の人たちとつき合ふことができる、さういふ力を得たといふことなのです」と言はれ和歌によって古今の人々と心を通はせ、より広やかな世界に我らが生き得ることを教示されたのである。そして、「天皇といふお方も御自身の内心を歌といふ客観的な形に表はされて、それを直視さ

れ、これでいいのかと自らの御心に問はれるといふ人間の修業として最も厳しいことを一生懸命に行なつてこられた方なのです」と心を込めて語られた。

最後に、先生は人間社会には様々な形態の団体があるけれども「お互ひに欠点だらけの者が集つてゐるのだから、力を合はせる以外にはないといふ気持で営まれたのがこの合宿教室でした」と言はれ「心を一つに寄せ合つて互いに信じ合ひながら生きてゆけるのが日本の国柄なのです」と日本の国のあるべき姿を示された。

小田村先生のお話のあと全参加者はそれぞれの班室に戻つて四泊五日間の合宿を振り返りながら感じたこと、思ふことを感想文に書き、第二回目の和歌創作を行った。

精魂を傾けてきた合宿教室もついに閉会式を迎へた。参加者全員で、君が代を力強く斉唱したあと、合宿教室の主催者を代表して夜久正雄先生が挨拶された。先生は四百数十名の全参加者、ホテルの方々、阿蘇の天地の恵み、これら全ての力によつてここに限りない精神の世界が実現されたことに對し感謝したいと述べられ、「ここに会は閉ちますけれども、ここで経験したこの広い大きな精神の世界は閉ちることなく、我われ一人一人の心の中にあつて我われの進んでいく道をおし進めていくてくれるはずですよ」と結ばれた。ついで参加学生を代表して広島大学文学部三年の一場茂樹君が「この四泊五日間を一緒に過ごして、全く知らなかつた者同士が本当に信頼し合へる友達となれたことは非常に貴重な経験だつたと思ひます。山をおりて

も、この合宿教室で学び得た一つ一つのこと、一人一人の友達を大切にしていって、この絆きずなをより太くしていきたいと思ひます」と力強く挨拶した。

続いて、大学教官有志協議会と国民文化研究会の諸先生方が壇上におあがりになり、学生・青年の参加者との間に「ありがとうございました」の挨拶が交され、参加者全員で三井甲之先生作詩、信時潔先生作曲の「進めこの道」をうたった。

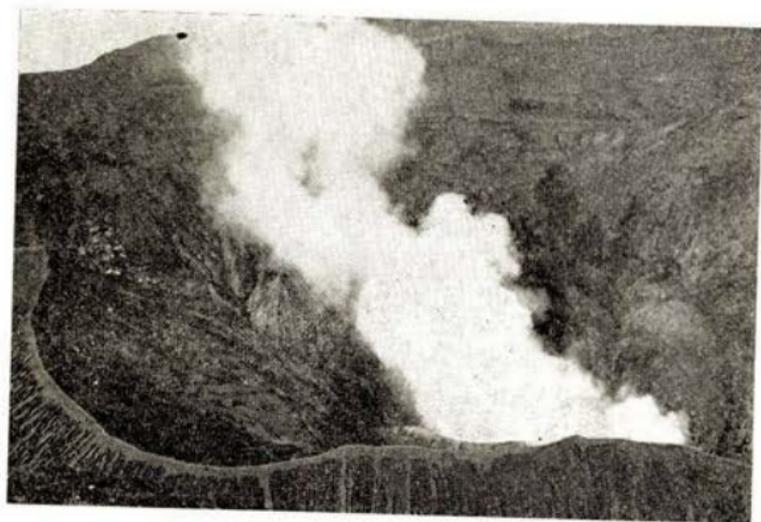
最後に、九州大学工学部四年の末次直人君が閉会を宣言し、ここに、第二十回「学生青年合宿教室」は幕を閉じたのである。

鹿児島経済大学 宇 都 俊 二

友だちと心開きて語りたるがなごりをしきかな
離さかりゆくいまは



合
宿
歌
集



登り行くなだらかな丘一面に草萌えいでて野の花は咲く
東京農業大学 中溝義之

頂きに登り来れば霧は晴れそよふきわたる風のすずしき
東京大学 豊岡俊彦

切り立てる火口の壁は幾重にも地層しるけく走りて美し
熊本大学 折田豊生

そそりたつ岩肌見ゆる山頂は静かに雲の中に消えゆく
国学院大学 岩越松男

幼き日阿蘇の火口をつれられて父と歩きしときのなつかし
熊本大学 新谷洋二

火口より静かにのぼる白煙にこの大阿蘇の息吹を感じず
長崎国際経済大学 大屋義弘

岩肌に所狭しと群れ生ふる草木に尊き命を感じず

牛たちののどかな姿ながむればつかれし心の癒やさるるかな
亜細亜大学 須田清文

草原で乳ふくまする母牛は子牛にたかる蠅払ふなり

賢明女学院短期大学

宮本悦子

九州大学

原田美恵子

阿蘇山の深き火口の底ひより白き噴煙のたえまなく出づ

鹿児島大学

堅山ひとみ

店先の赤き小さなぼっくりに思はず目を止め走り寄るなり

溶岩でつくりたるてふぼっくりを故郷で待つ友に買ひたり

山口・松陰学園教頭

児玉惇爾

いつの日か家にまつ子らをともしひて見せてやりたし阿蘇の雄姿を

大豊工業(株)

木内寿翁

褐色の岩根の底ゆ噴きあぐる白煙うねりて雲と消えゆく

○

鹿児島大学

高梨幹孝

たからかに読みあげらるる天皇の御歌にふれてからだふるへる

鹿児島大学

鎌田浩次郎

遠方の岬の民に心はせすめらみこと天皇の手を振られける

御姿おんすがた心にうかべおもはずも心たかまり身ふるへたりき

沖合の天皇と岬の民と言葉なくして心かよへる

京都産業大学 仁井田 耕 一

天皇の御製を聞きて

諸人の幸せ祈る御心を初めて知りし君の御歌に

鹿児島大学 生 駒 ちかえ

大御心知れば知るほど今の世のかなしき姿に心痛みぬ

鳥取大学 下 中 雅 仁

松尾中佐の話を書き

シドニーで壮烈に散りし君なれど手帳に花を留め置きけり

たらちねの送り届けし草花を手帳にはさみ失せし君かも

比ぶれば令はいくだも変はらねど荒海に散りしやさしき君かも

国おもひ母をおもひし益良夫の心をしのば涙こみあぐ

亜細亜大学 佐 藤 晴 章

松尾まつ枝刀自の御歌を読み

子を思ふ深きみ母のいつくしみ胸にこみ上げ涙もよほす

戦ひに子を送り出し帰らぬも永遠に寄り添ふみ母のこころ

敏子姉の思ひや如何に汝が君の帰らぬ悲報聞きしその時

福岡教育大学 北島佳代子

離れをれどかくまで通ふ母と子の御歌をききて涙こぼるる

吾が子をばひたすら思ひ思はるる御母の思ひに胸のつまりぬ

年経りて老いゆく身なれどひたすらに御子を思ひて過ごしますらむ

人の世の母の思ひはかくまでに尊きものと胸に迫りく

日本大学 持田敬子

人の世の悲しみ越えて国守る猛き心に涙あふるる

亜細亜大学 増田利一

師の君の身にせまるごとき御言葉に自づと胸があつくなりゆく

熊本大学 窪辰郎

長内先生の御講話を聞きて

天皇誕生日に国旗をあげぬさびしさを身をふるはず如く訴へ給ひぬ

本心に心の動きし時ならば身のふるへると語り給ひぬ

若きうちは我を忘れてやれといふ師の御言葉は力強しも

亜細亜大学 杉山勝久

小田村先生の御講話を拝聴して

ひたすらに国のまことをつたへむとその言の葉に熱のこもりて
言の葉に力を込めて説き給ふ師の御姿に心うたるる
すこしでも師の御言葉に学ばむと眼こらして耳かたむくる

大阪大学 三宅立美

厳しさの中にも国を思ひたまふ御心感じぬ師のひと言に

岡山商科大学 河上正昭

御教への深さに触れて我もまた学びの道をふみゆかんと思ふ

鹿児島経済大学 宇都修一

内山さんの青年研究発表を聞きて

先輩は感ずる心を大切に幼き子らに教へられしも

ひたすらに己が思ひを語らるる先輩のまなざし輝きてをり

鹿児島大学 永田良子

壇上に立たれし先輩の姿みればわがことの如胸ふるへたり

こころこめ話さるるともの言の葉をさきもらさじと聞き入りにけり

話終はり一斉に拍手おこりたればあつき思ひのこみあげてくる

師の君の語りたまへる御言葉におもはず我身の震へきたるも
鹿児島大学 前 園 由美子

○

朝露にぬれてすがしき草原に雄々しく聞こゆ友の号令
西南学院大学 馬 渡 賢 一

鹿児島大学 村 田 研 史

朝の集ひにて

朝露にさやかにぬるる小草ふみ御旗を持ちて広場へ急ぐ
日の御旗揚ぐる準備を整へて友らを待てば虫の音しげし
幾度も練習せしこと思ひたれば握るロープに力のこもる
君が代にうまく合へよと願ひつつ朝の集ひに御旗を揚ぐる

福岡教育大学 味 酒 景 子

光満つ朝の広場に友どちとのぼりの御歌をあふぐすがしき
はげしかる雨にも負けず文字もしく立ちるたりけむ御歌ののぼりは
友どちの力あはせて立てまししのぼりすがしく風にはためく

亜細亜大学 高 野 敏 彦

友どちはけふの講義の感激を手振り身振りで一心に語る

岡山理科大学 村上朋三郎

ぼつぼつと出てくる言葉とだえても心こもれり友の言葉は

自信なけれど思ふがままに語らむと云ひ出づる我に寄する友の眼

何ひとつ定まる思ひあらねども感ずるままにわれ語るなり

広島大学 一場茂樹

口数の日頃少なき友なれど寮の話をいきいきと語りぬ

口数の日頃少なき友なれど胸の思ひはあつきものあり

鹿児島大学 居細工豊

み友らが並びて寝たる部屋内に水銀燈の光さしこむ

青白き水銀燈の光浴びて友の寝顔はやすらげくみゆ

富山大学 高喜久男

床並めて友の顔みつめ語らへば胸はときめき話はずきず

千葉敬愛短期大学 川尻友子

初めての友と語りし合宿のこの思ひ出は永遠に忘れじ

初めて会ひたる吾に友みなはへだてもなしに語りてくれたり

東和大の南君を送る

九州大学 浦田芳重

友どちと語り合はむと来たれども急の知らせに帰る友かな
朝早く帰りし友のさみしげな後ろ姿がまぶたにうかぶ

最後の夜

東京商船大学 井口幸久

うちとけしみ友らの顔しみじみといまさらのやうにじっとみつむる
一人づつ眠りに落ちる友ふえて虫の声のみしげくなりゆく

鹿児島大学 篠田哲秀

壇上へのぼりし友はひたすらにあつき思ひを語り続ける
ひたすらに己が思ひを語りをる友のみ声のかすがちなる

防衛大学 前田嘉則

短かかりし合宿なれどもおそはりしことを生かして共に学ばむ
もろ共に力あはせて護らなむこのすばらしき大和島根を

山口大学 国弘昭義

全体意見発表にて防大の友を語るを聞きて

演壇に立ちて歌読む友だちの白き制服心にしみる

国守る防人たらんと歌に詠む友の決意に血潮湧き立つ

東京大学 小柳志乃夫

防大生前田君の意見発表を聞きて

まっ白き制服を着て壇上に立ちたる先輩のみ姿雄々し

力あはせ国守らむとよみたまふ先輩がみ歌の胸に迫り来

日にやけしたくましき体ふるはせて作りたまひし歌よみたまふ

亜細亜大学 加藤ひとみ

全体意見発表の折、防衛大学の友が歌をよまれしとき

敷島の国つ守りの要なる友の御歌のなんとたのものし

我もまた共に守らむ敷島をすべはちがへど同じ思ひに

早稲田大学 飯島隆史

おたがひにはじめて知りし友なれど別るときはひたにさびしき

数日を過ごせし部屋にきこゆるは感想つづる友の筆音

わかれゆくときはせまりて言葉なく感想つづる友をみつめをり

福岡教育大学 森本幸夫

友だちと心かよはせ語りあひし合宿の五日まもなく終れり
友だちとわかれゆく時近づきて我も自づと胸のつまりぬ
壇上でふるへる声にて語りたる友の姿の雄々しく見ゆる

東京工業大学

皿田 宏

けんめいに四泊五日を努め通し疲れたりしもうれしかりけり

九州大学

宝辺 矢太郎

閉会式にて夜久先生の御挨拶を聞きて

こみあぐる熱き思ひに師の君の御顔定かに見えずなりゆく
ありがとうございますと話さるる師の御姿に涙こみあぐ

東京工業大学

大町 憲 朗

あわただしき別れの時に友だちは握手求めたり荷物おろして

榑高田工業所

永住 賢 二

別れゆく友の手強く握りしめいつかまた会ふ日をば約しぬ

○

下関・榑宝辺商店社長

宝辺 正 久

阿蘇にゆく車中

天地を裂きてつらぬく稲妻の光りあやしも夜の遠野に

大阿蘇のくらしきをゆけば大粒の雨降りいでぬ雷らいとどろきて

雨上れば汽車のあかりに映えてみゆ青き夏草目にしむばかりに

時折りに稲光りして満天の雲動く見ゆ阿蘇の国原

福岡教育大学教授

山田輝彦

山へ行く友ら送りてわが部屋にひとりしをれば虫のしき鳴く

二十はたとせをかくは生きつつ来りしか安らぐひまもあらぬ思ひに

やうやくにみ空ははれてうち靡く雲まきて立つ頂の見ゆ

にぎやかに笑みつ語りついまさむと山仰ぎつつ留守居すわれは

玉造温泉・榎こんや別館代表取締役

青砥宏一

よべまでも降りにし雨の今朝晴れて朝露ふみて集ふうれしき

さしのぼる朝日まぶしも晴れ渡るみ空仰ぎて広場に立てば

夏草の葉末におきし百千玉露ももぢたまの光れり朝日にはえて

広庭に友らとつどひ日の御旗あがるをみれば心すみゆく

朝礼のつどひ終りて人まれの広場にしげし虫のこゑはも

なつ草にまじり咲きたるうすものひるがほの花見らくさやけし

高杉のひとむらごしに阿蘇山の峯をかすめて雲のゆくみゆ

神奈川県箱根町温泉小学校教諭

岩越豊雄

草千里かなたの池の水の辺にたたずむ牛は動くともなし

雨あがり雲間のきれてくつきりとみどりしるけき阿蘇の山みゆ

美しとみしまもわづかに山頂に雲のわききて山かくれゆく

株講談社広告局

磯貝保博

一日の事務を終へて

友の来て講義の話はづめるを聞くは楽しく心なごめり

ときけばすでに夜ふけとなりぬれどあまたのことの残れり今日も

懶千代田コンサルタント

松田信一郎

前田秀一郎兄の和歌創作導入講義を拝聴して

壇上に兄は静かに立ちまして親しき面輪で語り給へり

せつせつと語ります兄の言の葉におのが心も導かれゆく

なきひとを偲ぶところを育めと心をこめて兄は語りぬ

海上自衛隊「たちかぜ」砲術士

太田文雄

昨年殉職した大矢先輩を慰霊祭に偲びて

ぬばたまの闇に天降りしみたまらの中にぞ君はおはしますらむ
八年前共にこの地につどひきて学びし君は今はいまさず
大空に散りしみたまぞとこしへにつづくわれらを見まもりたまへ

故松尾中佐を偲ぶ

（例）アジアビジョン

加部隆三

夏の夜に山鹿の里へ母刀自をたづねしことを思ひいだしぬ
道筋にあかりを持ちて立ちませる老媪まさに母刀自なりき
床の間にありし故人の胸像は白く気高く凛々しくありき
菊池なる社に友と朝早く詣りぬ中佐の銅像もとめて
ふるさとに近き社の高台に立ちませる中佐その姿はも

事務局・鹿児島高校二年

山口公徳

真夜中の寢床に友と語りつつ親のありがたき身にしみて思ふ
一日の仕事を終へて休みつつ友と語らひ心慰さむ

（小柳左門選）

あ と が き

第二十回合宿教室において特に柱になったものは、現代の学問のあり方に対する根本的な問ひかけであった。学ぶといふことは、その言葉の成り立ちからしても「まねる」ことであり、先人の道を我と我が身に実践する全生命的な営みでなければならぬ。「学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや」といふ著名な孔子の言葉も、先人との出会ひのよるこびの直接的な表現であった。だが現代ではこのやうな学問の姿は見失はれ、学問とは、出来る限り主観を排除し、客観的なデータによって物事を分析整理する、いはゆる科学的操作とイコールになってしまった。

このやうな科学の分野が、自然科学の飛躍的発達に伴って、著しく重視されてゐるのは、それなりの理由もあらうが、だからといって、科学がそのまま学問であり、学問のすべてが科学であるといふ風潮に対しては、われわれはきびしい批判を用意しなければならない。学問≠科学、さういふ錯覚の上で大学における学問の中から、いかに人間的情感の訓練が排除されてしまつてゐるか。日本の学生として、日本の青年として生きるこの意味についてもいかに等閑に附されてしまつてゐるか。かくて青年の胸にたぎる求道のおもひも、その出口が与へられないままに、いたづらに枯渇しつつあるのが現状である。躍る心で大学の門をくぐつた学生たちがいかに満たされぬおもひのままに大学生活を送つてゐるか、一國の興亡のすべてが教育にかかつてゐるといふ厳肅な事実を思ふ時に、かかる事態が一刻も放置出来ないことは誰の目にも明らかなるであらう。この書物を手にされる方が、学問はいかにあるべきか、大学は今のままでいいのか、さういふ一貫した問ひかけを本書の中にお読みいただければ幸である。

なほその問題にさらにとりくんでいただくために、前回の合宿教室（第十九回、於霧島）における小林秀雄先生の御講義が「日本への回帰」（第十集）に収められてゐるので是非とも併せ御一読いただきたいと思ふ。

今回の装幀は前回にひきつづき福岡在住のデザイナー平山喜文氏によるもの。見出し頁のカット写真は大阪芸術大学一年の伊藤嘉亮君を煩はして大阪の観心寺をはじめ湊川、四条畷、吉野に楠木正成、正行父子にゆかりある写真を撮影していただいた。紙面をかりて心からお礼申し上げたいと思ふ。

今年の第二十一回の合宿教室は、昨年と同じく八月七日から十一日迄、従来の開催地とは異り、西海国立公園の九十九島の景観を一望におさめる佐世保、弓張岳頂上の、弓張観光ホテルにおいて行はれることになつてゐる。講師としては、前年にひきつづき、世界経済調査会理事長、木内信胤先生に御登壇をいただく外、内外ニュース社長、長谷川才次先生、この合宿には三回目御登壇の文芸評論家村松剛先生の御来講が決定してゐる。六月十日から受付を開始するが、参加希望者は七月十日迄、東京都中央区銀座七の十の十八、柳瀬ビル内、社団法人国民文化研究会あてに申し込んでいただきたい。全国の心ある学生青年と一堂に会して、ただならぬ世情のただ中、日本青年の生くべき道を心肝を吐露して語りあふその日を切に望みつつ編集の筆を擱く。

昭和五十一年三月

山田輝彦
小柳陽太郎

社団法人 国民文化研究会関係図書目録

A 先師・先輩の遺著

書名	著者・編者	発行年月日	版・頁数	頒価
聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業 (増補再版本)	黒上正一郎	四四・一〇・一五 (現在四版)	A 5判 三〇四頁	〒一、八〇〇円
憂國の光と影 ―田所広泰遺稿集―	小田村寅二郎編	四五・三・一〇 (在庫ナシ)	B 6判 五〇一頁	非売品

B 国文研叢書(新書判)

No. 2	No. 1	No.	書名	著者・編者	発行年月日	頁数	頒価
日本精神史鈔 ―親鸞と実朝の系譜―	古事記のいのち ―改訂版―			夜久正雄	四一・三・二五 (原版) 四八・一一・一一 (改訂版)	三〇七頁	〒七〇〇円 一、二〇〇円
				桑原暁一	四一・一一・二五 (在庫ナシ)	二七九頁	非売品

No.11	No.10	No.9	No.8	No.7	No.6	No.5	No.4	No.3
続 日本精神史鈔 一花山院とその系譜一	歐米名著邦訳(明治)集 一文献資料集一	歴史と人生観 一マルクス主義の超克一	日本思想の系譜 一文献資料集(近代その二)	日本思想の系譜 一文献資料集(近代その二)	日本思想の系譜 一文献資料集(近世その二)	日本思想の系譜 一文献資料集(近世その二)	日本思想の系譜 一文献資料集(古代・中世)	弁証法批判の歴史
桑原 暁一	小田村寅二郎編	川井修治	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木 尚一
四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五	四四・三・二五	四四・三・二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三・二五	四二・二・二五
三一〇頁	四八三頁	二八三頁	三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三一七頁	三〇九頁	二四一頁
非売品	〒五〇〇円 一〇〇円	〒六〇〇円 一〇〇円	〒七二〇円 一〇〇円	〒七八〇円 一〇〇円	〒七八〇円 一〇〇円	〒六二〇円 一〇〇円	〒六〇〇円 一〇〇円	〒五〇〇円 一〇〇円

回数	開催地 (人員)	年	書名	主要講師	版・頁数	定価
1	霧島 (九二名)	31	混迷の時代に指標を求めて	広田洋二・日下藤吾 夜久正雄	A5判 八八頁	〒一五〇円 〒三〇円
No.17	日本における —マルクス主義批判論集—		戸田義雄編	五一・三・一〇	三二〇頁	非売品
No.16	国史の地熱 —聖徳太子と楠氏の精神—		桑原暁一	四九・一〇・二五	二七九頁	非売品
No.15	白村江の戦 —七世紀・東アジアの動乱—		夜久正雄	四九・一・一〇	二八九頁	〒五〇〇円 〒一〇〇円
No.14	ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集		桑原暁一編	四八・二・一〇	三二八頁	〒五〇〇円 〒一〇〇円
No.13	短歌のあゆみ —続「短歌のすすめ」—		山夜田久輝正彦	四六・一二・一	三一六頁	〒三五〇円 〒一〇〇円
No.12	短歌のすすめ		山夜田久輝正彦	四六・四・一	三〇九頁	〒六〇〇円 〒一〇〇円

C 「合宿教室」レポート

9	8	7	6	5	4	3	(2)	2
桜島 (二〇二名)	雲仙 (二〇二名)	阿蘇 (二二五名)	雲仙 (三〇八名)	雲仙 (二〇〇名)	阿蘇 (一六〇名)	佐賀 (七二名)	岡山	福岡 (二七名)
39	38	37	36	35	34	33	32	32
新しい学風を興すために —第三集—	新しい学風を興すために —第二集—	新しい学風を興すために —第一集—	続々国民同胞感の探求	続国民同胞感の探求	国民同胞感の探求	民族の明日を求めて	民族復興の根底を培うもの	民族自立のために
小林 秀雄・広田 洋二 木内 信胤	竹山 道雄・木内 信胤 木下 広居	福田 恆存・木内 信胤 黒岩 一郎	小林 秀雄・木内 信胤 津下 正章	木内 信胤・花田大五郎 佐藤慎一郎	花田大五郎・中山 優 野口 恒樹	勝部 真長・木下 彪 森 三十郎	木下 彪・石村暢五郎 高木 尚一	竹山 道雄・高山 岩男 浅野 晃
新書判 二九八頁	新書判 二九八頁	新書判 二四八頁	B6判 三二五頁	B6判 四三三頁	B6判 三六五頁	新書判 二五〇頁	新書判 一三三頁	A5判 五三頁
三〇〇円 一八〇円	三〇〇円 一八〇円	二〇〇円 一八〇円	五〇〇円 一八〇円	五六〇円 二〇〇円	五〇〇円 一八〇円	二〇〇円 一三〇円	一〇〇円 二〇〇円	五〇円 二〇〇円

19 霧島
(五二八名)

49

日本への回帰

―第十集―

小林 秀雄・木内

信胤

新書判
三〇六頁

五〇〇円
一〇〇円

D 「合宿教室」感想文集（非売品）

（国民同胞感の探求三部作は「理想社」より刊行）

書名	編者	発行年月日	版・頁数
第十回 「合宿教室」参加者感想文集 三一五名	国民文化研究会編	四〇・一〇・二〇	A5判 八〇頁
第十一回 「合宿教室」参加者感想文集 二四〇名	国民文化研究会編	四一・一〇・五	A5判 一〇四頁
第十二回 「合宿教室」参加者感想文集 三三六名	国民文化研究会編	四二・一一・五	A5判 一二〇頁
第十三回 「合宿教室」参加者感想文集 三五三名	国民文化研究会編	四三・一〇・一〇	A5判 一一八頁
第十四回 「合宿教室」参加者感想文集 四〇三名	国民文化研究会編	四四・一〇・二〇	A5判 一三六頁
第十五回 「合宿教室」参加者感想文集 ―現代知性への警鐘― 四九一名	国民文化研究会編	四五・一〇・三〇	A5判 二一八頁

第十六回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	三〇二名	国民文化研究会編	四六・一一・一〇	A5判 一二六頁
第十七回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四〇二名	国民文化研究会編	四七・一〇・三〇	A5判 一六四頁
第十八回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四三三名	国民文化研究会編	四八・一〇・二〇	A5判 一七七頁
第十九回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	五二八名	国民文化研究会編	四九・一〇・三〇	A5判 二〇〇頁
第二十回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四三五名	国民文化研究会編	五〇・一〇・二〇	A5判 一六七頁

E 海外派遣レポート (非売品)

書名	編者	発行年月日	版・頁数
日韓・海と河の交流 (日韓交流レポート)	浜田 収二郎	四三・六・一	A5判 一二二頁
香港・マニラ・ミンダナオ巡訪団 レポート	川井 修治 田 収二郎	四四・一一・二九	A5判 八〇頁

F その他

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
(資料) 九州地区国立大学紛争の体験記録 — 教官側の発言 —	(昭和四十六年十月) 国民文化研究会	A5判 三三二頁	非売品
歌よみに与ふる書・他四編	正岡子規 (国民文化研究会発行)	新書判 一二二頁	(品切)
天皇と天皇制についての基本的思考	小田村寅二郎・夜久正雄 (斑鳩会発行)	新書判 一〇七頁	(品切)
今上天皇御歌解説 (附) 万葉集論	三井甲之 (斑鳩会発行)	新書判 一五七頁	(品切)
明治・大正・昭和 「謹選 詔勅集」	(斑鳩会発行)	新書判 八五頁	〒二二〇〇円
式典曲「神洲不滅」 行進曲「進めこのみち」	三井甲之作詞 信時潔作曲 — 日本学生協会の歌 —	A5判 各四頁	〒各一〇〇円

G 関係図書

書名	著者・発行者	版・頁数	定価

<p>新輯 日本思想の系譜(上・下) — 文献資料集 —</p>	小田村寅二郎編 (時事通信社)	A ⁵ (上)八五七頁 (下)九一二頁	上・下各 三、〇〇〇円
<p>日本思想の源流 — 歴代天皇を中心に —</p>	小田村 寅二郎 (日本教文社)	四 三〇五頁判	八五〇円
<p>THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN (国文研叢書 No. 1 「古事記のそと」の翻訳)</p>	(訳者) G. W. ROBINSON [THE CENTRE FOR EAST ASIAN CULTU- RAL STUDIES]	B 二〇八頁判	
<p>歴代天皇の御歌 — 初代から今上陛下まで二千首 —</p>	小田村 寅二郎 柳 陽太郎 (日本教文社)	四 四三六頁判	一、七〇〇円

H 月 刊 誌

誌 名	創 刊 ・ 号 数	版 ・ 頁 数	定 価
月刊「国民同胞」	昭和三十六年十一月創刊 昭和五十一年三月現在 一七三号	B 5 八頁判	年間 一、〇〇円 下 共
「国民同胞」合本 第一卷	第一号〜第五〇号		三卷揃 四〇〇〇円
同 第二卷	第五一号〜第一〇〇号		下 別
同 第三卷	第一〇一号〜第一五〇号	各卷四〇〇頁	(残部 僅少)

1 (分科会)・教育内容は正促進委員会編著

書名	発行年	版・頁数
現下の学校教育の内容を正すために急務を要する問題点	四十七年十二月	B5判・二五頁

— 日本への回帰 —

(第 11 集)

昭和五十一年三月二十三日発行

定価 五〇〇円

〒 一六〇円

編 者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小 田 村 寅 一 郎

発 行 所

社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇—一八柳瀬ビル

振替 東京 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします

